

---

# 良い子の味方

ふり

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

良い子の味方

### 【NZコード】

N7293W

### 【作者名】

ふり

### 【あらすじ】

幼いころの母親の影響から、保育士を目指している明るく元気な江里口爽奈。

病気から回復し、1歳年下の爽奈と同じ学年になった円城寺侑治郎。

このふたりの視点を中心に、爽奈の3人の友人とともに繰り広げられる保育士専門学校の1年間を描いたほのぼのコメディー。

## 序章……涙の別れ

そこに流麗な歌声が響き渡つてゐる。

居間の窓辺に、春の「ひいらか」で優しい陽光を浴びてゐる親子が居る。

正座してゐる母親の膝には、人形のように可愛らしく女の子が頭を置き、心安らかに小さく寝息を立てていた。

母親は、慈愛に満ちた表情を浮かべ、寝顔に目を注いでいる。女の子のお腹をぽん……ぽん……と、軽く叩きつつ、一定の律動に合わせて子守唄を歌つてゐた。

その歌声はどこまでも透き通つていて、どんなに感情が昂つていよつとも、聽けばたちまち心休まると言つても過言ではないほどだ。どんな夢を見ているのだらうか。女の子が不意に、無垢な笑顔を母親に見せた。

母親は嬉しそうに口元に笑みを湛えつつ、もう片方の手で女の子の頭を優しく撫でる。

傍から見ても幸せそうな光景だつた。

やがて、子守唄が終わりを告げる頃になると、ものの数十分しか経つていないのであるにもかかわらず、急激に外が真っ暗になつていた。いつのまにか居間の電灯にも由々とした光りが灯り、2人を明るく照らしている。

母親は顔を曇らせつつ、女の子の頭を撫でるのを止めた。すると、徐々に母親の体が少しずつ透明になつて消えていくではないか。

異変に気づいたのか愛撫が止まつたことに不満を持ったのか、女の子が指で目をこすりつつ目を覚ました。そこには、胸が張り裂けそうな悲しい顔で、女の子を覗き込んでいる母親が居た。

「ごめんね……本当にごめんね。爽奈ちゃん……」

母親が悲しみで口を震わせつゝ言つた。

爽奈と呼ばれた女の子は、理解できずにきょとんとしていたが、

母親が透けて天井にある電灯が見えることに疑問を感じた。

「おかーさん。おかーさんは何でとーめいにんげんみたいなの？」質問に答えている暇ない。そう判断した母親は、矢継ぎ早に伝えるべき」と伝えることにした。

「爽奈ちゃん。おかーさんはね、もうここかなくつけならないの」「ええー、どこにこへのー？」

「遠くて近い所。……もつ会えないけど、そこからずっとずっと見守つていてあげるからね」

母親の姿がいよいよ消えようとしている。そのせいか、母親に話していると言つても、天井の電灯に話しているよりも思える光景だった。

「そんなのやだーっ。そーなもいきたいー！」

爽奈が顔を涙でくしゃくしゃにしてぐずり出す。

そんな娘を見て母親の目からも涙がこぼれた。ふと、庭に通じる窓に目を向けると、自分の姿がもう間もなく消えかけようとしていた。おそらく、あと一言ほど言つただけで消えてしまうであろう。瞬時悟つた母親は、涙を指でわざと払い、精一杯の笑顔を作り、優しげな口調で我が子に言つ。

「泣いてばかりいや駄目よ。爽奈ちゃん。爽奈ちゃんは、お姉ちゃんになつたんだから。」れじやあ、赤ちゃんに笑われちゃうよ。これからは泣く時と泣かない時を分けること。分かった？」

「う、うん……分かった。分かったから　」

母親は爽奈の言葉を遮りつつ、

「うんっ、それでいいんだよ。おとーちゃんにも宜しくね」言い終わるや、完全に姿を消してしまつた。

「おかーさ　」

どん、と頭を畳に打つ音が小さく鳴つた。

その痛みに目を覚ました爽奈は、ひどく驚いた。

夢で膝枕をしてくれていたのは母親であつたが、今、自分の顔を

覗き込んでいる見知らぬ女性の膝で寝ていたことに、少なからず衝撃を受けたからだ。

(この人……だれ?)

爽奈は、動搖の中にも疑問を生じさせる。なぜ、正面にはふつくらとした顔の見知らぬ女性が居るのか。

「爽奈ちゃん、起きたのね。もつ少しで終わるからもうちょっと辛抱しててね」

女性がやや前傾姿勢になりつつ、ぼしょぼしょと小声で言った。そんな女性の言葉は、今の爽奈にとつて馬耳東風である。激しく動搖しながらも、そのままの格好で頭を左右に振り、母親を探した。しかし、居ると言えば、見知らぬ男性や女性ばかり。しかも、どういう訳か見渡す限り全員黒い服を着ている。

そのうえ、沈痛な表情の者、すすり泣きが洩れないように口元をハンカチで押さえている者、涙を目一杯溜めながらも気丈に正面を凝視している者など様々だ。

なおも動搖し続ける爽奈に突然、聴覚と嗅覚に意識が集中した。聞いたこともない単語を並べた歌のようなものを、おそらくは老人が、だみ声で唱えている。しかも何やらにおつ。数年前、祖母が逝去した時と同じにおいだった。

とうとう爽奈はつと立ち上がった。驚き呆気に取られる女性を後目に、周りを目を皿のようにして見尽くす。だみ声のする方を見ると、坊主頭がある。僧服を着た僧侶が仏壇の前に座つていた。次いで、視線をやや上に移動させた爽奈の双眸に、白黒の遺影が映りこんだ。瞬間、石像のようだ固まつた。

にわかに立ち上がった爽奈に、周りは目を瞠つた。頭に疑問符を浮かべながら、ざわめき出す。

と、どうしていいか分からぬといった風の女性の横に座つていた男が、異変に気づいて爽奈を座らせようと、女性の前を膝立ちでいざり、細い腕を引っ張る。

「こら! いきなり立つ奴があるか。ちゃんと座つてなさい」

男の怒氣をはらませた小声に立ち返った爽奈は、泣きつ面を作りつつ男の充血した眼を見る。

「とーちゃん……かーさんは死んじゃったの？」

既に泣き声とも言える声で、男に訊いた。

男はとつさの答えに迷い、唇を噛んだ。表情も怒から哀に近いものになる。少しの無言の後、ゆっくりと頷いた。

深い悲しみのどん底に一気に突き落とされた爽奈の眼から、おびただしい量の涙が溢れ出した。

「うつ……うつ……」

顔を涙で歪め、眼をぎゅっと一度瞑った。それが契機となり、爽奈は大声を挙げて泣いた。

その声は先に天上に逝った母親に届いたのであらへ。この日、空に1つの流れ星が流れたという。

抜けようの青い空。春特有の柔らかい日差しが、木々や地面や人々を照らしている。長期に亘る寒い季節がようやく終焉を迎えた。知らず知らずであるが、人々の顔つきも寒さから解放されて明らかだ。

「殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す」

そんな中で、うつむきつつ何やら物騒な言葉を、ぶつぶつと無表情且つ小声で吐いている小学生が居た。

その小学生は、周りの大人から見れば当然小さいが、同じ歳の子どもに比べれば平均的な高さと言える。

しかし、キャラもののトレーナーに、白地に水玉模様を浮かべたスカートと言つ出で立ちだ。

加えて、襟足より少し伸びた後ろ髪と眉を覆い隠す前髪のショートヘアであるのに、左側頭部の髪を小さくまとめてゴムで結んでいる。ちよびっこ部分だけ擬態語を用いて言つなら「ぴょこん」と出でている感じだ。

更に小学校1・2年生が被るような真っ黄色い通学帽を深々と被り、赤いランドセルからはリコーダーが少し顔を出している。手さげ袋も、でかでかと可愛くデフォルメされたよりもよつておこじょが貼つてあつた。

……以上の点からどうしても、格好のせいで実年齢から3・4歳幼く見えてしまう。彼女も好きでこんな格好をしているわけではない。年相応の格好をしたいと願つている。しかし

「おつはよー」

と、後方から明るい声が聞こえてきた。

彼女がとつさに口を引き結んで笑顔を作りつつ振り向くと、同級生らしき少女が駆け寄つてくるではないか。

内心では舌打ちをしながら、にこりと笑い、年相応の声でやつ

てきた女の子の名札と顔を素早く交互に見て、挨拶を返す。

「おはよー。えーっと……ゆうひちゃん……？」

途端にゆうひと呼ばれた少女が、ふうひと頬を膨らます。

「違うよー。一般的には百合は、『ゆり』って読むけど、私の場合は

”つりい”って読むんだよ。……昨日も言つたよねえ？」

最後の方はやや責める口調だったの、彼女はかちんときた。が、

おぐびにも出でやすに困った顔の作り、素直に謝る。

「『じめんじめん』。わざとじやないんだよ。この頃みんな個性的な名

前でさー。ほら、隣のクラスにゆうひちゃんついているじやん。百合ちゃん

やんと同じ漢字のや」

彼女は歯切れの悪い口調で言つた。

そう言われてみればと、百合は苦笑する。

「やうだね。隣の子と一緒にになつちやうよねえ」

（こるのかよつー）

心中では、すかさずつりいみをいれた。だが、口に出してしまはずいと、何とか出してきたその言葉を飲み込む。

「おはよーつー」

2人の許に元気よく走つてくる少女がいた。かなり離れていたのだが、たちまち追いつき、ぱつと笑う。

「おはよー。るなちやん」

「うんひ。おはよーーー。りつーちゃん」

「だから、後ろは伸ばさないでよ。小さく、『』なんだから」

「たはははは。『じめんじめん』

るなと呼ばれた少女は軽く笑つて見せた。

彼女は、突然の”るな”と呼ばれている闖入者に、目を瞠つていた。

（こ奴……小6の分際で少し胸があるではないか。しかも背え高いなあ。なるさんが自分の背を165つて言つてたから、160はあるかな。にしても）

百合と仲良く談笑しているの胸をねりと盗み見る。

(羨まけしからん。私なんか……)

両手をそれぞれの胸に置く。そして、2度3度さする。微々たる膨らみはあるが、皆無に等しい。

それに対するなの胸は、まだ小さいながらもはつきりとした膨らみがあつた。

虚しさと悲しさで胸が痛む。彼女が少し顔を下げる、溜息を小さくふうっと吐いた瞬間に、不意に声をかけられた。

「どーしたの由加。<sup>ゆか</sup>胸に手を置いて溜息なんかつこぢやつて」

るなが挨拶と同じ調子で言つた。

彼女　　由加は反射的に顔を上げて、微笑む。当然、るなの名札を確認しつつ。

（月と書いて”るな”って読ませるのかー。ま、”らい”と”よりはましかもね。それにしても、この2人の親のシラを一度でいいから、拝んでみたいものだね）

由加が黒いことを思つているなど露ほども知らない月が、あつと言ひながら手をぽん、と打つた。

「胸が小さいことなんか気にすることないよ。私なんかあつたって邪魔だし、ブラジャー着けんの激しくめんどいし」

ずばつ。

百合も月が言つた前者のみを肯定しつつ、同調する。

「そうそう。私達はこれからだよ。きっと、これから大きくなるよ。だから毎日牛乳飲んでがんばりつ。ねつ」

ずばつ、ずばつ！

「う、うん」

困惑を混ぜた微笑みを2人に返しつつ、由加は思つ。

（くはつ……悔つていた。多分、悪気はないんだろうけど、思つたことをずばずば言われるとは……。小6なのに、まだまだ子どもつてことか。それにしても、刀で斬られたことはないけど、斬られるところな感じなのかな。胸がズバ一つて切り刻まれたように痛い。や、たあつて、内面創痍の私に次は何を言うのかな）

「由加ちゃん、危ない！」

「へ？」

慌ててスカートを押さえていた百合、田の焦点が合っていた。  
「隙ありつ！」

掛け声一閃、由加のスカートはふわりと浮いた。当然、下着も顯わになる。

「よつしゅ つー ゆーかのパンツ、真っ白けー！」

少し前方から、歡喜と勝利が一緒になつた声が聞こえた。  
スカートをめくられた由加は、何が起つたのか理解できず、  
その場に立ち尽くしている。

「もー、孝一のスケベ、ヘンタイ、煩惱の塊 つ！」

頬を朱に染めた百合が、スカートをめくつた半袖短パンの少年に、  
非難の声を浴びせた。

「ぼ、ぼんの一のかたまりい？ 何だそりゃ」

「知らないけど、お母さんがお兄ちゃんに言つてたの！」

「意味も分かつてないのに、言つなよ。ブスー！」

「つるさーい、この年がら年中短パン小僧！ ポ モンの世界に行  
つて帰つて来るな つ！」

そのまま2人は、如何にも小学生らしい口喧嘩に突入した。

「あーあ、まーた始まっちゃつたなー」

月は両手を後頭部で組んで、半ば呆れた様子でつぶやいた。

「くすん、くすん……」

「あれ？」

いつの間にか由加が両手で顔を覆い、泣いていた。

「ひどい……ひどいよお……」

手の中のぐぐもつた声は、嗚咽を混じりさせており、聞く者の良心  
が痛むには十分過ぎるほどだった。

月は由加の帽子を取り、頭を優しく撫でつつ、百合と孝一に呼び  
かける。

「ちょっとー、お2人さんストップー！」

2人が月の声に反応して口合戦を止め、月の方を見る。由加の様子が明らかにおかしい。

百合が軽蔑の表情で孝一の頭を叩く。

「ほら、由加ちゃんが泣いちゃつたじゃない。謝つてきなよ」

孝一がしまつたと言つ顔になる。

「そ、そうだな」

困り果てた様子で由加の許に歩み寄る。そして、さつと頭を下げた。

「「じめん！ マジで「じめん！ ほんとーに「じめん！ 許してくれさい！」

言い終わると、由加の嗚咽が収束していった。ほつと息をつく。が、しかし、突如として胸倉を掴まれるや、そのまま持ち上げられて地面から数十センチ浮いた。

突然のことに意味が分からなくなつた孝一は、正面を見た。すると、怒氣も顕にした由加が、右手一本で自分の胸倉を掴んで、軽々と持ち上げているではないか。しかし、割と幼い顔立ちな為、いまいち迫力に欠けてはいたが。

「ごめんで済むなら警察はいらねえんだよ。この「すらり」がオケが！ てめえは何しくさつたか分かってんのか。あ、？」

その代わりドスがかなり効いていた。一気に恐怖感がこみ上げてきた孝一は、思わず目をついと月の方に逸らす。と、月がぽかんと口を開けて、半ば無意識に由加の頭を撫で続けていた。さらに首をやや後ろに回して目の端で百合を見ると、魂を奪われたかのようにその場に立っていた。

「ど・こ・を・見・て・いる・の・か・な・ー？ こ・ち・を・見・な・い・と・痛・い・目・に・あ・わ・せ・る・ぞ・ー！」

「は、はい！」

首を素早く回し、再び正面を向く。

「全く、嘘泣きなんて何十年振りに使つたことか。それで、ほいほい謝りにくるとは……ははつ、間抜けも間抜け、大間抜けだねえ。」

いや、今どきの小学生 しかも高学年は、小生意気なガキっぽかだと思っていた。けど、あんたも含めて案外、純粋なんだねー。お姉さん、感心しちやつたよ

はつはつはと愉快そうに笑う由加。

「お姉さんつてあんた……あ、『ごめんなさい』。えーっと……あつ、あなたは由加じやないんですねか

孝一は苦しげに言った。

「はははは、違う違う。そーだ、証拠を見せてあげようが。ほら、そつちに居る子もこっちにきなよ」

余つた片手で百合を手招きする。

百合はなぜか自分でもよく分からぬが、引きつった笑みを作り、由加の所へ駆け寄る。

「よし、揃つたねー。うん、貴様邪魔」  
ぱつと孝一の胸倉を離す。

あまりにも突然だつたので孝一は、足で着地する」ことが叶わず、尻餅をついてしまった。

由加は、そんな孝一を一顧だにもしないで、手さげ袋のチャックを開き、財布を取り出す。さらに財布を開けて、一枚のカードを取り出して3人に見せつけるように、正面に突き出した。

「じゃーん！ これは何でしょーかつ？」

3人がカードをまじまじと見る。因みに、意識的なのが無意識的なのが、氏名欄の苗字の部分と本籍欄と住所欄は、指で押さえられている。

「め、免許証……？」

百合が生睡を飲み、恐る恐る言った。下手に変なことを言えば、何をされるのか分からぬ状況になつたからである。

「そー、大当たり！ じゃ、名前の横を背え高の子読んでみて」  
月がこづくりと頷く。

「えーっと、昭和63年5月5日生……。あれー？ ということは

……」

「由加じゅないの？」

月が言いかけた言葉を百合が継いだ。

「そーなの。私は、君らが言う由加ちゃんじゅないんだよねー。名札を見てくれば分かるけど、爽奈って言う名前で、年も小6の1か12じゅなくて、20歳。つまり、はたちのお姉さんなんだよ」

にいつと3人に笑いかける爽奈。

3人は級友じゅないこともそつだが、自分達よりも8歳も年上の女性に対する数々の行為を思い返していた。それぞれの胸中に、えも言えぬ重圧が押し寄せる。

「じめんなさい」

重圧に耐え切れなくなり、子どもながらに気持ちを精一杯込めたつもりなのだが、体をきりんと折った真摯な謝罪の言葉が発せられた。

爽奈はいささか慌てた。まさかそんなに丁寧に謝られるとは、思いもしなかつたからだ。

「いやいやいや、そんな体まで折ることはないって言うか謝ることないんだよ。うん。私も紛らわしい格好だしさ、間違えられても仕方ないんだわ。何せ、身長もりりいちゃんだっけか。同じくらいだしねえ。にしても、百合でりりいは読めなかつたよー」

「紛らわしくてごめんなさい」

「いやいや、いいんだよ。今の時代名前つづーのは、個性重視などころがあるからねー。胸を張ればいいと思つよ。多分、そのうち成長するから。あ、でも牛乳はあんまり当てになんないから、キャベツがいいかもね」

「あ、ありがとうございますー！　私、頑張ります！」

顔をぱあっと輝かせる百合。

爽奈が満足そうに親指を立てると、円に顔を向ける。

「円と書いてるなちやんだつけか。いやー、私は君が羨ましい！　背は高いし、胸も成長が大いに見込めるものだし、足は速いし、可愛いしー。しかも、元気一杯な性格でなかなか思いやりもあるとき

たもんだから、ある意味超人だわー」

「そうですかー？ やー、そこまで言つてもうるると照れますよー。

……そう言えば、さつきは失礼なことを言つてしまいませんでした。

あと、気安く頭を撫でてしまつて」

「なんこと、気にすることはないよー。確かに、ブラジャー着けるのめんどひついつて言つた瞬間は、ふつんして胸を揉みしだいてやううかと思つたけど、私の嘘泣きに反応して頭を撫でてくれて、評価が一変したね。君はマジで良い子だ！ 悪い虫にとつ掘まらないことを祈つてるよ」

「はーい、あやーっす」

右手を高々と上げて、無邪気に喜ぶ田。

「さて、最後はつと……」

孝一の方に田をやる爽奈。

孝一は、恐怖を直感的に覚えたのだろう体がびくん、と震えた。

「勇敢なる戦士君 やや、名前が普通過ぎる孝一君と言つたかな。君はとにかく元気が良くて宜しい！ お姉さん感心しちやうわー」  
2人に話していた時と態度が全く変わらず、しかも思いがけず褒められたことで、孝一は照れ笑いをする。

爽奈とともにめぐられかけた百合は、面白くないと言つた顔をしている。

「だがしかし、君は私を怒らせた。私は、やられたことはやり返す性質でね。仕返しはちゃんとさせてもうつよ。なぜなら君は、まゆつちの下着を見てしまつたからねえ。友達の仇は討たせてもうつよ

ー

まさに天国から地獄である。

表情が喜から哀になつた孝一を見て、爽奈は更に付け足す。

「大丈夫、大丈夫。痛いのはねー、うーんつと……数十秒から1分間ぐらいだから さーあ、選んでもらいましょつか！ 電気アンマがいいかカンチョーがいいかくすぐり耐久がいいか。3つの内1つをどーぞ！」

どれもこれもただでは済まなさそなものばかりである。

孝一にしても、3つ全てが凄く嫌だったのだが、逆らえば痛い目に遭わせられることが日に見えているから、素直にしばし悩んだ。

悩みぬいた末に、か細い声で爽奈に告げる。

「最後のくすぐりでお願いします……」

やつぱり、痛みよりくすぐつたい方がまだ良いと考えたのだろう、賢明な選択だ思われた。

しかし爽奈は、口の端を吊り上げて含み笑いを口腔に響かせる。「ふうん、くすぐりねえ……。じゃ、始めますか」

その爽奈の様相を見て反射的に一度、おにりのようになにか震わせる孝一。選択肢を間違つたと悔やんでも、最早後の祭りである。

やがて、爽奈が孝一の前に立つた。両手をまっすぐ上げ、手首を曲げて指を動かし、手の形を変える。熊が人間を襲うような格好だ。孝一は、生睡を音を立てて飲み込んだ。その顔は恐怖と不安に包まれ、ともすれば泣きそうである。

爽奈の両手がゆっくりと下ろされ、脇の下辺りに至つた。

その瞬間、朝の通学路に、何とも形容しがたい悲鳴が響き渡つた。

爽奈こと江里口爽奈は20歳になっていた。母親の奈津美が逝去したのは8歳の頃であるから、既に12年もの月日が経過していた。葬式の時泣き倒したが、年月を追うごとに母の死のショック少しづつを乗り越えた。割と大らかな父親のもとで育ち、反抗期も皆無だった。

残念ながら肉体的な成長にあまり恵まれず、身長は144cmほどで止まり、胸もまな板やら洗濯板と言われても仕方がないくらいである。それでも心身ともに健康に育ち、大病を患つたこともえも皆無であった。

高校を卒業した後、とある県にある野瀬市の野瀬保育専門学校に入学を果たした。

因みに、学科は幼稚園教諭保育士養成科である。この学科は2年間で修了し、卒業と同時に幼稚園教諭2種免許と保育士資格取得することができる。何ともお得だと思われるが、その分講義が月曜日から金曜日をほぼきつつきつに埋められるので、遊ぶ時間などほとんどないのだ。

学友達の助けもあり、何とか1年時の学習内容を修め、本日から2年目に入る。

そんな爽奈は急いでいた。小学生に絡まれてかまつていたら、すっかり到着時間が遅くなってしまったからである。

現在の時刻は、8時25分。普段なら講義は9時から始まるので、8時50分頃に学校に到着していれば良いのだが、今日に限って事情が異なっていた。

「何でよりもよつて今日なんかに、ホームルームを行うかなー……」

爽奈が不満をぶつぶつと独語した通り、8時35分からホームルームを行うと昨晩いきなり、担任からメールが届いたのだ。

…

「全く、じつじつことはもつと早くから報せてもらいたいよ」

そうじつしているうちに校門を駆け抜け、校舎内に入った。階段を1段飛ばしで上り、教室に勢いよく駆け込んだ。

「8時30分！ よーし、間に合つた つ！」

爽奈が諸手を上げ、歓喜の声を教室に響き渡らせた。

その声に反応して数人の女子が、爽奈の方を見る。すると、途端に三者三様の表情となり、そのうち眼鏡をかけた女子がこちらに走ってきた。

「おー、まゆつちではないか。おっはよう！ 今日もナイス眼鏡だね！」

「そーちゃん、どうしたのその格好？ まるで小学生みたいだよ」優しく柔らかな印象の卵型のオーバル型の眼鏡と和るように、眼を丸くして驚くまゆつちと呼ばれた彼女の名前は、成松真優。<sup>なりまつ まゆ</sup>爽奈とは1年時の頃からの親友である。肩先まで伸びた後ろ髪を、水色のリボンでポニーtailしている。背格好は爽奈と似ていて、結構小さい。それでも、身長と胸の大きさは爽奈より少しは勝つている。

「はーっはーっはー、ちよいとあそこに居る性悪眼鏡にゲームで負けちゃったもんでね。罰ゲームでこんな格好をさせられちゃたわけ」爽奈がびしっと人差し指で指す先を見ると、口辺に今にも噴き出さんばかりの笑みを溜めている眼鏡の女子が居た。

真優は、得心がいったと感じで首肯する。

「さやつちゃんは、容赦ないからね。でも、そーちゃんもあんまりやらないゲームをよくやつたね。相手はプロ級なのに」

「うん、乗つた私も馬鹿だつた。けど、挑発されたからには、どーしてもあの鼻つ柱を折つて、ぎやふんつて言わせたかつたんよ」

「そーちゃんは本当に、負けず嫌いだねえ」

爽奈と真優が揃つて歩き出し、談笑しながら2人の許へと向かう。ふと、爽奈の視界に見慣れぬ男が入つた。なぜか不審に思う。しかし、真優との談笑の方が大事だと思い、たちまち男の存在を脳内

から消し去った。

「おはよー、性悪眼鏡になるさん」

性悪眼鏡と面と向かって言われた女子は笑みを壊し、眼鏡のリムを指で挟みながら怒氣を発する。

「誰が性悪よ。Jのドチビ！ あんたが負けたのが悪いんでしちゃうが。いい気味よ。それにしても、チビで童顔だけあって小学生姿がよく似合うわね。今日はそのまいたら」

言い終えて、意地悪気な笑みを満面に湛える。

「うつさいなー、でか女。性格が良くて黙つてりや器量よしなくせに、本つ当台無しだわ。そんなんだから、男が寄つて来ないんだよー。つーか、普通に着替え持つてきますから。年相応の恥じらいぐらありますから」

「お、男が寄つてこないと性格は関係ないでしちょー！ そ、それに、去年まで似た様な格好で学校に来てたのは、何処の誰かさんかしら。私や成佳<sup>なるか</sup>や真優が、コーディネートしたおかげでまともになつたくせに」

「あはは、あんたが選んだ奴なんか、タンスの肥やしになつてるよ。そのおかげで他の服がすくすくと育つてるしね」

「ちょっと、それどういう意味？」

「虫食いの被害が、あんたの選んだ服だけにいつてること」「なつ……！」

爽奈と会うや口論を始めた彼女の名は、百武紗弥菜<sup>ひやくたけ さやな</sup>。爽奈とは1年の頃からの付き合い。いつもかは定かではないが、気づいたら会うたびに口論をする仲になつていた。やや切れ長な眼に、長方形に近い形のスクエア型の眼鏡をかけていて、腰まで伸びた黒髪を背になびかせている。背が高く、170cmはある長身で且つスタイルも良く、モデルにでもなれそうな体躯だ。胸も大きく、爽奈や真優とは対照的である。

「まあまあ、2人とも朝からそんなに喧嘩しないの。爽奈ちゃんは、着替えるんなら着替えちゃいなさい。私達が壁になつてあげるから

2人の間にやんわり割つて入った彼女は、木下成佳。他の2人と同じく、爽奈とは去年からの付き合いで親友。何もかもを優しく包み込むような、まるで聖母を思わせるような雰囲気を纏つた人物である。人好きにしそうな少し垂れ目勝ちな眼をしていて、黒く長い髪で割りと太目な2本の三つ編みを作り、余った髪とともに背に流している。背はそこそこ高い方なのだが、紗弥菜よりは少し低い。しかし、その分胸が圧倒的な大きさを誇つており、それでいて腰周りも細いものだから、クラス中の女子の羨望の的となっている。

「はーい。分かりましたー」

「ふん、成佳が言うなら仕方ないわね。って……注意しながら爽奈

と私の髪のにおいを嗅がないでよ」

紗弥菜が若干呆れる視線を投げかける先には、成佳がすんすんと小さく音を鳴らしつつ顔を首を上下させていた。

はつとした成佳は、ばつが悪そうに苦笑しながら、「あ、ごめんねえ。ついつい癖でやつちやうのよね。本当に、みんな良いシャンプーやボディソープを使ってるわ~」

それでも、うつとりとしていて幸せそうな顔に瞬時に戻った。紗弥菜は呆れ顔だが、爽奈と既にかがれていた真優は、別段気にしなくなつた。なんせ、去年から続いている習慣みたいなものだからだ。

「ほら、早くしないと先生が来ちゃうよ」

真優が、黒板のある時計を見つつ、急かすように言った。

3人が爽奈を囲みその中で爽奈が着替え始める。キャラものトレーナーとスカートを素早く脱ぎ、別の袋に押し込んだ。

「あれ？ それって私の……」

爽奈の穿いているショーツを見て、目を白黒させる真優。

「あー、昨日言うの忘れてたけど、借りたよー」

「何で自分のを穿かなかつたの？」

「あの辺の通学路には、スカートめぐりの達人が居るつて風の噂で聞いてね。だから、私のじゃ鼻血出してぶつ倒れるんじゃないとか

思つて、割りと幼げなまゆっちのを借りたわけ

「まあ、別にいいけど……で、結果はどうなったの？」

「今朝達人 まあ、悪ガキだつたんだけど。そいつにスカートをめくられて、見られちゃつたけどね。奴が泣くまで！ 私は！ く

日頃穿いているショーツが、爽奈を通して衆目に晒されてしまつたことに、まるで自分がめくられた被害者にでもなつたと感じた真優の双眸に、みるみるうちに涙が溜まってきた。

「あんたねえ……。新学期早々真優を泣かせてどうすんの」紗弥菜が呆れ返った様子でつっこむ。

「あー、アーリー……」めんねまゆいち。アパートに帰つたらね、実家から送つてたお菓子をあげるか、立かなーで

「本当っ！？」

のない笑顔を見せた。

「これでよし、と。お2人と性悪子さんサンキューでした！」

「だから、誰が性悪かー。」「ねせよハジメニモニキテ」

紗弥菜のつっこみと担任が入って来たのは、偶然にも同時だった。

ホームルームの連絡事項がつつがなく終了した時、クラスの数少ない男子が自然と女子と離れた所に寄り集まり、こそこそと話していた。中には軽く鬱になつたのか頭を抱えている男子もいる。

爽奈達が所属する幼稚園教諭保育士養成科は、2クラスに分かれている。生徒を総計すると80人。うち10人が男子で、それが男女半々分けられるから、1クラスに35人の女子と5人の男子という構図ができる。まるで、共学に成り立ての元女子高のような男女比率である。

必然的に女子がどう思つていようとも男子は、様々な意味で肩身の狭い思いをせねばならなくなる。女子に苦もなく話せる男子にとっては、天国とも何ともないと思われるが、みんながみんなそんな男子ばかりではない。中には女子と話すことがどうしても馴染めず、内向的な男子もいるであろうから、この状況を苦痛と感じる者もいる。それが前述した頭を抱えていたる男子である。

しかし、彼が頭を抱える原因は違つた。むしろこの状況は、昨年から1年も続いているので、こんなことでいちいち頭を抱えるわけがない。問題は、ホームルームに告げられ、配られた用紙にあつた。告、ここに書かれることとなるべく実行すること。

1つ、定められた班の女子（または男子）と1人につき1日10分～20分は会話し、「ミニケーションを図る事。何でもいいんですよ。何でも。そう、何でも……。まずは話すことからです！」

1つ、今夏ひと月に涉つて行われる実習時は、なるべく定められた班で行動すること。なるべく私も便宜をはかります。

1つ、定められた班でボランティア活動も積極的にすべきこと。尚、班で活動した時のみ1日ボランティアした分が、2日分になることもある。私は楽しみにしていますが、みなさんは面倒臭い

の一点點りで卒論なんか書きたくないでしょ？ まじゅうよー！！！ だったら、頑張り

似のこととをまもらかつた人は、単位をあげませんからね！　べ  
別に、学長先生若一といとか美人とか……贊辞の言葉を用いて書いた  
文章を、書いて、欲しく、なんか、ないんだからねつ！　い、一万  
文字までなら見てやつてもいいわよ……！（／／／）

以  
上

「元のうづの言つて」  
「相変わらず、そこら辺のがきみたいな文章だね。もう、45歳だ

માનુષનાની વિદ્યા

真優が顎を引いて同意する。

「そりたね、45歳で離婚して、ハサのお母さんと同居生活だと、こんな文章書かないよ」

「わたくしの心は、あなたの方へ向けていたわ」

笑顔を浮かべながら、しみじみと成佳が言った。

「なるぢやんは、誰とでも仲が良しから大丈夫だよ」「私なんかよく話したこともない人が居るから、どきどきしたよ」

胸に手を当てて、ほっとした表情を見せる真優。

「それにしても、男子二年には大変だね。小さくなつてひくひくしてなきやいけないんだから。まるで、ライオンの群れに紛れ込んだシマウマみたいだ」

いつの間にか爽奈は、教室の隅でひそひそと会話を交わしている  
男子連中の方に、体を向けていた。

そんな男子連中を女子達の半数以上は、端から眼中にないのか無視を決め込んでいるが、談笑しつつ時折ちらちらと様子を窺う者も中には居た。

真優は男子の心を酌む。

「私も男の子だつたら、恐々としているなあ。だつて、自分以外に

同性が居ないつて気を遣うもん

そんな真優の言葉が耳に入つていないので、受け流すように爽奈が反対方向に向いた。

「と言うかあんな奴居たつて? まゆつちと話している時に、ちょっとだけ気になつたんだけどさ」

成佳と真優も爽奈が言う”奴”に視線を移す。そこには1人だけ席に座つて、支離滅裂極まりない文章を、割りと真剣な表情で熟読している男が居た。2人が首を傾げる。

「去年まで居なかつたような気がするわね。転校生かしら」

「きっとそうだよ。だつて、あそこに男の子達が5人居るし、あの人に含めたら6人になつちゃうもん。男の子は2つのクラスを併せて10人だから、こつち1人多いつてことは変だよ」

全く分からぬ、おかしいと言つた風に、2人は口々に言つた。2人の意見を耳に入れつつ、腕を組んで何ごとかを考えていた爽奈が、指を鳴らす。

「よし、私が直接問いただしに行つてこよ。怪しい奴なら、鉄拳制裁を加えた後で追い出せばいいんだし」

鉄拳制裁と言つ言葉に、真優がいち早く反応する。

「いくらなんでも、渡り廊下で遇つた先輩じゃないんだから……」

「じょーだんじょーだん。もー、まゆつちはすぐに真に受けちゃうよね。だけど、それがいいんだけど」

机から弾みをつけて床に降り立つた。すると、正面にはプリントを持つてわなわなと震えている紗弥菜が居た。  
(ひとまず、紗弥菜をからかつてからいこうかな)

爽奈は、悪がきのような笑みを作つた。

「どーした? 紗弥菜さんよ。何かご不満でもあつたんかい

紗弥菜はプリントから眼を逸らさず、口元を小刻みに動かしながら、憎々しげに漏らす。

「じうじう地の文と会話文が一緒になつてる文を見ると、非常に腹が立つてくるわ。ああ、直談判して目の前で添削してやりたい……

！ しかも顔文字や誤字や脱字や疑問符や感嘆符が……！」

今にもその場で怒声を挙げんばかりである。触らぬ神にたたり無しと言わんばかりの顔で、紗弥菜を避けて男のもとへ行こうとしたその時。

「あ、チャイムが鳴つたね」

1限の開始を告げるチャイムが、構内に鳴り響いた。

履修登録やら学校生活やらの説明が終わり、担任が号令をかけようとした時だつた。

「あつ ！ わーすれーてた つ！」

両手で頭を抱えつつ、絶叫とともに教卓に勢いよく顔を突つ伏す。当然<sup>ごん</sup>、と鈍い音が教室の静寂を打ち壊すように鳴る。しかし、生徒達がざわつく暇を与えないように計算しているのか、すぐさま絶叫前の姿勢に戻つた。

「円城寺くーん、ちょっとこちらに来て

担任が手招きすると、一番後ろの席から1人の男が立ち上がり、教卓の方へ歩みを進めていった。

「すつかりみなさん<sup>えんじょうじょ</sup>に紹介し忘れていましたが、今更ながら紹介します。円城寺侑治郎くんです！」

担任が失念していたことを全く気にしていないのか、眉一つ動かすこともなく、口を開く。

「みなさん初めまして。訳あって1年間休学してました、円城寺侑治郎と言います。みなさんより1つ年上ですが、宜しくお願ひ致します」

言い終えてから体を折り曲げるよつて、一礼した。その姿はどこか滑稽に見えた。

なぜなら円城寺は180cm半ばの偉丈夫であり、クラスの男子の中では抜きん出るほどである。針ねずみを頭に乗せたような割とげとげとした短髪。細身ながらも肩幅ががっちりしていて広く、逞しさを感じさせられる。顔立ちはほどよく整つていて優しそうで

ある。荒々しい雰囲気は全くなく、顔だけ見れば優男にしか見えないほどだ。

教室中に拍手が巻き起る。

その中で爽奈は、手を打ち鳴らすこともせずに、机の上に置いてあるプリントの下部をじっと見つめていた。

（やつぱりだ。あの円城寺とか言う奴、私達と同じ班だ！……ふつふつふ、どうしてくれようかねえ）

プリントに顔を突つ伏してくつくつと笑う様は、どう見ても小学生が何からくでもないことを、思いついたようにしか見えなかつた。

## 04章……啞然、呆然、何だこれ

「」の日は午前中で終了となり、昼前には下校時間となつた。担任が教室を出て行くと、生徒達もそそくさと教室を後にする。どうやら、学長の支離滅裂の文章と内容は、容易には受け入れがたいものだつたらしい。

小さい体を伸ばしつつ、爽奈が3人に向けて言う。

「さて、と。私達も帰ろっか」

と、眼の隅に侑治郎の姿が映つた。席を立ち、ロングホームルーム時に貰つたプリントや筆記用具を鞄に詰めている。

「おやおや、でかい人はまだ帰つてなかつたみたいだね」

「もしかしてあんた、あの円城寺つて男に一日惚れしたの？」

紗弥菜が意地悪気に笑みで口を歪めつつ、ちょっかいを出した。「はあ？ 何を言つちゃつてんのかな。んな訳ないに決まつてんじやん。そういうことを言つあんたがそんなんじやないの」

爽奈はぎるりと紗弥奈を睨みつける。しかし、童顔のせいがあまり迫力がない。

「残念。私は、あんなに背が高すぎる男なんか嫌いなの。そうね。私と同じぐらいがいいわ。やつぱり、目線の高さが同じ方が安心するもの」

紗弥菜が目をつむつて悦に入った。

そんな紗弥菜を見た爽奈は、鼻で一笑に付すとにべもなく言う。

「だけどさ、男は嫌かもねー。だつて、大抵の男つてのは自分より背の低い女を選ぶつて、おつ父が言つてたしねー。それに、ただでさえ身長が低いことに、コンプレックスを持つてる男も居る訳で。そいつにしてみれば、これほど嫌な女は居ないだろうねー。まあ、特別な考え方の奴な億が一の確率でほいほいあんたに寄つてくるかもねー」

自分の男性理想像を、金づちで叩き割られたような衝撃を受けた

紗弥菜は、怒りのあまりに口を吊り上げて切歯扼腕する。

「くうつ……！ 言わせておけばべらべらとつ。大体あんたに寄つてくる男が万が一

居たとしても、あらかた

言いかけた紗弥菜に、成佳の優しい聲音が割つて入る。

「親睦の意味も含めて円城寺さんを誘つて、お昼ご飯を食べましょうか。ちょうど昨日作ったカレーの余りが沢山あるのよ。一人じゃ食べきれないし、みんなと一緒に食べた方が美味しいし」

カレーという単語に瞬く間に反応した爽奈は、瞳を輝かせながら問う。

「なるさん、まじっすか！ おかわりしてもいい？」

「勿論よ。沢山あるから、好きなだけ食べていいわ」

「やつた つ！ なるさん大好きっ！」

成佳に抱きつき、胸に顔をうずめて喜びを爆発させる。暫時、感触を確かめてから満足そうに顔を放した。勢いそのままに、今にも教室から出て行こうとする侑治郎の前に回りこむ。

「つと！ な……何か用？」

いきなり行く手を遮るように現れた爽奈に、面食らつた有治郎。

「でつくん、君はカレーは好きかね？」

「でつくん？ ……まあ、好きだけど。……それが？」

呼ばれたこともない呼称に驚きつつも、正直に答えた。

「じゃあ、ちよつくりこつちに来て。あとね、質問に質問で返すもんじゃないよ」

「ああ、ごめん。つて、ちよつ……」

爽奈にいきなり腕を引っ張られ、少しよろけそうになる。それでも、姿勢を低く構えて付いていき、何とかすつ転ぶという醜態を晒さずに済んだ。10歩ほど進んだ後、事の成り行きをなすすべもなく見物していた3人の許へ辿り着く。

「なるさん。でつくんはカレー大好きだつて！」

爽奈の潑刺とした声を受け、成佳は莞爾と笑つて頷く。

「それじゃあ、行きましょうか。自己紹介とかも私の部屋で食べながらでも」

成佳が、何が何だか分からぬといつた顔をして、俺治郎に向けて言った。

「は、はあ……」

突然過ぎる展開についていけない俺治郎だった。

成佳の部屋に入ると爽奈は、真っ先に鞄や罰ゲームで持つて来たランドセルを投げ捨て、ベッドに勢いよく飛び込んだ。

「はふう～……やっぱり人のベッドって、柔らかくて気持ちいいねえ」

四肢を伸ばし、じろりと仰向けになる。ほつておけばそのまま眠つてしまいそうである。

「ちょっと爽奈！ ちゃんと靴を揃えなさいよ！」

紗弥菜が爽奈の脱ぎ散らかした靴を指差し、怒っている。だが爽奈は、ベッドがふかふかしていて気持ちいいのか、大儀そくに首だけ玄関に向けるだけであつた。

「お～、その声は紗弥菜ではないか。あんたもこっちにきて一緒に横になろうよ。そしたら、あんたの胸を枕代わりにするからさー」 応じる声も間延びしていく、今にも眠りそうだ。

「絶対嫌よ！ ……仕方ないわね、私が揃えてあげるわ。今度からは気をつけなさいよ～！」

「おうよー。わあっすが良い眼鏡をしていることだけあるわー」

「あ、ありがと～……。で、でも、別に嬉しくなんかないんだからねつ！」

頬を朱に染めつつ穏やかな顔で爽奈の靴を揃える。やっぱり靴も小さく、23cmあるかどうかの物だ。

「さやつちゃん優しいね」

振り向いた目の前に、にこにことしている真優が居た。褒められて照れたらしく、紗弥菜はますます頬を赤くする。眼鏡を取り外して

てもてあそびながら、

「そんなことないわよ。私は当然のことをしたままでよ」

わざと無愛想な表情を作り、そっぽを向いた。

「ふふ。やつぱり、さやつちゃんは可愛いなあ」

「ま、真優～。いい加減にしないと、ほっぺをお正円の餅みたいにするわよっ」

「じめんじめん」

エプロンをつけた成佳が、2人に声をかける。

「紗弥菜ちゃんに真優ちゃん。悪いんだけど、お皿にじ飯とカレーを盛つてくれない？ 私はサラダを作るから～。あと、サラダを取り分けるお皿とフォークとスプーンもお願ひね～」

その指示を聞いていた侑治郎は、半ば慌てたように発言する。

「あ、俺もなんか手伝うよ」

成佳は侑治郎を向き、微笑みながらも首を横に軽く振った。

「円城寺さんは、ゆつくりなさつていて下さい。なんせ、今日は円城寺さんの歓迎会兼昼食会ですからね。主賓の方に手伝って頂くなんて、申し訳ないです。そこにテレビのリモコンがありますから、テレビでも見てて下さい」

「分かりました……」

思わず丁寧な口調になってしまった。少しがつかりとした表情になるも、ベッド近くのテーブルの前に座り、その上にあつたりモコンを手に取り、テレビの電源を入れた。ふと、視線を下に移し、テレビラックの2段目には薄型のゲーム機があった。更に視線をテレビの横にやると、棚の中にはおびただしい量のゲームソフトやアニメのDVDが、所狭しと収納されていた。

侑治郎は少なからず仰天し、脳内で様々な語彙を駆け巡らす。と、そこに、

「広辞苑だ！」

掛け声とともに拳で頭を殴られた。

「痛つ」

考えていたことなど忘れ、殴られた所を擦る。殴った主を睨むようにして見ると、無邪気な顔で寝ている爽奈だつた。

真優がカレーを侑治郎の前に置きつつ、苦笑する。

「そーちゃんは寝相が悪いんですよ。許してやつて下さい」

「あ、どうも。それにしても、何でタンクローリーなんだろうか？」素直に疑問を口すると、切つた食材をガラスで出来た底の深い透明な容器に移しつつ、成佳が饒舌に答える。

「『デリックの無謀な挑戦』と言うアニメの記念すべき第1話、『メタボリック将軍危機一髪』の中で主人公が、メタボリック将軍こと田部杉雄に、とどめの一撃を喰らわせる時の台詞です。まあ、広辞苑を使った攻撃があんまりにもリアルと言つか、広辞苑の出版社から訴えられて2話で打ち切られた伝説のアニメなんですけどね。終わり方が斬新でした。だつて主人公はアメリカ人の設定なのに日本人で、しかも武士の打ち首前の白昼夢だつたんですからあ。あと、そうですね」

「へ、へえ……」

普通のアニメはそれなりに知っているものの、2話で打ち切られたアニメなど知る由もない。侑治郎は、嬉々として語る成佳に、適当に相槌を打つしかなかつた。

「なるちゃん。そろそろそーちゃんを起こすね

「だからあのシーンは うん、いつもやつでお願いねえ」

一瞬だけ真優を見て承諾は出したが、すぐさま視線がたじたじに

なっている侑治郎に向けられた。

「はーい。では、こほん。…… キヤー、助けてー！ 怪人・トンマリミセが前半戦終了時点で、打率2割0分1厘の本塁打15本の打点が17で失策が18だよー！ 怪我人も出まくるし、色々な意味で終わっちゃうよ つ！」

少し演技が入ったのか聲音が多少ながら違つた。でも、聞く方がすんなり分かるくらい棒読みは棒読みではあるのだが。

最後の台詞から数秒後、脊髄反射的に跳ね起きた爽奈は、そのままベッドの上で何とかを言い始める。

「はーっはーっはーっ！ 小生 ヴォウビョウマンが来たからには、安心ぞ。トンマリミセよ、己の悪行の数々をさつさと詫びてこれで安らかに逝くがいい！ …… つて、んつ？」

やつと気づいたのか、みなが自分の一拳手一投足に注目する」とに、ようやく気づいた。

「みなさん、おはよーいぞいます。そして、まゆつちはナイスチョイス！ よくまあ、あんな長い台詞を憶えれたね」

だが、爽奈の態度は動搖することなく、にかつと笑うぐらいの余裕があつた。

「たまたま昨日借りたDVDを観てたんだー。偶然だよ偶然照れながら謙遜してみせる真優。

そんな真優を成佳は褒め称える。

「長台詞お疲れ様。真優ちゃんもそのうち私と爽奈ちゃんみたいに。詳しくなるかもね」

「うん、何でも話せるように頑張るよつ」

「よーし、さあーつすがまゆつちー！ その意氣で次は野郎向けと言われている『ソルドバルド大作戦』を観てみようかー！」

「ふふふ、爽奈ちゃんつたらマイナー趣向なんだからー。ソルドバルドと言えば、『うぬらに渡す物など何も無いつー！』…… つて、毎回決め台詞のキャラクターがいた気がするわ」

細めていた眼を台詞の時に限つてかつと見開き、眉を逆立て片膝

を立てて見せた。また、今まで控えめな感じで品があつたのだが、極限まで喉を絞つたのか低くそれでいて威厳のある声であった。

「えつ……？」

思わず成佳をまじまじと見つめる侑治郎。

「そうそう、さあつすがなるさん。レイニー軍曹の物真似が上手いねー」

「なるちゃんは何でもできるよね。声優になれるんじやない？」

「ふふ、私なんかれないわあ。上手な人は沢山いるし」

そのまま3人は、アニメ談義に花を咲かせてしまった。

侑治郎はそんな光景をして、しばし口をあんぐりと開けていた。だが、どう声をかけていいか分からず、困り果てた表情で隣に黙つて座っている紗弥菜の様子を窺つた。

視線を敏感に感じ取つた紗弥菜は、読んでいた漫画から眼を離し、眼鏡のブリッジを押し上げながら、侑治郎の眼を直視する。

「残念だけど、こうなつたからにはしばらくこっちに戻つてこないわ。私は、アニメには興味がないからこの話題になつたら、いつも黙つてるけどね」

「あつそなの……」

（やつぱり、女子つてのはよく分からぬ生き物なんだな……）

改めてそう思う侑治郎だった。

爽奈と成佳と真優のアニメ談義が終わつたのは、10分後だった。各々が完食し終わつたのが更に30分後。出来立て熱々だったフレーも、少し冷めかけていたらしい。

そして今、女性陣が自己紹介を終えた。今度は侑治郎の出番である。

「改めて円城寺侑治郎と言います。訳あつて」

侑治郎から見て左斜め横に座つていた爽奈から、腕が伸ばされる。丁度、口の前に掌が止まつてもう喋るな、と言わんばかりであった。「ストップ！」ちょっと待とうかでつく。訳つてなんですの

？ 気になつて仕方ないんだけど

爽奈に肝心な所を衝かれ、微苦笑を面に表す。少し考えた後、頭を搔きながら口にする。

「んー……正直言いたくなかったんだけど、去年の今ぐらこいつに帰つてこようとしたら、事故に巻き込まれてね。それで、大腿部の頸部けいぶを折つてしまつたんだよ。それで3ヶ月ちょいは寝たきりだつたんだけど、辛かつたなあ……」

ベッドで過ごした永すぎる期間を思い出したのか、遠い目を天井に投げた。

成佳が目を瞠る。

「大腿骨頸部骨折と言つたら、お年寄りとか割と年配の方のイメージが強いんだけど、円城寺さんみたいに若い人もなるのねえ」

「お、詳しいね。担当した医師や看護師さんによく言われたなあ。あと、相当運が悪かつたんだね、とも」

爽奈がやおら立ち上がり、薄い胸を張つて断言する。

「やっぱ、牛乳飲まなきや駄目だよ！ 私みたいに1日500ml～1リッターは飲まないと。そのせいもあって骨折なんか1回もしだことないし、怪我してもすぐ治るし、良いこと沢くめだよー」

紗弥菜は、目を細めて野卑にも似た笑みを口角に顕現させる。

「その割には悲しいほどに、胸や身長には行かなかつたみたいね。吸収した分は何処へ行つたのかしら」

挑発されてすっかり頭に血が上つた爽奈は、表情を憤怒の形相に変えつつ、人差し指で紗弥菜の胸を指す。

「胸と身長のこと何で言つかなー。何でもでかけりや良いつてもんじやないと思うけどね。でも、なるさんは別格。なるさんの胸には愛情が詰まつていいからねつ。あんたの胸なんかね、ただの脂肪の塊だ！」

自慢の胸を面罵された紗弥菜は、ほぼ無意識に眼鏡を外してテープに置き、怒髪衝天を衝かんばかりに食つてかかる。

「な、なんですって！？ これだから、精神的にも肉体的にもお子

様は困るわ。根拠もかけらもないことを、しゃあしゃあとよく言えるわね。ねえ、成佳。馬鹿らしいと思わない？」

しかし、成佳の答えは紗弥菜が望んでいたものと違っていた。

「じゃあ、爽奈ちゃんと真優ちゃんに触つてもらつて、決めてもらいましょうか。はたして爽奈ちゃんの言つ通りなのか」

それにしても、この女ノリノリである。某番組の企画なら、先述の常套句がお茶の間に流れただろう。

「あ、それいいね」

「一も二もなく爽奈が同意する。

「でも、でもや……」

真優が止めようとするが、最早遅い。

引っ込みがつかなくなつた紗弥菜が、折角の整つた顔を歪めてい

る、いつの間にか空氣と化していた侑治郎が、手を上げた。

「何、貴方も参加する気？　いい度胸してるわね。私の胸を触つたら

ら

わざかに頬を朱に染め、強い口調を侑治郎にぶつけようとするも、途中でさえぎられた。

「あのさ、俺が居ない時にやつてくれないか」

もう、うんざりだ。そう言いたげな顔で胸の内を吐露した。

「分かった。じゃあ、帰れ」

即座に爽奈が反応。喜色を満面にして、軽い口調で言つた。

出合つた時から薄々感付いてはいたが、ここまでお子様な性格とは夢想だにしなかつた侑治郎は、胸中に激しく生じた呆れを押し隠しながら、席を立つ。

「そうか。それなら、そろそろおいとましますか。木下さん、カレーハンチソース。とても美味しかつた」

突然変わつた空氣に、成佳は若干戸惑う。

「え、ええ。また宜しければ、一緒に食べましようね」

早くも玄関で靴を履いている侑治郎が、首だけ振り向いて微笑む。

「ありがとうございました。じゃ、お邪魔しました」

ドアが開かれ、何秒も経たずに閉まる。その閉まった音だけが4人をしばらく包んでいたが、やがて爽奈の音頭で再開された。

階段を上がつて自室に入つた侑治郎は、1つ大きく溜息を吐くと、しみじみと独語する。

「女の思考回路つてどうなつてんのかな……。本つ当、切に知りたいわ」

明日以降のことを考えると、もう一つ大きな溜息が出る侑治郎だった。

「でっくん、お前は完全に包囲されている。大人しく出て来い！」

「黙れ！ 人質の命がどうなつてもいいのか！」

俺は今、見知らぬ一軒家の二階で人質を取つて立てこもつてゐる。人質の木下を左で首を絞めるよつにして引き寄せ、右手には鋭利で部屋の電灯に反射し、鈍色にきらめくナイフを持つて首筋に当つて、窓から叫んでいる。

何でこんな状態になつたかは知らない。気が付いたら、この状態だつたんだ。

そして、かれこれ10分ほどこの問答が続いている。よくまあ、飽きもせぬやつてゐるな、と我ながら思つ。

「でっくん、お前は完全に包囲されている。大人しく出て来い！」  
また言つた。お前もよく飽きないなあ、江里口よ。と言つたか、よくお前にぴつたりな警察の服があつたもんだ。  
さて、何で返そうか……。

「黙れ！ 人質の命がどうなつてもいいのか！」

と思つてたら、また無意識に出ちやつたよ。何回目のオウム返しだ。お互い事態を進展させる気がないんだな。

「江里口巡査部長、これ以上の説得は不毛かと思われますが」  
江里口の隣に居る女にしては結構な長身で、眼鏡をかけた美人百武が眉を彫らせてゐる。スタイルが良いだけあつて警察官の服が似合つうなあ。

江里口は、百武の提言を受け止めたのか、はつとして頷く。ほつやつと終わるのか。

「でっくん、お前は完全に包囲されている。大人しく出て来い！」  
同じかよ！ 思わずこけかけて、隣のうんともすんとも言わない無表情の木下を刺しそうになつたじやねえか。ああ、そうか終わらせる気がないなら、こつちもこつ返すよ。

「黙れ！ 人質の命がどうなつてもいいのか！」

「どうだ。百武の言う通り、不毛だろう。こつちはお前が居なくなればいいんだ。早く帰れ。

「江里口巡査部長、ここはもう……」

江里口の後方に居る小柄の方の眼鏡 成松がおずおずといつた感じで袖を引く。おいおい、成松の方はえらいぶかぶかだな。手が袖から出てないぞ。江里口の寸法があるんなら、成松の分も用意しどけよ。

江里口は、また同じ所作を繰り返した。ようやく分かつてくれたか。早く帰れ。そしたら、人質を放してやるから。

「このままではきりがない。よし、私が独りで突入しよう！」

はあ？ 何でそななるんだ。2人とも「仕方ないね」じゃないよ。奴を止めろつて！

「黙れ！ 人質の命がどうなつてもいいのか！」

何で今これが出来るんだよ！ 使いどころが若干変だぞ。

「突入せよ！ でつくんの部屋へ！」

ドアを大きく開け放つて江里口が入つて来る。しばらくすると、背中に重さと衝撃が襲つた。

そこで俺は、目が覚めた。

「犯人、確保 つ。おつはよー、でつくん！」

爽奈の元気で潑刺とした声が部屋中に響き、寝起きの侑治郎の鼓膜を激しく揺らす。首だけ動かし、寝惚け眼を背中の方にやると、覆いかぶさつた爽奈が居た。

「な、何をしてんだ！？」

侑治郎の目がかつと見開かれた。眠気も当然ながらすつ飛んだようだ。

「何つて起きないから、飛びついて起こしたまでだよー。鍵も開いてたし、無用心だなーでつくんは」

邪氣のかけらもない笑顔を向け、背中軽く叩いた。

「昨晩うつかりかけ忘れただけだ。もしかして江里口、ずっと何10分も前からドアの前で、何か叫んでなかつたか？」

「うん、言つてたよー。『でっくん、お前は完全に包囲されている。大人しく出て来い！』ってね。でっくんも言つてたよね？」

「ああ、俺は夢の中で『黙れ！ 人質の命がどうなつてもいいのか！』って言つてたな。右手にナイフを持つて、左手に木下を人質に取つて。……あれ？」

侑治郎の右手には孫の手、左手にはクッショーンが握られていた。固まつてしまつた侑治郎を見て、爽奈はおかしそうに頬を膨らませていく。

「ふつ……どれがナイフでどれがなるさんなの？」

「あれ、おかしいな……。夢の中では確かにあつたんだけだな」堪えきれなくなつた爽奈が、哄笑する。

「あれー……まあ、いつか」

侑治郎もあれこれ考へても仕方ないと想い、爽奈に釣られる形で哄笑した。

暫時、2人が笑い合つていると、玄関先から咳払いが1つ鳴つた。紗弥菜によるものである。それが合図だつたのか、にがにがしげに口を開く。

「爽奈！ あんたつて奴は……仮にも嫁入り前の娘なのよー。今すぐ離れなさい！ 田城寺も早く着替えて！」

怒りと恥ずかしさで、林檎のように顔が真つ赤になつている。

「はいはい」

珍しく素直に従つた爽奈は、ベッドから身軽にひょいと飛び降りた。

よつやく、上半身が自由の身となつた侑治郎。開放感を味わつている中で、ふと頭に疑問が生まれてきた。

「なあ、さつきから気になつていたんだけど、何でみんなジャージなんだ？ 何処かに行くのか」

「近くにある野瀬私立保育園に、ボランティアに行くんですよ。だ

から、円城寺さんもどうかなー、つて

紗弥菜の隣でこちらを窺っていた真優が、やんわりと答えた。

「ほー、ボランティアねえ。良いね。俺も一緒に行くよ」

「んじゃ、早く着替えようかー。はい、ジャージ」

「ありがとう……つておい、何を勝手に人のタンスを開けてんだよ

つ？」

「それにしても、良いジャージだねー。もしかして新しいジャージ？ そしたら、アメリカにある州と同じだね。ほら、ニュージャージーつて」

瞬間、春なのに寒風が吹き荒んだ気がした。誰一人としてくすりとも笑わない。表情そのままに、雪像のように固まった。

「あれ？」

爽奈が状況掴めず、素つ頓狂な声を挙げた。

いち早く我に戻った侑治郎が、無言で爽奈の脇の下に手を入れ、高い高いをするようにして軽々と持ち上げると、そのまま玄関先まで連れて行つた。

「悪いけど、少し待つてくれ」

ドアを閉めた途端、紗弥菜のきいきいと叱る声が爽奈に浴びせられた。

「とこりで」

最後にアパートの階段を下りきつた侑治郎が切り出した。

「今居ない木下はどうするんだ。と言つたか、どうしたんだ？」

自慢の長い黒髪を、首の後ろで束ねてポニーtailにしていた紗弥菜が、首を少し後方に回す。

「今から起こしに行くのよ。成佳は休日になると、大抵寝起きがよくないから」

ぶつきらぼうに言つて、すぐに前を向いた。

背が低く、自然と爽奈以外には上目遣いになつてしまふ真優が、

侑治郎の顔に眼を向けながら苦笑する。

「今日のボランティア自体そーちゃんの思いつきで急だつたから、私が貸したゲームかアニメのDVDを徹夜で観たと思うんですよ。だから、寝たばかりかあんまり寝てないかもしません」

「どうよ。凄いでしょー」

爽奈が振り向いて、得意顔で偉がつて見せた。

「全然誉めてない」

「ちえつ」

爽奈は、面白くなさそうに正面を向いた。

「そうなのか。本当、人は見かけによらないもんだな」

侑治郎がしみじみ感じ入つていると、紗弥菜が成佳の部屋のインター ホンを押した。寝ているのか全く反応がない。

「よーし、また私の出番がきたようだ」

「煩いから却下」

紗弥菜が爽奈の頭をがしつと両手で掴んだ。

とさかにきた爽奈は、悪態をつく。

「何をするだあー、この牛乳！ <sup>うしのめ</sup> 愛もない胸を持つお主に、私を止める資格などない！」

紗弥菜は、たちまち皿を吊り上げ、赤々と顔を上気させながら、憤怒する。

「黙りなさい、この無乳！ 胸のないあんたに胸のことをとやかく言われる筋合いなんてないわつ！」

「ねわんだとお！ それを言つのか！ あんたもつぐづぐ嫌な女だね。だから、男が」

「それは関係ないでしょつ！ 大体、いつも言葉に詰まるとそればっかり」

口喧嘩をしている2人を後日に、真優がドアノブを捻る。すると、あっさりと開いてしまい、驚きのあまりに思わず声を漏らす。

「開いちゃつた……」

「突入せよ！ なるさんの部屋へ！」

それを聞いた爽奈は、言いかけた面罵の言葉を飲み込んだ。次に

きびすをかえすと真優をどかし、玄関に入るや靴を脱ぎ散らかして、突撃していった。

仰向けにすくすくと寝息を立てている成佳の胸に飛び込んで、気

持ち良さをうに頬ずりする。

「う……ううん……」

くすぐったいのか眉を困らせる。しかし、眼は細められ、口元は微笑んでいるから、嫌ではなさうだ。

「はふう……」

至福の吐息が漏れた。胸を枕に爽奈も寝てしまいそうだ。急な胸の圧迫感に、成佳の眠気は少しずつ飛んでいく。薄目につたところで、闖入者が居ることに気がついた。

「あれ、爽奈ちゃんじゃない。おはよ。どうしたの? こんな朝早くに

そこそこ元のんびりな口調で言ひ終えて、嫌な顔一つせずに爽奈の頭を優しく撫でる。

「今日ねー、もうちょっとしたらボランティアに行こつかと思つんだー。でもねー、今は、なるさんの愛が一杯詰まつた胸を枕に寝ちゃうのもいいかなー、つて思つてきたんだけどー、どうしようかー?」

今にも寝くたばりそうな間延びした語勢だった。

成佳は爽奈の頭のにおいをかぎつつ、しばし思案する。

「うーん……特に用事もないし、私も行くわ。ちょっと眠いけど

「ええー……」

「『ええー……』じゃないわよ、このチビ子ー、成佳から離れなさい!」

いつのまにか紗弥菜も部屋に入つてきていた。成佳の胸の上で眠りかけている爽奈を割と軽そつて持ち上げた。

爽奈が口をとがらせる。

「なーに、を、するだあー」

「黙りなさい。それじゃ成佳、私達は外で待つてるから。それとも、

三つ編みを作るのを手伝おうか？

「うん。悪いんだけど、お願ひします」

起き上がつて端座位になつてい成佳が、頭を軽く下げた。

「となると、人手が必要ね。真優も入つてきて手伝つて。円城寺は、外でこれを持つて待つてくれない？」

「はーい、分かりましたー」

真優が嬉々として手を上げ、承諾。部屋に入つていつた。

「別にいいけど……。起きたら、大変なんじゃないのか？　俺は木下みたいにその……」

恥ずかしそうに口元もる侑治郎に紗弥菜は、口元に狡猾な笑みを湛える。

「胸の感触がないから怒るつて？　ふふふ、馬鹿ね。それが狙いなのよ。そうなつたらなつたで被害を被るのは貴方一人だしね」あまりにも自分勝手な言い分に絶句した侑治郎に、すっかり眠つてしまつた爽奈を預ける。そして、ふつと真顔に戻り、

「じゃ、頼んだわよ」

言い返す暇をとらず、ドアを閉めてしまつた。

（な、何て奴だ……）

この時、初めて紗弥菜の恐ろしさを知つた侑治郎であつた。

## 07章……それをやつたら園児が泣きます

爽奈達と侑治郎が出会つてから、2週間が経とうとしていた。

当初は、一部を除いてはかなりぎこちなかつたが、成佳を中心に交流を持ちかけていて徐々ではあるが、親しくなりつつあつた。

それでも紗弥菜だけは、なぜだか侑治郎との会話が他の3人に比べて圧倒的に少なく、話しても大体は2、3交わしただけで淡白に終わつてしまつ。しかも、関わることを避けている節さえもある。

そんな紗弥菜を侑治郎は、少しは気にかけてはいたが、いずれ話すきつかけがあるだらうと楽観的に構えていた。それゆえ、侑治郎も淡白な会話・対応で接することにしていた。

だから、先ほどの侑治郎に狡猾に笑いかける紗弥菜なんて、初めてであつた。何かしら心境の変化があつたと思われる。

だが侑治郎は、一考しただけで頭を振つた。考へても無駄だと思つたからだ。

眼をふと、下に向ける。腕の中では爽奈が天使のような寝顔を見せてゐる。本当に、今年で成人を迎えるのかと疑つてしまふほどの、艶色<sup>えんじょく</sup>が無いに等しい童顔。長い睫毛に、今は閉じられているが大きな眼。にきびやほくろなどはなく、すべすべとしていて思わず触りたくなるような餅肌。

「やつぱり、子どもにしか見えないよな……」

無意識に感想がぼそりと出た。瞬間、爽奈が怒つて起きるのではないかとぞきぞきしたが、全く起きる気配がなく、ひとまず安堵の息をつく。

すると、何の前触れも無く、いきなり爽奈が笑つた。

侑治郎は、釣られるよつにして微笑む。爽奈の笑顔に、胸が充足感に満たされていくよつだつた。

「そついえ、静乃姉ちゃんのとこのがきんちょ共は、元氣にしてるかなー……」

空を見上げ、故郷に居るいとこの顔を映し出す。

「錫杖だ！」

叫び声とともに、みぞおちに強烈な衝きが入れられた。

「ぐつ……」

両手が塞がつていて防御もできない侑治郎は、不意に襲来した胸が塞がるような激痛に耐えつつ、寝ている爽奈を落とすまいと、歯を食いしばって必死に耐えた。

「つたく……どんなアニメを観たら、こうも体が動く夢を見るのやら……」

恨めしそうに侑治郎は、爽奈を注視する。

しかし爽奈は、そんな侑治郎を全く意に介していないのかの如く、気持ち良さそうな寝息をたてるだけだった。

野瀬私立保育園は、爽奈達が住んでいる野瀬市の中で、5本の指に入るほど優良保育園である。1977年に創設。98年には温水プールも併設され、スイミングスクールも同年に開かれた。幼児からお年寄りまで幅広い人々から利用されており、人気を博している。

また、市内で初の24時間体制を2000年から開始。1日中開いているということで勤務形態は、さながら介護福祉士のようだ、早番、遅番、夜勤の3つとして決め、職員を代わる代わるながらも常駐させることにしている。

4年前、2005年の3月を以って様々な改革を行ってきた2代目園長・龍造寺百代が高齢の為に勇退し、2005年の4月から新しい園長が取り仕切つていた。

「加代子さん、来たよ つー！」

職員玄関から上履きに履き替えた爽奈が、すぐ目の前にある職員室に向かつて叫んだ。

「はーい、ちょっと待つてね」

しばらくすると、1人の中年の女性が上履きをぱたぱたと鳴らせ

ながら、姿を現せた。

「おっ、いつものメンバーのお出ましね。今日もお願ひするわね」「はいっ。宜しくお願ひします」

女性陣が声を合わせて返事をし、折り目正しく礼をする。侑治郎も慌てて、上半身を少し折る。

「あら」

加代子は、1人だけずば抜けて背の高い男が、混ざつていることに気づいた。慌てた姿を見てくすりと笑う。

「この今どき風の男の子は、だ・れ・の彼氏かしら」

「誰の彼氏でもありません。ただ校長に、私達と行動を共にしようと言われた同級生です」

紗弥菜が真顔で代弁した。

加代子は、にべもない答えに苦笑しつつ問う。

「まあ、そうなの。貴方、お名前は？」

「円城寺侑治郎です。以後、宜しくお願ひ致します」

恐縮し切つた態で、大きな体を再度折る。

「いらっしゃるこそ宜しくね。因みに私は、なべしま鍋島加代子。この野瀬私立保育園の園長だつたりするけど、気軽に”鍋島さん”だの”加代子さん”つて呼んでもらつて結構よ」

鍋島加代子　野瀬私立保育園の3代目園長。前述の通り、2005年の4月から園長に就任。この時若干40歳だったが、前園長の強い要請もあつたので異例中の異例ながらも承諾したという。御歳44歳ながら、体型が若い時のままを保つていてるらしく、腹は出ずに腰つきもしつかりとしている。一の腕もそんなに垂れてなく、足も細い方ではある。おかげばに近い髪形であり、染めているのか白髪が見受けられない。張りのある肌に愛嬌のある下がり目で、人の良さそうな雰囲気を醸し出していた。

因みに、爽奈の母親とは共に働き、懇意にしていた経緯がある。

爽奈自身も幼い頃はこの保育園に通つていて、加代子にはよくお世話になっていた。母が死んで引っ越してぶつつりと音信が途絶え

ていたが、高校の時に保育士になる話を伝え、ボランティアに来るようになつてからは、頻繁に交流する仲になつた。以来、爽奈は加代子を母のように慕い、加代子も爽奈を娘のよう不可愛がつてゐる。

「それで加代子さん、今日は何をしますか？」

爽奈が瞳をきらきらと輝かせている。びりやん、早く園児達と遊びたいようだ。

「私の出で立ちを見て分からぬ？」

加代子がポケットから鎌を取り出して手に持ち、手足を広げてみせる。

よくよく見れば、頭には麦藁帽子を被り、首回りには純白のタオル。長袖のポロシャツに手には軍手が装着してあり、右手には鎌。ズボンは動きやすいジャージである。

「分かつた！ なまはげの格好をしてふにゅほへほ」

紗弥菜が背後から頬を掴み、引っ張つた。

「馬鹿、どう見ても草刈りの格好でしょ」

「ふあにふんらー」

爽奈が抵抗するが、全然話せていない。

加代子が嬉しそうに紗弥菜を指差す。

「そう。紗弥菜ちゃん、大正解！ といつことで、職員室の中に入つて装備してから、グラウンドに集合ね」

「はああ……」

草刈りが始まつてから1時間ほどが経つた。グラウンドの脇に生えていた雑草はあらかた消え、そろそろ終わつてもいいぐらいだつた。しかし、加代子が「終わり」と言わない限りは終わらない。その肝心の加代子は、侑治郎と何やら話していく、しかもかなり盛り上がつてゐる。

「そーちゃん、どうしたの？ 元気ないね」

悄然としている爽奈に、可愛らしい声がかかつた。

「おー、まゆっち……眼鏡に汗がついてるよ。大事にしなきや駄目

だぞー……」

「え？ ほんとだ。ありがと！」

指摘されて初めて気づいた真優が、眼鏡を外してポケットから眼鏡拭きを取り出して、レンズを丁寧に拭く。陽光にかざすときらりと光り、汗と汚れが取れたことに満足したのか微笑みながら、眼鏡をかけ直した。

真優の所作をまじまじと観察していた爽奈が、小首を傾げて意見する。

「やつぱりまゆつちは、眼鏡を外すと可愛いことは可愛いんだけど、何か物足りないくなるよね。折角の黒髪黒目だし、何とも勿体無くなると言つか」

「はははっ。じゃあ、外人さんはどうなの？」

「外人は、大概1つの国に民族が一杯いるから、金髪でも茶髪でも黒髪でも紅毛でも碧眼でもいいんだよ。だから、外人の眼鏡は無条件にOK。むしろ最高。でもね、日本人ってのは、昔から眼はまだしも髪は黒髪って決まってるの。だのに、最近の若者ときたら……」

最初の方は笑顔で語っていた爽奈の顔が、最後の方には段々と陥しくなつていつた。怒りがふつふつと沸きあがり、やるせない気持ちを鎌に込めて土を削る。

「大和撫子が消えたって言るのは、本當だね。あんな汚ねえ髪をよくまあ、平氣でみんなの前で晒せるもんだよ。そんな奴に、眼鏡をかける資格なんかないねつ。使い捨てコンタクトで十分だ！」

呪詛を投げかけつつ、がつがつと土を攻めて掘削していく。

完全に地雷を踏んだと悟った真優は、必死に話題を逸らそうとする。

「で、でもさ、さやつちゃんやなるちゃんはどう？ まるで昔に出でくるお姫様みたいじゃない」

「なるさんは、文句なしでお姫様。紗弥菜は……外見だけは文句ないんだけど、性格が町のお転婆娘つて感じかな」

この言葉に、少し離れた所で成佳と談笑していた紗弥菜が、素早

く反応した。ずかずかと歩み寄ると、怒りを露にする。

「誰が町のお転婆娘よ！ 何処までも失礼な奴ね。私がお転婆娘なら、あんたなんかあっちの意味じやない稚児よつ！」

「あーもう、煩い煩い！ 子供達に聞こえるよ。黙らんと自慢の黒髪を……あ、やつぱいめん。紗弥菜も姫様です。すまんね」

爽奈からみるみるうちに勢いがなくなつていつた。しまいには下を向いて、土を一定の間隔で殴り始めた。

拍子抜けした紗弥菜は、意外そうな顔になる。急激に力が抜け、今にも手にしている鎌を落とさんばかりだ。

成佳が耳元に近付いて髪と汗のにおいを、極力音を立てないよう鼻で吸い込みつつ、ぼそりと言つ。

「爽奈ちゃんは、紗弥菜ちゃんの髪と眼鏡が1、2位を争うほど好きなの。それを悪口に使おうとしたことで、自己嫌悪に陥ったのよ。久々に観たわね」

「そうだったわね。ま、まあ、無駄な大声を出さずに済んで良かつたわ」

何處かつまらなそうな表情を含ませながら、紗弥菜はつんとそっぽを向いた。

「みんなー、終わりよ。シャワーを浴びて、園児達と遊んでちょうだい」

と、丁度頃合を見計らつたかのように、加代子の声が4人にかけられた。

「はいはい、はあーいっ！」

この声に復活した爽奈が、鎌を思い切り頭上に掲げて元気よく答えた。そのまま職員室の方へ走つていく。

他の3人も爽奈に習つ。勿論、年相応の落ち着きを備えている為、走ろうとはしないが。

「ふふふ、相変わらず爽奈ちゃんは元気ね。幼い頃と全然変わらな  
いわ」

加代子が穏やかな笑みを浮かべた。

「元気すぎでこっちは疲れますよ。しかも”でっくん”なんて変なあだ名も付けられましたし」

両手にざつしりと雑草とゴリラと石が詰まつたゴリラ袋を持っている侑治郎は、苦笑しながら嘆いた。

「まあ、そう言わないので。あだ名をつけるのは、爽奈ちゃんの昔かららの癖みたいなものだから」

「そりなんですか。鍋島さんがそう言つなら仕方ないですわ」

言い終えて、ふうっと溜息を漏らした。

「それよりも、例の件は大丈夫なのね？」

「加代子が念押しするように訊いてきた。

「はい、勿論大丈夫です。月・水・土でしたっけ？ 問題なく空いてますので、宜しくお願ひ致します」

歯切れの良い返事を聞き、安心したとばかりに首肯する。しかし、

対等の条件だつたことに心付き、手を振つてみせる。

「いやだわ、こっちが宜しくお願ひしますよ。経歴を存分に活かして頑張つてちょうだいね」

「はい！」

喜色を面に表し、胸を張つて返事をする。

その侑治郎の幅広い肩幅と背中に、暖かな陽の光りが照らす。それはまるで、侑治郎の逞しさを表しているようであつた。

「ゴールデンウイークも過ぎ、あとは祝祭日が一切ない日が続く5月も、既に中旬に差しかかるうとしていた。

熱気の出てきた体育館に、折角の休日である土曜日を潰された幼稚園教諭保育士養成科の2年の生徒全員が、所狭しと座っている。勿論、ひと月前の学長の命令に従い、男子1人に女子4人の5人1組に分かれていた。

未だになれないらしく、女子の話を追従笑いを浮かべてただただ聞いている男子も、そこかしこに居た。

「卒業生講演会か……どんな人が話しくるんだろうな」

去年もあつたのだがその時侑治郎は、入院していて話を聞けずじまいだつた。

真優が若干下がつていた眼鏡を直しつつ、可愛らしい声で言ひ。 「あ、そつか。侑さんは、入院してたんですね。去年は……保育士になつた方と児童養護施設に勤めている方がきたんですね」「ほー、そうだつたのか。児童養護施設つてのは孤児院のことだよな。殊勝な人も居たもんだ」

うんうんと納得したように頷いている、爽奈が無意識にスカートを穿いているにも関わらず、正座を崩したような座りからあぐらに搔き直した。両膝がぴんと生地を伸ばして、今にも見えそうである。

「今日は、晋ちゃん先輩とかつほーさんが来るらしいよー」

「また独特なあだ名だな。特に後者。誰だか分からんし、パンツ見えるぞ」

侑治郎が少し恥ずかしそうに田線を逸らしながら、指摘する。

因みに5人は、車座となつて座つており、侑治郎の正面に丁度爽奈が座している。

爽奈がにたにたと笑う。

「これだけで照れるとは、うぶな奴だねえ」「や、やかましい！」

侑治郎は顔を明後日の方に向けて、声を上ずらせて怒鳴った。事の成り行きを静観していた成佳が、菩薩のように顔をほひりばせ、爽奈の眼をじっと見る。

「爽奈ちゃん、お行儀が悪いから直しなさい。さもないと……」

爽奈は即座に目線を逸らす。

紗弥菜と真優の2人も成佳を一瞥して、半ば戦慄しつつもそのまひそひそ話に入った。

一見すると、子どもを注意する優しそうな若奥様にしか見えないが、爽奈は知っていた。本当に温厚な人ほど怒った時の迫力は、凄まじいものがあることを。前に怒られたことを少し思い出してみる。

「ううつ……」

思わず悲鳴ともとれる声が吐いて出た。開始15秒ほどで恐ろしさのあまりに脳内に映し出した映像を、かぶりを振つて焼き消した。成佳の方を見ると、まだこちらを見ている。しかも心なしか痛みが増した気がした。早く謝らないと、背後に般若が友情出演しかねない。

「う、ごめん。直すよ」

あぐらから反省の意味も込めて正座に座り直した。

すると、爽奈からすれば何処か険を帶びていた成佳の笑顔が、普段のものに戻つた気がした。

「はい、よく出来ました～。恥じらいを持たないおな」など……まあ、いいか

爽奈の頭を優しく撫でる成佳。

だが、撫でられた爽奈は、強張つた笑声を無理矢理口内から出すだけであった。

一連の光景を唯一傍観者として見ていた侑治郎は、何のことだかさっぱり分からず、頭上には疑問符が浮きつ放しだった。

「それでは、本日体験談を述べられるお一方の「」登場です」

進行役の女子が、朗々と読み上げた。

次の瞬間、左方の幔幕が少し揺れたかと思うと、2人の男女が勢いよく飛び出してきた。そのまま重々しい教壇に備え付けられたマイクの前で止まった。

「晋之介に果穂、あいつら何やつてんだ……？」

侑治郎は、眩いたつきり開いた口が塞がらない。

「どーもー！ 納富晋之介でーす！」

「成富果穂でーす！」

「2人合わせて、せーの

「ダブルトミーでーす！」

2人は、お笑い芸人のみたいな自己紹介を、大雨のせいで普段では信じられないくらい速くなってしまった下水溝のように終えた。結果、もともと静かだった体育館が水を打つたように、更に静寂に満たされた。総勢100人は居るのに、しわぶきもくしゃみさえもひとつも聞こえない異様な空間。まるで某漫画のようにあるスタンド使いが、時を止めたかのよう。

ステージ上の2人は、満面に湛えられた笑顔、他ほほかん。

過度の静寂は、人を焦燥に駆らせたり不安に陥らせることがある。恐怖感もしかりで、それが長ければ長いほど効能が現れてくるものだ。

そんな時人は、どうしたらいいか解からなくなる。全くの不明、理解不能状態になり、脳の動きが急速に活発化する。混乱で暴走していると言つてもいい。明らかにただ事ではない状況を打破する為だ。

しかし、2、3人のちゃちな少數ではなく、百に届こうかという衆人環視の中である。意識している者が居る、居ないにも関係なく、無言の重圧が胸を潰していくもの。それに、そう簡単に思考が働くはずがないのだ。妙案など出ず、ただ後ろ向きな湯水の如く浮かんでは、その中から取捨選択の作業を、秒単位の早さでまともなもの

はないかとこなし続ける。

やがて1つの結論に達したのか、納富と名乗った男が、くるりと背を向けた。

時が動き出した瞬間である。全員の田線という矢ができる、後姿を容赦無く刺していく。

納富は、そのまま壁際まで行くとその場でひとまず座し、体育座りをして腿と腿の間に顔を埋めてしまった。

その頃になつてようやく事の異変に気付いた成富と名乗った女が、視線の先を辿つてみた。すると、あろうことか何人たりとも近寄り難い雰囲気を周囲に撒き散らしている無残な納富が、体育座りをしているではないか。

いまいち状況が飲めてない上に、楽觀主義者でそれでいて強心臓だつた彼女は、純粹に「何やつてんだ？ こいつ」としか思わなかつたらしい。何食わぬ顔でつかつかと歩み寄り、割りと大柄な体を丸めているだらしない奴の腕1本を引っ張り、そのまま引きずつて横の幔幕に下がつていった。

とうとうステージ上に喋る者が居なくなつた。

瞬間、体育館は沸騰した。

生徒達は、一連のあまりにも不可解な振る舞いに、様々な感情や思いが交錯し、堰を切つたように意見や感情を吐露し合い始める。

「あの馬鹿たれが……」

侑治郎は頭痛を覚え、掌を額に当てて床に視線を落とした。

「あんれー？」でつくん、先輩方のことを知ってるの？

爽奈がいつもの調子で問うた。

「……そりや、1年の時同じクラスだったからな。晋之介とは友人だつたし、あっちの馬鹿とは悪友。忘れる方が無理つてなもんだ」溜息をひとつ吐き、床を凝視しながらややい加減な態度で淡々と返答した。次いで太息を漏らし、顔を上げて推論を述べ始めた。「多分、あの登場の仕方は馬果穂の差し金だろう。さしあたり、晋之介の弱み握つて逆らえなくしてんだろうな。全く、あいつのやりそなことだ」

真優は何とも言えない表情で、しきりにかぶりを振る。

侑治郎が聞き咎める。

「ん？ 成松は、あいつらのことを知ってるのか？」

真優が苦笑いしつつ眉をハの字する。

「知ってるも何も、私がボランティアによく行く児童館の職員ですからね」

「あー、そういうえば前に、ボランティアを掛け持ちしてるとか言ってたな。なるほどね。……にしても、何で2人で揃つて児童館の職員になつたんだか。確かに、仲が良かつたのは憶えているんだけど

……

黙つて話を聞いていた紗弥菜が冷ややかな視線を、眼鏡の奥の双眸から難しい顔で唸つていてる侑治郎に送る。

「円城寺、時の流れは残酷なものなのよ」「は？」

こきなりそんなことを言われても、理解できるはずがない。困惑し、紗弥菜の方を見やるが、つんとした態度で無視された。（いつまでも冷たい奴だな……）

1ヶ月弱経つのに、未だに他の3人と違つて慣れない。と言つよりも馴染みづらい。侑治郎の方も骨を折つているのだが、どれもこれもいまいち反応が薄かつた。

「いつまでも冷たい奴だな。だから彼氏が」

後の言葉に耳聴く反応した紗弥菜が、きつと爽奈睨む。「爽奈、学科内の生徒や教授が居る前で事を起こす気？ 嘘瞞ならあとでいくらでも買つわよ」

桐鶴にも似たような言を伝え、ふんと軽く言いながら、よそを向いた。

（江里口とはおそらく理由が違つけど、百武に腹を立てる理由を何で抱くのか、ようやく分かつた気がする）

侑治郎は、紗弥菜を理解したと思つたらしく、心中で数々のじこりが一気に氷解しさせた。そのまま流れで快哉を叫びたくなつたが、残念ながら公衆の面前であり、流石に自重した。

「みなさーん、静肅に静肅に！ 再度準備が整つたらしいので、静かにして下さーい！」

進行役の女子が、体育館中に金切り声を響かせる。ビリややり再開されるようだ。

喧々囂々（けんけんじゅうじゅう）となつていた生徒達の話し声が徐々に収束し、段々と數十分振りにじじまが帰来した。

「それでは納富晋之介さん、お願い致します」

全員が、先ほどのような事態の再来に危惧や期待を持つて、左の幔幕を注視する。

流石に2度はなかつた。それでも、緊張のあまりに手と足が一緒に動いており、所々からくすくすと失笑が発生してしまつたが。「えー、ご紹介にあずかりました。納富です。先ほどは、大変失礼致しました。切にお詫び申し上げます。

私がここ野瀬保育専門学校通っていた理由は、単純に子どものことを世話するのが、好きだったからです。だから、子供と触れ合える仕事であれば、何でも良かつたのです。しかし、保育士と幼稚園教諭の2つを卒業と同時に取得できる魅力に魅せられ、職業の選択の幅が広がると思った点もありました。

さて、なぜ私が児童館職員に就いているかと申しますと、こちらも理由が単純過ぎて申し訳ないのですが、幼い頃地元の児童館にお世話になっていたからなのです。本校に入学してしばらく経つてから、保育士の資格があれば児童館職員になると知つて欣喜したものです。実習も当然、2年間児童館でお世話になりました。

えー……あとですね。私としては、ボランティアか有償のアルバイトをしておいた方が良いかと思います。実践経験は損にはなりません。むしろ、自分にとつて得ばかりです。勉強も勿論いいんですけど、やっぱり現場に立つて動く事が肝要かと。勉強以外で気づかなかつたことや、その逆もあつたりなので。これは大半の方が目指すであろう保育士にも同じことが言えます。現場に出ててんやわんやするよりも、ボランティアやアルバイトの段階でてんやわんやしてた方が、ましとは言い切れないのですが、救いようがあるかなと。まあ、これはあくまで自論なんですが。

最後に為せばなります。あと、やる気と努力と情熱さえあれば、大丈夫だと思いますので。以上で終わります

一礼するや、生徒達の拍手が体育館中を包む。その中を今ではすっかり充実感に満ち溢れた晋之介は、今頃思い出した作法に則つて幕内に消えていく。

「次に成富果穂さん、お願ひ致します」

晋之介以上に生徒達は幕を注視する。なんせ、先ほどの騒ぎを巻き起こした張本人である。一挙手一投足が気になつてしまつるのは、仕方ないことだった。

だが、生徒達の期待は裏切られた。果穂が真面目くさつた作法で出てきたからである。

対照的に教授陣は、安堵する。これ以上面倒臭いことは「めんなのだろ」。

「えーっと、成富です。先ほどは大変失礼しました。だけど、反省はしていません。私はやりたいことをやつたからです。まあ、さつきの件はこの辺にしておきましょうか。さつきからお世話になつた教授の責めるような視線が、ちくちくちくりとか弱い私に突き刺さりましてね。さしもの私も効果は抜群でして、言つなればヒットポイントが最大値100としたら、今は10ぐらになもんじ。

さて、体験談と言つてもさつき晋 納富……くん？ ああ、やっぱ”くん”づけじやないとまずいっすか。分かりました。ああ、えーっと……そう、体験談でしたつけ？ ちょっと前に納富くんが、私の言いたいことを言つてしまつたので、特に話すこともないんですけどねえ。しかも児童館に勤めてますし、8割方が保育士や幼稚園の先生になるでしょうしね。完璧場違いといふか納富くんだけでも良かつたんじやないかってつづく思うのですが。まあ、保育士とかならこの時期運動会の所もあるし、割と近間で暇そうな奴等を引っ張ってきて喋らそうとしたら、私と納富くんしか居なかつたという落ちでしじうね。一応は勉強したんだから喋れるだろーと思つた教授、私は喋りませんよ。喋るのは……」

備え付けられた無線式のマイクを奪つようにして掴み、ステージを一思いに飛び降りた。そして、身近に居る女子の前に立ち、にいっと笑う。

女子は引きつった笑みを返すだけで、そのまま固まつてしまつた。「この場に居る生徒達に語つてもらいましちー！ じゃ、素敵なスマイルを見せてくれた君つ。あたしが質問するから、答えてね。まずはお名前から、どおーぞー！」

鋭い風切り音とともにマイクが振り下ろされ、女子の口から数セントチという絶妙な位置で止まつた。

隣の友達らしき女子が小声で呼びかけて、固まつた女子を揺らす。意識が戻つたものの、こきなり至近距離にマイクがあることに仰天

し、そのまままたも氣を失つてしまつた。

「あらら、氣絶しちゃいましたね。じゃ、友達想いの君にしようか。  
面倒だから、下の名前だけでいいよ」

マイクを横に滑らせ、氣絶した女子を必死に呼び起<sup>じ</sup>して、いた女子の口の前に持つて行く。

「……鞠<sup>まりえ</sup>恵です」

暫時、胆を冷やした鞠恵であつたが、一の舞になるまことひを何とか奮い立たせ、強めに答えた。

果穂は、マイクを口元に戻して相好を崩す。

「OK、鞠恵ちゃんだね。んじゃ、簡単な質問から。何で鞠恵ちゃんは、この専門学校に入学したのかな?」

「それは……保育士になりたいからです」

「ほう。何で保育士になりたいのかな?」

「幼い子ども達を世話をしていくことで、日々成長していく様子が見れ、私自身も一緒に成長していくと思つたからです」

と、ここで果穂が、持つようと片手をつむつて教える。

鞠恵は素直に従い、マイクを持った。

果穂は、ポケットからマイクを取り出してスイッチを入れた。どうやら、発言の度にマイクを交互に向けるのが面倒臭くなつたらしい。

「ほうほう。殊勝なことを言つてゐるけど、何だか如何にも面接対策用の答えにしか聞こえないわ」

図星だった。だが、考え方抜いた意見をけなされた気がして、鞠恵はむつとする。

「それなら成富さんは、どんな理由で児童館職員になられたんですか?」

「子どもが好きだから。ただそれだけだよ」

「そんな子どもみたいな考えでいいんですか?」

「あたしはいいと思うよ。小難しい意見で飾るよりは幾分いいと思うけどね。あと、逆に子どもが嫌いだったら、なる資格なんかない

じゃない。だけど、子どもが好きな人は無条件になる資格があるんだよ。……でもね、決して鞠恵ちゃんの意見が駄目つてことじゃないんだ。ただ素を言つてもらいたかつただけなんだよ。意地悪言つてごめんね」

「い、いえ……」ひからひそ生意気言つてすいませんでした。成富さんのお考え、よく分かりました」

「そう言つて、にっこりと微笑んで一礼する。

「いやいや、逆に良い質問ありがとうね。そういうばさ、何にならうと思つてるの？」

「保育士です」

「保育士か……んじゃ、親戚かきょうだいに小さい子が居たら、一緒に遊んであげたりしておいた方がいいよ。喜怒哀楽の機微を見分けられるようになつたら、完璧かな。赤ちゃんが居るなら、おむつ交換とかミルクの作り方や飲ませ方なんかも。いきなり〇歳児クラスはないとは思つけど、さつき喋つてた奴が言つてたとおり、経験は役に立つからね」

「はい、ありがとうございます！」

思わず、大声で答えてしまつたので、耳を聾する大音量がスピーカーから発せられる。周りが耳を塞いでしまつ所作を見て、鞠恵は赤面し、ぱつが悪そうに下を向いた。

そんな鞠恵を果穂は可愛く思えた。空いている片方の手で鞠恵の頭を撫でる。

「ははは、どんまいどんまい。見た目と違つて元氣があつて何よりだよ」

鞠恵の頭から手を放し、踵を返す。ステージ上に戻ると、マイクを元の位置に置き、最後にと付け加えながら語り出した。

「専門学校だからと言つて、別にその専門学校が特化している職業に就かなくてもいいと、私は思う。第一、去年まで在学しておいてなんだけど、その特化している進路だけなんておかしいですからね。人間、学んでいくうちに心変わりもしますよ。それは勉強が思つ

たよりも面倒臭いだとか、実習で現場を体験して思っていたものと違つて いたり、と様々。 そうして生まれてきた心変わりと言つかズレを直すのは、よほどのことが起きた心変りと言つかずでしょ うね。 割り切れる人はいいですよ。 これから頑張つて行けばいいんだ、と思う人は大丈夫。 しかしね、そこからずるずると悪い方に悪い方に考えて行つて、とうとう自分は不向きだなんて烙印を押しちゃう人いるんですよ。

私は、無理に保育士や幼稚園の先生になれとは言いません。 難しい理由はいらない。 そんな時は単純明快に、何でこの道に進もうと思つたかを思い出せばいいんです。 理由なんて十人十色。 でも、絶対に”人 が 好 き”、”子 ど も が 好 き” つて単語はあるんじやないかと、愚考します。 今まさに悩んでる人は、よくよく考え方直してみてはどうでしようかね。 では、私からは以上です」

果穂が形式的な一礼をすると、たちまち拍手が鳴り響く。 その中を満足気な表情で幔幕に下がつて いつた。

こうして、卒業生講演会が一応は無事に終了した。 教授達があとで果穂を呼び出し、説教を垂れたのは当然ことであつたといつ。

「失礼しました」

脩治郎が、深々と礼をして静かにドアを閉めた。無表情を決め込み、しばらく廊下を歩いて行く。曲がり角を曲った所で、おもむろに顔を歪ませた。

「あ、ー……あつつい。何とかならねえかなー、この暑さ……」

左手をうちわのように顔の近くで扇ぐ。だが、微々たる涼しか得られなかつた。右手もTシャツの胸倉辺りを掴んで、風を入れんと必死に動かすが、全く効果がないと言つてもいい。

そればかりかこの時期独特のむわつとした湿気を、はらんだ生暖かい空気が廊下中に充满している。窓を全快にしてもあまり外気が入つてこないこんな所で、涼を得ようとすると自体が無茶というものだ。

季節は既に6月の上旬に突入し、雨天が増えてきた。それと比例するかのように、ここ最近ではセ氏25度以上の夏日が連續しており、体にまとわりつくような暑さで人々をいろいろさせ日々が続いている。

脩治郎もいらいらしていた。暑さもそうだが、実習のおかげで前倒しになつた定期試験が、今月の下旬に差し迫つていて。入院中は何もすることがなく、卒業と同時に国家試験が免除されるのにも関わらず、暇にかまけて様々な教科をこなしてきた。

しかし、分からぬ所はどうしても分からず、連日1日1教科の度合でそれぞの教科の教授のもとを訪ねに行つていた。すると、5時限まである日はとんでもなく遅くなり、帰りの時刻も自然と午後7時を過ぎていることも少なくない。

ありがたいことに成佳や真優も良かつたらと教えてくれるが、彼女達にも試験勉強があるしと、最近では断つてゐる。

今日は幸い3时限の午後3時前には終わったものの、色々と訊き

たいことを訊いていたら、午後5時近くまでになつていた。流石に、こんな時間帯に教室に居る者など皆無であり、しんと静まり返つてゐる。

侑治郎は、かばんを取りに行こうと窓側の列に足を踏み入れようとした。その時だった。

「うわっ！」

掃除当番の生徒が片付け忘れたのか、床に落ちていた雑巾に足を取られ、前のめりに机に突っ込んでしまつた。机と椅子が同時に倒れ、轟音クラッシュが教室中に鳴り渡る。

「いつつ……ったく、誰だか知らんけど、ちゃんと片付けておけよな。はあ～、よりもよつて百武の机を倒してしまうとはなあ……。あれ？」

愚痴りながら強かに打つた額を撫でていると、何も入つていないと思われた机の中から、クリアファイルが飛び出し、倒れた机の前方に落ちていた。

手にしてみると、それなりの厚みと重量があることが分かつた。  
(誰も居ないし、ちょっとぐらい見てもいいよな)

好奇心が湧き、1番上の何も書かれていない白紙をめくつてみると、無数の文字が白紙を埋め尽くすようにして紙面を賑わせていた。かぎかつこや三点リーダやダッシュがることから、ある結論に達した。そしてそれは、夢想だにしなかつたことであり、目を丸くする。

「もしかして、小説？ まさかあいつが……でもありえるな。眼鏡をかけているし、結構ものを知つてゐるみたいだし」

あつさりと単純な理由で衝撃的事実を片付けた侑治郎は、中身が気になつて仕方なくなつた。見てはいけないと脳内の天使が懸命に呼びかける。しかし、悪魔も負けていない。ただ単に、見ちまえ見ちまえと連呼するのみではあるが、これが実に効果的だつた。

「少しごらいなら……」

死闘の末に悪魔が勝つた。昂揚感が胸を圧し、若干の息苦しさを

感じつつも1ページ目の文章に視点を移動させた。

「放てえっ！」

鉄砲頭の胴間声が発せられるや、草むらに伏せっていた30人の鉄砲足軽が一斉に引き鉄を引いた。筒先から発砲煙とともに必殺の弾丸が大気を切り裂き、呐喊してくる敵勢を打ち倒していく。その中に、士氣を采配していた1人である騎馬武者の額に喰らわせることができた。

「よし、ひとまず退くぞ！」

鉄砲足軽は、鉄砲を背負うと縄でくくりつけ、一団散に退いていこうとする。

その退いて行く様を見た騎馬武者は、同僚を撃ち殺された悲憤慷慨し、絶叫する。

「ええい、小癪な！ かよくな小勢、ひと思いに踏み潰してやるつぞ。皆の者かかれい！」

「おおおおう！」

騎馬武者が手勢を率い、鬼のような形相で鉄砲足軽が退いた方をひた走る。やがて草むらからも抜けた。その時だつた。

「こ、これは何としたことぞ！？」

先頭を行く騎馬隊が眼前からいきなり消えたのだ。

不安が生じ、中ほどを走っていた騎馬武者が、進撃を停止ささうと号令をかける。

「止まれ！ 止まれ つ！」

一応は止まつたものの、後方を走っていた者は何故止まつたのか解せない。血の気の多い武者達は、文句を言つ事も出来ずにただ血走つた眼で前方を睨むのみだ。

騎馬武者は、10人ほどを割いて斥候を出した。すると、草むらを抜けた先には空堀が掘られていて、騎馬隊は壊滅したと言つ。

「むむむ……では、なぜあいつらは逃げおおせたのか」

疑問を吐露し、忌々しげに歯軋りをする。

「やむおえん、一時撤退するぞ…」

先ほどまでの気勢は何処へやら、すじすじと持ち場に戻つて行つた。

その光景を本丸からじつと見下ろしてゐる小具足姿の女が居た。見た目は幼さが取れて芳紀を少し過ぎたほどであり、艶やかで長い黒髪を後頭部辺りで束ね、額には細い白布が鉢巻として巻かれている。卵形のつるりとした面の中に整えられた眉、強い意志が込められた大きな瞳、筋の通つた鼻に、ふつくらとした唇には紅が引かれている。体はほどよい肉付きで、年相応の色気も備えていた。

彼女の名前は、遙山夏音。古風な時代に似つかわしくない名前であるが、父譲りの義理や人情に厚い気質を受け継いだ戦乱人だつた。

気がつけば侑治郎は、夢中になつて熟読してゐた。読了して一息ついた頃には、午後5時半を少し回つてゐた。ふと、体に不快感があることを覚えた。それもそのはず、高温多湿の教室に閉め切つた状態で1時間も居れば、体中に汗を搔くことは常識である。かばんからタオルを取り出して、とりあえずは顔に浮いた汗を拭き取る。首の汗を拭いた時、疑問に思う。

（これを届けた方がいいのか、机の中に戻しておいた方がいいのか…）

ペラペラめくると必ずと言つてもいいほどに、赤ペンで添削した跡が残つていた。ところが、70ページ目でふつつりと途絶えており、おそらくは部屋に帰つてから添削を再開するつもりだったのだろう。

（届けてあげるか。今頃は探してゐかもしれないし。……ただ、こんな汗まみれじや駄目だよな）

100枚近くある印刷用紙を綺麗に整えてクリアファイルの中に戻した。かばんの中に入れて、侑治郎はそそくさと教室を後にした。

「あれ？ おかしいわね、ないわ」

紗弥菜は、かばんの中身を一つずつ出してみた。それでも、添削中だった小説を入れたクリアファイルが見付からない。

「もしかして、学校に忘れてきたのかしら。……面倒だけど、取りに行くしかないわね」

諦観し、渋面を作った瞬間、チャイムが鳴った。

「はーい」

様々な人物を思い浮かべてみる。

（今時分に誰だろう。成佳か真優？ それとも……まあ、あいつは滅多に来ないか）

錠前を解除し、ドアを開けて出迎える。

「こんばんは。渡したい物があつて来たんだけど、ちょっとといいかな」

意外な人物の来客に虚を衝かれた紗弥菜は、目を瞠った。

（な、何で侑　円城寺が私の部屋に来るのよつ！？）

頭が激しく混乱の坩堝るっぽと化し、予想外の状況に脳の処理が遅れている。しかし、いつものように何処か冷たさを含んだ眼に変化させると、眼鏡の智ちを触りながら冷たく言い放つ。

「何しに来たの？ 部屋を間違えたんなら、謝れば許してあげるわよ」

「いや、間違えてないよ。ただ、渡したい物があるんだ」

「あつそう。渡したら、早く帰りなさいよ」

「言われなくともそうするわ。はい、これ。忘れ物だろ」

侑治郎がかばんから取り出したクリアファイルに、紗弥菜の動転は一気に極まつた。クリアファイルを奪うようにして受け取ると、ひしと両手で以つて胸の中に抱きしめた。真紅に染まつた顔を胸に落とし、今にも頭から外気より熱い風を出しかねない。

（何で何で何で！？ 侑治郎が私のクリアファイルを？ といふことは中身を読まれたつて事？）

黙り込んでしまった紗弥菜に、対処法などはなかつた。

侑治郎は、一時的に混乱から復活を待つた。顔を下に向けているものだから、何ごとかをぶつぶつぶやいているのは分かるが、表情が全く分からぬ。失礼と知りながらも少ししゃがみ、下から顔を窺つてみた。

眼鏡のレンズ越しに瞳が上下左右に動き回り、動搖の様子がありありと表れている。呼吸も少し荒く、心臓が高鳴つて胸が苦しいのだろう。クリアファイル越しに大きな胸を潰していた。

「それじゃ、俺はこの辺で……

これはしばらくな無理だと悟り、侑治郎は紗弥菜に背を向けてその場を去ろうとする。

「ま、待つて！」

紗弥菜が侑治郎の肩を掴み、自分の方に引き寄せた。

「ええっ？」

侑治郎は後ろから倒れそうになるが、何とか踏ん張つて振り向いた。

相変わらず紗弥菜は、上氣とした顔だった。恥ずかしそうに眼鏡を外して両手でもてあそびながら、伏し目がちに侑治郎を見る。そのしおらしい紗弥菜を初めて見た侑治郎は、どぎまぎした。いつもは鼻持ちならない高圧的な女と言う印象しかなく、とにかく嫌な奴という認識が脳内での確定事項だったからである。それが今、激しく揺らいでいた。

紗弥菜が蚊の鳴くような声で訊ねる。

「その……こ、これを読んだのよね？」

「あ、ああ、読んだよ。……それが？」

眼鏡をかけ直しつつ、恥ずかしさと嬉しさを混同した声音で言つ。「よ、良かつたら、私の部屋に入つてくれない！？ 詳しく聞きたいの……」

「ええつ！？」  
「いた  
甚く仰天した。“考えられない”と言つ单語が脳味噌を埋め尽くす。

「だ、駄目……かな？」

上目遣いで侑治郎の双眸をじつと見つめた。

侑治郎は心中で生睡を飲んだ。

性格は多少難があるが、紗弥菜は基本的に美貌を備えた美人である。そんな美人に上目遣いで物事を頼まれば断りようがないし、男なら胸が高まらないはずがない。

「いいよ。俺なんかでよければ」

侑治郎が首肯して言つと、紗弥菜は手を合わせて飛び上がらんばかりに喜んだ。

「本当つ？ ありがとうー、じゃ、狭いけど入つて入つて」

紗弥菜の嬉々とした表情に、侑治郎は若干の不信感を胸に留めつつも、後に従つた。

紗弥菜の部屋はこぎやつぱりと整理整頓されており、フローリングの床に塵1つ落ちてないほどであった。部屋の奥には勉強机が置いてあり、その上には10冊近くの辞書が2列に分けて詰まれており、物書きということを植え付けるのにたやすかつた。勉強机の隣には木製の本棚が鎮座し、様々な種類の小説から参考書や図鑑や漫画や絵本などが、所狭しと並べられていてまるで小さい図書館のようである。部屋の中央には少し大きめのモノクロのテーブルが置かれ、傍には座布団が敷かれてあつた。

「まあ、適当に座つてくつろいでよ。私はお菓子と麦茶を持って来るから」

「あ、こりゃどうも」

侑治郎はとりあえず座布団の上にあぐらを搔いた。

「はい、どうぞ。お菓子は甘い物しかなくてごめん。食べられそうだつたら、食べて」

紗弥菜が申し訳なさそうな顔をしながら、表茶と皿にさしつかく盛られた甘菓子を侑治郎の前に差し出した。

「いやいや、そんなそんな。お構いなく」

慌てて手を振る侑治郎の向かいに座りつつ、紗弥菜は首を横に振つた。

「遠慮しちゃ駄目よ。それに、これから結構時間がかかると思うからね。頭を使うから嫌でも食べなくなるわよ。さてと、感想を聞かせてもらつても宜しいかしら?」

「うん、分かつた。まずは」

侑治郎も普段から読書をしており、特に歴史小説を愛読していた。それ故に、相当な知識を持つていてるせいか、容赦無く内容について突つ込んでいく。

その度に紗弥菜は、喜怒哀樂を存分に働かせていた。やはり、自分の作品を他人に批評されるのは相当効くらしい。特に、長々と上手い表現にしたつもりで自分では良い文だと思つても、他人から見ればぐどいの一言で悪文と片付けられると尚更である。それでも、最終的には侑治郎の意見を真摯に聞き、冷静に受け止めていた。

「でも、良い所は良いし、姫とか武将の人物表現は良いと思う。ただ、細か過ぎるのも想像する助けにはなるんだけど、多用し過ぎるのは避けた方がいいかなと」

侑治郎とて鬼ではない。否定的な意見だけではなく、ちゃんと褒めるべきところは褒めていく。

「以上かな。あれこれ言って悪かつたな」

今の紗弥菜は無表情に近く、一応頭を下げて謝つておく。

「ううん、全然気にしてないわ。そりや、けなされたり罵倒されたりされれば頭にくる。けど、円城寺の場合は的確な批評だったもの。文句も怨みもないわ。付き合つてくれてありがとう」

莞爾と笑い、こうべを垂れる。

侑治郎は、初めて自分に対して礼儀正しく振舞ってくれる紗弥菜に、感動すら覚えた。同時に、激しく揺らぎつ放しだつた嫌な奴と

言つ確定事項が、脳内から抹消される。

頭を下げる紗弥菜の腹が、か細くくうーと鳴つた。

「あ……」

2人が同時に口とも発しやすい母音を口内から漏らす。皿を見れば、うずたかく積まれていた甘菓子はとつに消え失せ、食べかすのみが残つてゐるだけである。

侑治郎は、何だか紗弥菜のことが可愛く思えてきた。見た目はすつかり大人だが、以外にまだ子供なんだなと勝手に思つ。

「これは……その……」

紗弥菜は必死に取り繕つとするが、なかなか言葉が出てこない。

それがまた心美しく、侑治郎の頬を緩ませる。

「よし、あれこれ言つて申し訳ないし、俺が晩飯を作り。好きな料理を言つてくれ」

突然の宣言に弾かれたように、紗弥菜は侑治郎をまじまじと見た。

「え……そんな悪いわよ。批評して疲れたんじやない」

「いいから、好きな料理を言つてくれ」

急かされ頭を切り替える。少し考えた後、開口する。

「ロ、ゴーヤとブロッコリーと魚かな……」

「OK。じゃあ、ちょっと食材を持って来るな。台所を借りてもいいか?」

「い、いいけど……円城寺、あんた料理できるの?」

「ああ、任せておけつて」

鍛え上げられた胸板を拳でどん、と叩く。すつと立ち上ると、侑治郎はさつさと出て行つた。

紗弥菜にとつて信じられないことが起つていて。

（私の部屋で男が料理をしている……。しかも昨日までひくに会話をしたことがない男が……）

楽しそうに料理をしている侑治郎に田を向かつ、当てもなく思う。しかし、すぐに首を横に振る。

（ううん、正確には私が会話の芽を潰していた。折角、話しかけてくれるのに、冷たく返したり、嫌味つたらしく言つたり……。だから、侑治郎は嫌な女だと思ったに違いないわ。いくら小説の為とは言え、悪いことをしたものね……）

近くにあつたクッショוןを両手でぎゅっと抱きしめる。

（でも、今日みたいなハプニングが遇つて良かつた。正直、小説のキャラの構想を固めるとはいえ、半ば演技は疲れてたし。それに、侑治郎とは趣味が同じみたいだし、良い友達になれるかな？……あ、それは私の棘のない態度になればいいだけか）

随想に一喜一憂していると、侑治郎が料理を運んできた。

「どうした？ 腹が空き過ぎて腹痛でも起きてんのか

「ば、馬鹿、違うわよ！」

言つてから、しまつたと思つた。

「う、うめ……」

謝りうとするが、侑治郎が笑声でさえぎる。

「はははは、悪い悪い。それよりも食べてみてくれよ。口にあうか不安だけだわ」

腰を折ると、紗弥菜の前に料理が並べられていく。白米にわかめと豆腐の味噌汁、主菜が程よく皮に焦げ目がついた紅鮭とゴーヤの緑色が目立つゴーヤチャンプルー、他にもブロッコリーを茹でたものなど、紗弥菜の好きな食材を中心にテーブルを賑わす。

「……すうじー……」

頭の中で無数の語彙が浮かんだが、口から出たのはその一言だった。

「いやいや、全然大したことないよ。ちゃんと作ったのなんか、味噌汁とゴーヤチャンプルーだけだしさ。しかもゴーヤチャンプルーなんて、初めて作つたし

と、謙遜して手を振つてみせる。

「でも、初めてにしては上手くできてると思うわ。本当なの？」

「んまあ、文字のレシピをわざと読んだだけなんだけどな。出来上

がり写真なんてみたこともないし」「はあ……」

侑治郎の想像力に紗弥菜は舌を巻いた。並べられた料理を見ると、食欲が急激に湧いてきた。胸の前で手を合わせて上半身を少し前に倒す。

「それじゃ、いただきます」

まずは味噌汁を一口する。喉の通りをよくする為だ。出来立てで熱いが、味噌の風味と丁度いいしょっぱさと出汁だしが調和していて、美味しく仕上がっていた。

次いで、侑治郎が初めて作ったと言っていた「一ヤチャンブルー」をつまむ。「一ヤを口の中で噛み碎く。すると、塩分を含んだ水で苦味を取り除いていたらしく、程好い苦味が口内に広がり、紗弥菜は思わず相好を崩した。

「美味しい……」

つつとりとしている紗弥菜に侑治郎はほつとする。

「そりや、良かった。まずいかと思ってひやひやしたよ」

紗弥菜は箸を止めて莞爾と笑つてみせる。

「そんなことないわ。味付けがいい塩梅で完璧よ。料理の腕が立て羨ましいわ」

「いやあ……」

褒められて満更でもない様子の侑治郎は、こぞばやうに頬を指で搔く。

満足そうに食べ進めていく紗弥菜であつたが、不意に生来の性格鎌首をもたげてきた。

（料理は美味しい。だけど、何なのこの屈辱感は……！ 侑治郎はきっと、子供みたいに凄いだろうとか思つていてるに違いないわつ…）

そう思つた時、腹の内が顔に特に眼に表れた。垂れていた目尻がいつもになる。嬉しさと悔しさが心中で闘い始めた。とりあえずは、きっと威圧をかけつつ睨む。

「美味しい、美味しいけど……すつごく悔しい… さつさと出て行

つてもうれる！？

いきなり金切り声を発し出した紗弥菜に、笑顔から真顔に瞬時に戻つた侑治郎はたじろいだ。

「あ、ああ……分かつた」

癪癩を起こした原因など分かるはずも無く、このままいつまでも居座つていては何をされるか分からぬ為、すっと腰を上げると玄関へ急いだ。

ドアを開けて右半身だけ外に踏み出し、首だけ振り返つて紗弥菜の様子を窺う。依然として侑治郎が座つていた真正面を、睨んだまま微動だにしない。

「お、お邪魔しました」

何とも言えない恐怖感が胸と脳を圧する。残りの左半身も素早く戸外に出し、ドアを優しく閉めて、首をかしげながら自身の部屋に戻つていった。

残された紗弥菜は、切歎してひたすら小さなうめきを挙げていた。（悔しい。）うなつたら、色々な料理を完璧に作れるようになつて、侑治郎のことをあつと言わせてやるんだからー（）

紗弥菜の中で治まつていた勝気で強気な性格が、再び如実に現れ出した瞬間だつた。

翌朝。午前8時。

「でつくん、お前は完全に包囲されている。大人しく出て来い！」  
爽奈がいつも如く、なかなか起きない侑治郎の部屋の前で、飽きずに呼びかけていた。

だが、今日は何度も呼びかけても返事がなかつた。爽奈の眼に悪さを企んだ時特有の光が<sup>は</sup>奔る。

「よーし、今日も必殺”ダイブトゥーベッド”が繰り出されるようだ

「そーちゃん、好きだよねー。その技」  
真優が小さくあくびをしながら言つた。

「なんせ、私の十八番だからね！　じゃ、行くよ……ありや？」

「まゆつちや、紗弥菜はいざこへ行つた」

「さあ……でも、侑わんの部屋のドアが開いてて、中に入つてゐたいだよ」

爽奈が田を見開き、頓狂な声で叫ぶ。

「はあ！？　紗弥菜つて侑治郎のこと嫌いじやなかつたつけ？」

「そつ見えるかもしれないけど、小説のキャラ設定の為にああいつ態度を取つてだつたんだつて」

ふわあ～と氣の抜けた声を発し、真優は再び眠そうなあぐびをする。

「へえー、全つ然知らなかつた。小説を書くのも難儀なもんだねえ爽奈はどうでもいいと感じで応じた。

「武士が突然の奇襲に驚いた時に叫つ言葉は？」

「すわつ！ 敵襲ぞ！」

紗弥菜の問いに体で反応した侑治郎。顔まで作つていたが、夢だと知ると寝惚け面になつてしまつた。

紗弥菜はカーテンを開け放つ。

「おはよう、良い朝ね」

「全くだ……つて、お前何やつてんだ！？」

侑治郎は、思わず枕を盾に身構えてしまふ。

すると、紗弥菜は心苦しそうに謝罪をする。

「昨日はごめんなさい。自分で言つのも恥ずかしいぐらいなんだけど、私は相手が得意そうに作つてしたり、昨日の場合は食べて凄く美味しいと、勝手に対抗意識を燃やしちゃう時があるので。それで半ば我を忘れてあんなことを……」

侑治郎は、寝癖のような頭をぼりぼりと搔く。

「そうなのか。まあ、仕方ないんじゃないか。あん時は驚きはしたけど、怒っちゃいないよ。そうかー、料理かー……ま、紗弥菜の料理がどんなもんか見てみたいし、頑張つてな」

「うん、ありがとう」

紗弥菜は、しとやかに笑つた。だが、まだ心苦しそうである。

侑治郎が、おもて面おもてをやや渋面しつつしつくじにしてばかりに言ひ。

「うーん……。なんからしくないと言つたが、違和感があるなあ。今

田からはりのままの態度で話してくれよ。俺はその方がいい」

紗弥菜がはつとしょうに、笑顔を壊して顔を怒らせた。

「つむせーー 調子に乗るんじゃないわよ。絶対、料理を作れるようになつて、『わやふん』と言わせてやるんだから。覚悟しておきなさいよー」

「爽奈と回りかよー……まあ、いいか。これからもお手柔らかに宜しくな

「ふん！」

腕を組んでそっぽを向く。

侑治郎は苦笑しながら、ようやく紗弥菜を気の置けない人物として見る事できると、内心喜んだ。

定期考査が一応無事に終了し、息をつく暇もなく1ヶ月間の長期に亘る本実習に突入した。

昨年も10月と2月に2週間ずつ行われたのだが、分散していることもあって最初の2週間は、見学実習（保育士としての1日の基本的な流れをつかむ為に、担当の保育士の補助を行うこと）と設定保育（粘土や折り紙などの製作、鬼ごっこやかくれんぼなどの遊びのみを行うこと）を中心に行つた。残りの2週間はそれに部分実習（おやつの時間やお昼の時間などを部分的に行うこと）を加えて見学実習を廃し、来年の本実習に備えた。

初日は形だけのオリエンテーション。本来であれば、実習担当の保育士が2日目以降の実習の流れを懇切丁寧に説明、質疑応答するのであるが。

しかし、侑治郎を除く4人は説明を聞くだけに終わつた。既に去年からボランティアに週に複数回も来ているから、園内のことを探々まで熟知していたからだ。

侑治郎は侑治郎で、1年弱のブランクと約3ヶ月ボランティアだけでは不安なのか、担当の保育士相手に質疑応答を繰り返していたが。

翌日。実習2日目ともあって、早速5人は現場で働くことになつた。最後の1週間を除き、いくらボランティアを何度もこなしている者であつても、保育士が補助に当たつてくれた。最初の週は3人、次週からは2人、3週目と最終週は1人と、1人ずつ減らしていく方針である。

ブランク長かつたのとことから侑治郎は、当分の間は4歳児クラスを担当することになつていた。因みに、他の4人は日替わりで4歳児クラス以外を担当した。

「ねーねー、ゆうじるーせんせー。なんでせんせーのエプロンは、

キリンさんがいるの？」

男子園児達の執拗な猛攻を軽々と受け流していると、腰下から無邪気且つ可愛い声で女子園児に質問された。

「お、よく訊いてくれたね。これは……」

「タマつぶしおークル　　つ！」

1人の園児が小さな手を握つて作った拳を、よりもよつて男の泣き所に突き入れた。

実習に入る数日前のある日のこと。真優の部屋にいつも4人が集まっていた。

保育園に実習となればエプロンが必要である。そこで裁縫の一番得意な真優が、昨年に引き続き一手に引き受け、みんなの分を作製していた。

「俺のエプロンってこの麒麟……？」

最初に受け取った侑治郎の眼が点になっていた。

黄色い生地の真ん中に、少し大きめの白布が縫い付けられてあり、そこにでかでかと”ゆうじゆう”と黒字で書かれていた。その名札を取り囲むように、アニメ風の可愛い麒麟のアッププリケが複数貼られていた。

「だつて侑さん、背が高いんだもん。イメージがそれしか思いつかなくつて」

真優は、口では申し訳なさそうに言つてるものの、楽しそうな聲音だった。

この確信犯的な犯行に、侑治郎は頬んだ手前もあつてか、文句一つ言わずに黙したままエプロンを両手に持つて、じいっと見続けるしかなかつた。

「はい、これはなるちゃんの」

成佳にエプロンを渡す。そのエプロンは茶色い生地の真ん中に、侑治郎と同じく少し大きめの白布が縫い付けられ、大きな字で”なるか”と黒字で書かれてあつた。名札を囲むようにして、これまた

アニメ風の可愛いカンガルーのアップリケが複数貼られてあった。

成佳は嬉しさのあまりに真優を抱擁する。

「わあ～可愛いわねえ。真優ちゃん、ありがとう。わざわざ新調までしてもらつて」

「ううん、丁度新しいのにしようと思つてたの。ほら、意外に傷んだり汚れたりしてた所があつたしね」

言い終わつた所で真優は、抱擁から解放された。

成佳は、氣に入ったのかすっかりエプロンに熱視線を送つては、「さやつちゃんはこれだよ」

ねずみ色と白の水玉模様の生地にやはり中央には白布が縫われてあり、大きな黒字で”さやな”と記されてあつた。名札を囲むように、アニメ風の可愛い子猫のアップリケが何枚も貼られてある。

「い、これ……なの？」

紗弥菜は驚きを隠せないでいる。

真優は笑顔で頷く。

「うん。すつごく可愛いでしょ～？」

「いーなー。私も子猫にすれば良かつたなー」

順番待ちをしていた爽奈が、羨望の眼差しで紗弥菜が持つてているエプロンを見ている。

「あ、そーちゃんはこれだよ」

薄い水色を生地にしていて、ど真ん中に白布が縫い付けられる。それに大きく黒字で”そうな”と書かれてあり、かなり目立つ。名札の周りには、アニメ風の可愛いおこじょのアップリケが幾多も貼られている。

「わあ、まゆつちありがとうつー、イメージどおりだよ。滅茶苦茶可愛いしー。」

爽奈がエプロンを手に取ると、子供のように跳びはねて喜び始めた。

欣喜雀躍をしている爽奈を微笑ましく見ると、ちょっと間固まつていた紗弥菜が、憂い混じりに再び口を開く。

「こんなに可愛いのを着て大丈夫かしら……」

そんな紗弥菜を真優は優しく勇気付ける。

「大丈夫、大丈夫。かえつて親しみやすいと思つし、園児達も喜ぶよ」

「……そうね。考えすぎよね」

紗弥菜の顔に明るさが戻る。

「私や子供達から見たらさやつちゃんは、大人っぽ過ぎるんだよね。ある程度、幼さを残してもいいんじゃないかなって思うし」

すると紗弥奈は侑治郎を一瞥し、少し哀れに思いながら「でも」と言いかける。

「侑治郎のエプロンは、もう少し大人っぽくても良かつたんじゃない？」せめて麒麟の頭数を減らすとか

真優は笑顔を見せつつ首を横に数回振り、断言する。

「そんなことないよ。大人気間違いなしだよつ

「だといいんだけどね……」

どうにも爽奈ほどではないが、真優には子供っぽく少し融通の利かないことがある。特に、自分が作った物に対する愛着は強いものがあり、侑治郎を除く3人が呆れることがあるほどだ。

（まあ、人の心配より私自身の心配だけね……）

真優の作ったエプロンは可愛くて、生地もしつかりしているから丈夫で長持ちする。これはありがたいことなのだが、やつぱり紗弥菜には子猫満載のエプロンは恥ずかしかった。例え実習がいつもの4人と一緒だとしてもだ。それに、爽奈とのやりとり以外では比較的大人っぽく振舞つているつもりである。

その場で瞑目し、腕組みをしていた紗弥菜の脳に閃光が奔った。（もしかしてこれはきっと、園児に対してもつとフランクに行けつて真優なりの意思表示を含んでいるのかしら？　だとしたら、この子猫だけというのも納得だわ）

突如として両目をつむり、黙りこくれた紗弥菜の目の前で手を振つて起こそうとする真優。

「どうしたのやっちゃん？ 眠くなつたんだつたら、ベッドを使つてもいいよ」

真優の声に反応し、ゆっくり両目を開けて微笑む。

「真優、このエプロンを作つてくれてありがとう。やつと分かつたわ」

「ん？ 何のことか分からぬけど、気に入つてもらえたみたいだね」

「うんひ。今回は、もつと園児達と仲良く遊べるように頑張るわ」  
そう言い放つや、紗弥菜は成佳の方に向かつていた。

その場に残された真優は、安堵の息を吐ぐ。その息は10分前、思案の海に潜つてしまつた侑治郎の存在を、忘れているかのようだつた。

「いつ……」

「いくら幼児のパンチと言えども勢いをつけて、一点集中すればそりや痛い。あまりの激痛に、苦悶の表情でその場にうずくまる。  
「はつはつはー、怪人・ハラスメンの恐ろしさを思い知つたか  
つ！」

男子園児が歓喜の声を挙げた。周りの男子園児達も真似して「思い知つたかー」と言いながら、飛び跳ね回つてゐる。

侑治郎は、初つ端から痛い洗礼を受けてしまつた。

その後も上手くいかないこともあつた。しかし、それもそのはずである。丸一日ボランティアなど行つたなどない。しかもボランティアと言えど、園長の私用の手伝い（草むしりや買い物）と園児達と遊ぶのみで、細かな部分は一切取り除かれていた。

だから、失敗しないはずがないのである。他の4人も例外ではなく、その都度担当の保育士を呼ぶ声が、それぞれの教室から半ば悲鳴のよみに発せられた。

それでも、去年行つた実習での設定保育と部分実習を思い出して、実践にしていった。とにかく最初の1週間は、自分が慣れることで

精一杯であり、試行錯誤のみで園児達と触れ合うと言つよりも、触れ合つてもらうと言つたほうが過言ではないだろつ。

因みに今回は本実習なので、全日程の基本が1日保育（園児の登園から帰りまでを行うこと。ただし、ここでは8時～17時を指す）であり、部分実習等の折よりも忙しさが何倍も増えた。5人に充足感はあるが、やはり精神的・肉体的疲労のほつが上回り勝ちだつた。2週目に入ると補助は2人に減つた。週の初めこそまだ試行錯誤の手探り状態が、依然として続いていた。だが、感覚をつかみつつある者も居たし、週の後半には割りと不器用な爽奈と未だにランクが響いている侑治郎を除いた3人が、自分なりのペースを会得したいつた。

3週目に入った。補助は1人になり、助けもだんだん要らなくなつてきた。爽奈も慣れ、最後に侑治郎も慣れて、ようやく園児達との触れ合いを持ちつつあつた。保育園の業務にも余力を残せるようにもなつて、それほど心配もなく全力で園児達と遊べるまでに成長した。

そして、いよいよ最終週に突入した。補助は変わらず1人付く。

しかしその補助の保育士が、

「ねえ、円城寺くん。今日は他の子達のクラスの補助をやつてみたい？」

と、こんなことを提案してみたのである。

「えつ？ でも、大丈夫なんでしょうか？ 万が一のことが起つたら……」

「大丈夫よ。私も補助の1人として見まわつてているから。何かあつたら、廊下に出て大声で叫んでくれれば、すぐに飛んでいくわよ」両腕を翼に見立てて、中年の恰幅のよくなつた体を揺らさせて見せる。

侑治郎は吹きそうになつたが、それは失礼だと意識の底に追いやられながら、苦笑を面に表す。

「分かりました。何ごとも経験ですからね。引き受けます。ところ

で仕事内容は、どのようになるのでしょうか?」

「そうねえ……午前8時に成佳ちゃんの担当の0歳児クラス。午前9時10分に真優ちゃんの担当の2歳児クラス。午前10時20分に紗弥菜ちゃん担当の5歳児クラス。午後からはずっと爽奈ちゃんについてもらつてもいいかしら? なんせ、4歳児クラスは、思わず股間を押さえそうになつたが、それを防いでやや暗い口調で割り込んだ。

「元気一杯ですかね……」

「ああ、円城寺くんは何度もやられたんだっけ。ほんつと、男の子つて不憫よねえ。決定的な弱点が外にあるんですもの。くれぐれも気をつけてね」

「まあ、対策は完成してますから、不意打ちさえ喰らわなければ丈夫そうですけどね」

あれから幾度ともなく急所にクリーンヒットを喰らわせられた。侑治郎とて馬鹿ではない。流石にオウム返しはできないが、やられつ放しでは本当に使い物にならなくなつてしまふ可能性もある。そこで攻撃パターンを頭に入れたり、園児達が觀てゐるであろう、早朝に放映している特撮物を觀て、台詞や变身シーンを覚えて抵抗した。もともと特撮物は、6章で講演してゐた元同級生で親友の納富晋之介と成富果穂がどん引きするほどの知識を持つてゐるから苦ではなかつた。無論、男子園児ばかり相手をしてゐる訳ではない。女子園児達には、その1時間後のアニメを物真似してゐた。因みに、少女漫画雑誌に掲載されてゐる人気漫画である。内容は最近流行りの”魔法もの”で、主人公が敵にとどめをさす時に言つ「ミラクルレジエンド、ファイヤーアースクラッシュ!」や「あつ、びつ、地獄にい」(10秒ほど効果音や音楽や動きが止まる)落ちちやえ」と、微妙に年齢層を絞りにくうことになつてゐる。それらを侑治郎は、園児の為にと覚えて実践する様は尊敬に値する。だが、保育園関係以外の仕事に就いてゐる人から見れば、キチガイの類にしか見えないと思われた。

「 そ う な の 。 そ れ よ り も 、 も う ち ょ う と で 8 時 に な る わ よ 。 そ ろ そ ら  
ろ 行 つ た ま う が い い ん じ ゃ な い ？ 」

腕 時 計 を 見 な が ら 保 育 士 が 言 つ た 。

「 あ 、 そ う で す ね 。 じ ゃ 、 そ ろ そ ら …… 」

脩 治 郎 は 、 ひ と ま ず 成 佳 が 担 当 し て い る 0 歳 呂 ク ラ ス へ と 向 か つ  
た 。

「失礼します……」

侑治郎が教室に入ると、幼児向けアニメを観ていた成佳が、首だけ振り向かせてにつこりと微笑んだ。

「おはようございます。侑治郎さんもこちらにいらして下さい」

広々とした部屋の真ん中に乳児用の布団が2組敷かれており、傍らにはプラスチックかごがあつて中に大小複数枚のタオルと、人数分のおしゃぶりがあらかじめ置かれていた。紙おむつも置かれており、パッケージから見るに男女兼用ものと言つ事が分かる。

侑治郎が感心したように「ほつほつ」と言いながら、部屋の真ん中を通り過ぎ、行儀良く正座している成佳の隣にあぐらを搔いた。

「えつ！？」

声を挙げて仰天する侑治郎。

それもそのはずである。成佳の膝の上には、既に2人の乳児が座つていたのだ。しかし、アニメに夢中なつていてるせいか眼以外は微動だにしていない。

「じゃあ、侑治郎さんはこっちの龍弘くんをお願いしますねえ」

「分かつた。それにしても、よく2人もだっこできてたね。派手に動き回る時期なのに」

成佳の右膝に座つていた龍弘を持ち上げて、左膝に座らせながら、感じ入つた口調で言つた。

成佳は頬を緩めながら、しみじみと言つ。

「なぜだかは分からないんですが、私が担当する赤ちゃんは、みんな大人しい子ばかりなんですよねえ。嬉しいことは嬉しいんですけど、ついて下さつた保育士の方々が日々に苦笑交じりに『これじや、実習じやないね』と、仰るぐらいで」

「へえ、何でだろうね」

保育士としては、言葉を発することもできず、1番心中が読めな

いであるう年頃の〇歳児の扱いが、如何に難しいか分かつてもらおうとしたのだろう。しかし、成佳がだっこすると途端に、借りて来た猫のよう大人しくなってしまうのだから、どうしようもない。もう一度保育士がだっこすると、たちまち泣き出したり、腕の内で暴れまわつたりと、とにかく成佳から離されることが不愉快らしい。いくら保育士があやしても、不機嫌なままであった。

「さあ、分かりません。でも、私がまだだっこすると大人しくなつたり、機嫌良く笑つたりするんです。それをその日の担当の方が、"聖母現象"と呼んだんですよ」

”聖母現象”別に、特殊能力でも何でもないのだろうが、成佳には子供の心を穏やかにする天性があるらしい。と言つよりもそういうことでもしておかなければ、保育士がこれまでやつてきた自分の保育士としての能力を、疑いたくなるものである。

”聖母現象”ねえ……確かに合ひてるかもな。成佳は優しい性格だし、全くと言つてもいいほど怒らないしな。あと……」

そのまま流暢に結構肉付きの良い体をしてるからな、と言つ言葉を言おうとしたが、慌てて喉奥に押し込めた。流石にこれはセクハラつてレベルじゃね、ぞ！ と、思つたからである。

「あと……なんですか？」

当然、成佳は小首を傾げて訊き返してくる。

侑治郎は胸のうちに罪悪感が湧いてきて堪らず眼を離し、引きしきれんばかりに首を横に振る。

「何でもない！ 何でもないつたら、何でもない！」

性に目覚めた小学校高学年ないし、中学生の野郎みたいな妄想が露見したら、まともに目を合わせられない。拳銃きょこうを失う一歩手前までに心中が追い詰められた。

と、成佳が何かを思い出したのか手をぽんと打つた。

「あ、いけないいけない。侑治郎さん、この体温計で龍弘くんの体温を測つて下さい。私は凪沙ちゃんのを測りますので」

一瞬、ばれたかと思つたが、どうやら杞憂に終わつたらしい。ほ

つとしつつ手渡された体温計のスイッチを入れて、龍弘の服の上部のボタンを2つ外し、そこから手を入れて脇の下に体温計を挿し入れた。その上で動かないように引き寄せるが、両手と頭をしきりに動かすものだから、何度も体温計が脇の下から落ちてしまった。

見かねた成佳がアドバイスを送る。

「体温計を挿し入れた腕を、ぎゅっと掘まえておいた方がいいですよ」

「うん、そうだな。にしても、成佳の方の凪沙ちゃんは動かないな。テレビに熱中してるせいもあるのか。それともこれが”聖母現象”なのか」

成佳が苦笑いを浮かべる。

「さあ、どうなんでしょうねえ」

ぴぴぴぴ、と体温を測り終えたことを報せる電子音が鳴った。  
「36度2分、と。うん、凪沙ちゃんは今日も平熱だねえ。じつとしていくくれてありがとうね」

頭を優しく撫でつつノートに書き込むと、凪沙を優しく膝の上から下ろした。

「ん？ どうしたんだ？」

成佳は、面映そうに両目を伏せる。

「侑治郎さん、ごめんなさい。少しお手洗いに行つてきてもいいでしょうか？」

「ああ、いいよ。龍弘がばたついているけど、凪沙ちゃんはテレビに夢中だし、少しの時間なら俺でも大丈夫だろ」

「ありがとうございます。すぐに帰りますので」

成佳が立ち上がり、そそくさと教室から出て行った。

眼で見送った侑治郎が、意識を膝の上にちょこんと座っている龍弘に移す。途端に、生暖かい感触が膝上に伝わってきた。

「龍弘……お前、もしかして」

とりあえず、その場に仰向けに寝かせて服のボタンを取り、紙おむつを広げてみた。すると、如何ともしがたい臭気とともに、大の

ほの便が現れた。

侑治郎はうんざりとした表情を隠す」ともなく、「まあ……」と溜息をついた。

「やつぱりか……」

いつまでもくことでいても仕方ない、そつ思いながら立ち上がり、紙おむつとウエットティッシュと『おむつ用』と書かれたゴミ袋を持ってきた。

そして、便の形状を再度見直す。と、なぜか侑治郎の顔が明るくなつた。

「でも、1本か。これなら始末が簡単だな。にしても、可愛い顔して豪快な物を出すんだな。きっと将来は大物になるぞ」

侑治郎の言葉を理解してゐるのか、龍弘は「ややつきや」と機嫌良く笑いながら、短い手足を動かした。

「うひうひ、そんなに動くなよ。じつとしてればすぐには終わるからな」

薄く透明なビニールの手袋をはめて、紙おむつを便を包むようにして丸め、「ゴミ袋に捨てる。次に、ウエットティッシュを取つて、尻穴周りの残り便を性器につかないように、前から後ろにさつと拭き取つた。最後に、替えのおむつを尻に敷き、隙間ができるないように多少きつめにして、マジックテープで固定した。

「ふう、あとは……」

ウエットティッシュを捨て、手袋を手を汚さずに取つて捨てた。暴れる龍弘を言葉でなだめながら服を着せると、とうやく終つたのである。

「やつと終わった。つ。どうだ？ 気分良いだろ」

龍弘を座らせつゝ、試しに問つてみた。

龍弘は、両手をぱたぱたと動かしながら、「ややはは」と笑つて答えた。

「やつかそつか。なら、良かつた。こちとら数年振りだつたからなあ。我ながら上手くいつたもんだ」

体中がほぐれるような安堵感を感じ取つていると、凧沙がハイハイをして近付き、両手を侑治郎の膝の上に置くと、穢れのない瞳で両手をじいっと射るよう見始めた。

「お、どうしたのかなー？ 龍弘ばっかり構つて寂しくなつちやたのかな？」

侑治郎が猫なで声で訊いてみるが、凧沙は黙つて凝視を続けている。

困惑した侑治郎は、近くにあつたパンが擬人化したような仮面を引っ掴み、顔に装着した。

「やあ、僕マジパンマン！ すっごく甘い顔だから、アリさんが体を登つてきて大変なんだ！ まあ、ポケットにはマーズ社が作った『アリさん根絶』が入つてるから、大丈夫なんだけどね！」

つり覚えの声音でご機嫌を取つてみた。すると、凧沙の瞳に涙が溜まり始めたではないか。両目がぎゅっと閉じられ、代わりに口が大きく開けられた瞬間、侑治郎は何かに感付いて仮面を取り去り凧沙を持ち上げ、でん部辺りをかいでみた。

「……凧沙さん、あんたもですかい……」

侑治郎が「はあ～あ……」と溜息を吐いていると、出入り口が開かれた。

「侑治郎さん、ごめんなさい！ 遅くなつてしまつて……」

珍しく、いつもほのんびりと構えている成佳が取り乱し気味だつた。

「ああ、何の何の。龍弘がたれた以外は、何もなかつたから」「そうですか。でも、何で凧沙ちゃんを持ち上げているんですか？ 今にもぐずりそですし」

侑治郎は「あつ」と氣づいて声を出して苦く笑う。

「ごめん、前言撤回。凧沙ちゃんもやつちやつたみたいなんだ……成佳の顔にいつもの表情が戻つてくる。

「じゃ、凧沙ちゃんの方は私が取り替えますねえ」「お言葉に甘えます」

深く頭を下げつつ、まるで朝貢を献上せんばかりに、涙田の凪沙を成佳に手渡した。

成佳は布団の上に新聞紙を敷き、その上に凪沙を寝かせると、手際も素晴らしいと言つ間におむつを交換してしまった。

侑治郎は、目の前に起こつた早業を、間抜けのように口を開けたまま見ているだけであった。

「す、凄い……早いだけじゃなくて技術も兼ね備えているとは。流石は成佳」

「ふふ、それほどでもありませんよ。前に話したかもしませんが、きょうだいが居ない代わりに、いとこが沢山居ましたからね。よくお守りをしてましたから、おむつ交換なんて慣れっこです。それに凪沙ちゃんは、ちゃんとした固形のうんちでしたし。これが液状のうんちだつたら、後始末が凄く大変なんですよ」

話しながらも穏やかな表情を全く崩さず、服のボタンを留めてい る。

その姿に侑治郎は、子供に対する成佳の対応に強く尊敬の念を抱くのだった。

1時間ほど経った後、次に侑治郎は2歳児クラスに入室した。5人と人数は少ないが、少しながらも喋れるようになる時期だけあって、悲鳴に似た叫び声や、訳の分からぬ言葉を大声で言い放つていたりする園児が居た。

と、1人の園児が侑治郎の存在に気づいた。足にしがみつくや、凄まじく高いテンションそのままに揺らし出した。

「せんせー、ぼくねー、ピー・ポーを見たんだよー」

「ピー・ポー？……あ、救急車ね。へえー、何処で見たの？」

侑治郎がしゃがんで園児の視点に眼を合わせつつ、優しく微笑む。

「うーんとねー、えーととねー。『レスキュー・レンジャー』だよー」園児の言つた単語で、何を言わんとしたか理解した侑治郎は、得意気に返す。

「あー、『レスキュー・レンジャー』ね。先生も觀てるよ。レッドが消防車で、ホワイトがピー・ポーだよね」

「そーだよー。でも、ホワイトのほうが強いもんつ」

嬉々として断言した男子園児の近くに女子園児がやつてきた。

「ちがうよ。モノクロのほうが強いよー」

だが、違う男子園児が不服そうな顔で異議を唱える。

「えー、カムフラージュが1番だよー」

意見をぶつけ合う園児達を、微笑ましそうに静観する侑治郎。そこに、白い布が敷かれた長机に隠れるようして何ごとかの準備を進めていた真優が、ひょこっと顔を出した。

「侑さーん、ちょっと来てー」

足に引っ付いていた男子園児を優しく離し、2人の輪に改めて加えてやると、長机の後方に周つた。そこには真優が台本を何度も小声で読み返しながら、自作の人形を動かしていた。

ずり落ちそうな眼鏡を慌てて直しつつ、侑治郎ににこっと笑いか

ける。

「本当、ちょうど良かつたよ。今日は特別篇で登場人物が3体から倍の6体に増えるから、声の種類が限界で……。なるちゃんなら楽勝なんだけど、私は素人だしね」

「と言つことは、俺は人形劇のお手伝いと」

「うん、侑さんは他のことをして遊びたいだろうけど、人形劇が終わつたら、ということでひとつ」

真優はぱん、と手を合わせて懇願した。

「いや、俺は全然かまわないよ。むしろ良い経験になるしな。で、俺の役は何なんだ?」「

「新潟県の絶滅危惧種として有名だったトキのトキ麻呂と猿のモンの助と直江兼続」

侑治郎の顔色が瞬く間に変わる。

「な、直江だと!?」

みんなの一般的な公家の印象は、太つていてお歯黒で変な所に書かれた眉だと思う。それを2頭身にして某国体風にアニメ調にしたトキの目とくちばしを拝借したようなもの。つまり、後ろから見れば単衣と鳥帽子を被つた公家にしか見えないが、正面から見れば何処かで見たようなアニメ調のトキが、公家の格好しているのだ。それがトキ麻呂の正体である。

猿は茶色の短パンに、ど真ん中に茶色の字で『I am MONKEY』と書かれた白地の半袖を着ており、つばのついた帽子これもまた『I am MONKEY』と書かれているを被つている。両目が小豆のように小さく、どことなく愛嬌がある。こちらも可愛くアニメ風に仕上がっていた。最後の直江兼続だが……。

「真優。お前さ、これはまずいんじゃない? 絶対、滋賀県からクレームが来るぞ」

「商品化されるはずもないから、大丈夫だよ。個人で楽しむ分だし、某小型哺乳類みたいに訴えられないだろうし」

「ずいぶんと強気だな……。まあ、いいけど。で、名前は何て言つんだ？」

「そうだねえ、色々と候補はあつたんだけど、最終的に『愛にやん』になつたよ」

今や全国的に人氣者（猫）となり、『ゆるキャラ』ブームの火付け役となつた『ひにゃん』にあやかつたのだろう。兜の「愛」文字以外はまんま『ひにゃん』だつた。

「あ、『愛にやん』……！」

純粋な歴史好きの侑治郎は、腹をえぐられるような衝撃を受けて、絶句した。彼は『ひにゃん』でさえ、そりやないわ、と思つていたからだ。

「実は、他にも伊達政宗から取つた『伊達にゃん』とか、加藤清正から取つた『かとトラ』とか、斎藤道三から取つた『ビースンまむし』とか一杯あるんだよ」

人形を入れてあつた大きなかばんから、パクリに近いものやら独創性の高い人形が続々と出てきた。

唚然としながらもキャラクターに光るものがあつたらしく、侑治郎は手にとつてみた。

「『伊達にゃん』はそのまんまだけど、『かとトラ』はいいな。男の子には人気出そうな凛々しい面構えをしてるし。『ビースンまむし』は、まんま某アのつくモンスターに見えてならないんだが……。ま、別に商品化しないから、いいのか」

「そういうこと。おつと、早く始めようよ。他の遊びをする時間がなくなつちゃうよ」

「分かつた、分かつた」

最初の場面に登場する人形が長机の上に配置され、真優は園児達を集めようと立ち上がりて呼びかける。

「みんなー、お人形さん達のお話を始めるよー」

すると、今まで各自騒いでいた園児達が、欣喜雀躍しながら長机の前に集まってきた。

「わあー、クマえもんだあー」

「せんせー、早くー」

園児達のお氣に入りのキャラクターを呼ぶ声と、急かす声が交互に混じる。

そんな園児達の様子に、真優は満面に喜びをほほえりせて、鷹おう揚に頷く。

「うん、分かったよー。今日はね、新しいお友達も出でてくるから、ちゃんと観てるんだよー。分かったー？」

「はーいー！」

園児達が甲高い声とともに、腕がちぎれんばかりに拳手する。

真優がしゃがみ、ひそひそ声で言つ。

「それじゃ、侑さん。始めるね。台本を見て出るタイミングをしつかり守つてよ」

「おう、任せる」

真優は膝立ちとなつて、熊の人形を動かし出した。

「あれれ、おかしいなあー。ここに、はちみつのつぼを置いてたはずなんだけど」

膝近くに置いてあつた柴犬の人形を、長机の上に登場させる。

「おや、どうしたのかな。クマえもん。何か困つたことでもあつたのかね？」

クマえもんをポチ太郎の方に、鋭く振り向かせる。

「あ、ポチ太郎じーさん。おはようございます。ちよつと良かつた。僕のはちみつのつぼを知りませんか？」

「はで、知らないのう。わしは今來たばかりだからな」

更にここで三毛猫の人形を投入する。

「あらあら、2人とも何をしているの？」

先ほどのポチ太郎の登場と同様に、はつとしたよつにクマえもんを、みけこの方に振り向かせる。

「あ、みけこさん。おはようございます。僕のはちみつがなくなつ

たんですよ。一緒に探してくれませんか？

「ふん、冗談じゃないわ。あたくしの『主人様』を『存知』よね？ お菓子工場の社長なのよ。そんなくだらないことなんか、したくないわ」

「そ、そんなあ……」

クマえもんを落ち込んだように見せる為に、突っ伏す。

「おや、そんなことを言つてもいいのかのう。君の『主人様』を雪崩から助けたのは、このわしじやぞ。その命の恩人の友達のお願いを断ると言つのかね。猫は犬より優しくない生き物とは、よく言つたものだ」

「むむう……分かつたわよ！ あたくしも探せばいいのでしょうか？」

「ほら、いつまで寝ていらつしやるの？ 早く起きた起きた！」  
みけこを勢いよくクマえもんの傍まで寄せ、前足で胴体を蹴つ飛ばさせた。

「あぎやーっす！ いたたた……みけこさん、いきなり何をするんですか。痛いですよ……」

みけこを持ち上げ、クマえもんの背中に乗せて突っ伏させる。

「お黙り！ 早く探すのよ！」

「は、はい……」

（何と言つ台本だ……）

侑治郎は、改めて読み返した台本に溜息が出る思いだった。

（いくら子供向けと言つても、ストーリーが最初から破綻してちやんちやんないんじやなか。まあ、まさかこれを紗弥菜が書いたわけじゃないよな……。そうだとしたら）

疑念が尽きない侑治郎の隣に、真剣な表情で演じている真優が居る。その真優の両足が、ぱたぱたと床を鳴らし始めた。

「これは俺の出番がきたつてことか？」

声をひそめて問つと、両足の動きを一旦止めてから、片足ずつ振り下ろした。

「『そつ』か……」

腹をくくる。台本の出来はどりであれ本人は慣れない作業に、おそらく惱乱しそうになりながらも書き上げたのだろう。その頑張りを無下にはできない。

（よし、やつてやつひじやないか）

氣合が入る侑治郎。決意を示すように人形を3体長机の上に登場させた。

「くけーつひつ。お主らそこまででおじやる」

真優が3体を次々に振り向かせる。次いで、ボチ太郎の首を軽くかしげる。

「お前ら誰じやつ？」

「よくぞ訊いてくれた。わしは、トキのトキ麻呂でおじやる。で、隣が」

「ウキウキウシキーー。//せーほンザルのモンの助だいわねー。その隣が」

「それがしは、愛と正義を大事にする愛にやんと申す」

侑治郎がトキ麻呂をすりつと前に出す。

「われら3人揃つて……」

真優がみけこの前足の右を指のよじにして、つぼを指す。

「ちょっと待ちなさいー。真ん中の猿が持つてゐつまはむーー。」

「ウキ？ これは……//のでいざるーー。」

「嘘よ！ つぼにクマえもんつて名前が書いてあるものー。」

真優が、クマえもんの動作を緩慢から俊敏なものに変える。

「あつー！ それ、僕のだよー。何で君達が持つてゐの？ 返してよー！」

「やうよ、返しなさいよー。」

「やうじや、返せー。嘘つきは既に泥棒になつてゐるは本當のことだの」

侑治郎がトキ麻呂を高々と上げて、急激に落下させ、長机をびざ、

とおちつけた。

「くけーー、日々に煩いでおじやるー。モンの助は、そんなことをする猿ではおじやりんー。の、モンの助」

「ウキキ、そ、やつで、うる。//ーほじお利口な猿が、はちみつなぞ盗むはずが……まつーー！」

「モンの助……お主は本当に嘘をつこておらぬか？」

「キキッ……、そ、それはその……」

侑治郎がモンの助に愛にやんをぶつかるように、近づけていく。「それがしは、嘘は嫌いだ。本当にことを申さねば、お主の首をはねてやるつだ」

「ウキ……キ……、も、申し訳ない！ //ーがクマえもんのはちみつを盗りました！」

侑治郎がモンの助の首を前に倒す。

「いいえ、許さないわ！ 嘘は絶対につこちやいけない。それに、人の物を盗ることもよ。2つの悪いことをした悪人なんか、信じられるわけがないじゃない。ねえ、みんなもそう思うでしょ？？」

真優がみけこの顔を園児達に見えるように、正面に向ける。

「そうだ、そうだー！」

「モンの助なんて、きらーー！」

園児達の率直な非難の声が教室中を包んだ。

「ウキッキッキ……そ、そなんあ……」

「まあ、待つんじや。わしもさつあは、とてもじこさんとも思えなことを言つてしまつた。それから、反省して冷静に考えてみたんじゃが、モンの助のしたことは確かに悪い。しかし嘘をついたのは、自分の身を守るつとしたから、つい、出でてしまったのだろう。嘘も悪い。だがのう、つい出でてしまったことをあれこれ責めるのは、可哀想と言つもの。みんなもそう思わんか？」

真優がポチ太郎をみけこのように、正面に向ける。

「ポチ太郎、むずかしいよー」

「わかんなーい」

園児達は渋面を作る。ちんぶんかんぶんでさつぱつ分からぬ様子だ。

「やうじやな……。例えば、みんなのお父さんやお母さんが大事にしている物を壊したとしよう。当然大事な物だから、怒るだらう。みんななら、どうする？ 正直に言つへ、嘘をつへへ。

少し考えた後、1人の児童が快活に言つへ。

「嘘をつくー」

「それは何でじや？」

「だつてパパとママ、こわいもん」

「それじや。君はモンの助と同じことをしよう。モンの助を悪くは言えないぞ」

すると、周りの児童達が発言した児童を責め出した。

「いーけないんだ、いけないんだ」

「だめだよー、ちゃんといわなきや」

「おつほん。君達もその子と同じことを言おつとしたんじやないのかな？」

教室が一気に静まり返つた。どうせやう、図星だつたらしく。

「君達も嘘をつかないようにするんじやぞ。それに、人の物も盗つちや駄目なんじやぞ。パパやママやお友達にも嫌われちゃうからう。分かった人ー？」

「はーい！」

児童達は、元気一杯に腕を振り上げる。

「それじや、モンの助のことも許してくれるかなー？」

「うんつ。ゆるしてあげるー！」

「モンの助、ごめんねー」

侑治郎がモンの助を正面に向けむ。

「キキキー、みんなありがとつ。ハーメ反省するドーボルぬむ

「それから、クマえもんの方に向き直り、

「キキツ、クマえもん、悪かつたでじやる。どうかこの通り

「頭を上げてよモンの助。僕はもう怒つてなんかいなによ。みんな

仲良くしていこう」「う

「キッキ……かたじけない」

「つむ。クマえもんも許したことで一件落着じやな」

真優が立ち上がりおもむろに宣言する。

「はーい、今日はこれで終了です。明日も楽しみにしてねー」

「はーい！」

「今日はね、お手伝いをしてくれたお兄さんが居るんだよー」

真優に促されて立ち上がる侑治郎。

「みんな、ちゃんと聞いてくれてありがとう。お兄さん、嬉しかったよ」

「みんな、拍手ー」

拍手が園児達から起る。侑治郎は笑みを浮かべて、それに応えた。

その後他の遊びも行つたのだが、人形劇が長過ぎたせいであろう遊びが出来なかつたと言つ。

紗弥菜の担当するクラスは体育館に向かった と、侑治郎が伝えられたのは、空になつた教室をうろついてた時だつた。

早速体育館に行つてみると、ひと際身長が飛び抜けて高いジャージ姿の女子が、何やら子供達を集めて話していた。右腕にはサッカーボール大の柔らかめなボールを抱えており、どうやらボール遊びをするらしい。

（それにしても、よく静かに話を聞いてるなあ。どんな教え方をしたのやら）

子供達の目線はまっすぐに、話をしている紗弥菜に一点集中していた。騒いでいたり雑談している子供が居てもいいはずなのだが、誰一人として居なかつた。ともすれば、最近の大学生より聞くと言う態度が成つてゐる。

敬服の念を抱き唸つてると、紗弥菜が侑治郎の存在に初めて気づいた。

「……以上で説明は終わりです。質問がある人は居るかなー？」

普段からは想像できない猫をなでるような声で、園児達に質問した。

「ないでーす！」

「早くやろうよー！ 時間がもつたいないよー！」

園児達は早く遊びたくてうづうづしているようだ。

「はーい、分かつたよ。でもね。その前にもう1人先生が来ているから、その先生と一緒に遊ぼうか」

「わあっ、だれだれー？」

どんな先生が来るのかと、辺りを見渡そうとする園児達だつたが、紗弥菜が優しく制する。

「お楽しみが減っちゃうから、先生の方を向いていよー」

言つや、空いていた方の長い手が真上に伸びた。

これが合図だと確信した侑治郎は、素早く紗弥菜の隣に移動する。園児達が、歓喜と驚きが混じった声を挙げる。

「わあー、ゆづじろう先生だー」

「大きいなー、まるでセイスモサウルスみたいー！」

「はーい、みんな静かに。お口にチャックだよ。知っている人が居るかもしねないけど、ゆづじろう先生です」

侑治郎に紗弥菜の手が差し向けられる。暗に自己紹介をしろ、ということらしい。

「今日は1時間だけみんなと遊ぶことになりました。楽しく遊ぼうね

「ゆづじろう先生、よろしくね！」

「絶対、負けないからね！」

やる気に満ち溢れた園児達の言葉を聞いていたら、侑治郎にもやる気が漲ってきた。

「おーう、先生も負けないぞー！……って、紗弥菜先生、何をするんですか？」

「見れば分かるでしょ。ドッヂボールをするんですよ」

紗弥菜は表情こそ朗らかそのままに、やや棘のある語調で言った。敏感に不愉快だと感じ取った侑治郎は、心中でしまった、と言いつつ「ああ」と大きく頷いた。

「それじゃ、さつき決めたチームに別れてくださいねー。侑治郎先生は、左のコートに」

園児達がそれぞれのコートに散っていく。なお、内外野制度はなくてみんな内野である。

「分かりました。ところで紗弥菜先生、眼鏡はどうするんです？」

まだ遠慮がちに訊いてくる侑治郎に、真顔に戻った紗弥菜は、ふうっと息を小さく吐いた。

「今まで他人行儀にしてんの、外さないわよ。まさか顔面を狙う子なんて居る訳ないし、居たとしたら……」

凄みのある笑みを満面に表す。

「……姉さん、怖いっす」

その笑みに侑治郎の背筋は、真夏であるのにも関わらず、気温が一桁で外にほっぽり出された時のよう、「にわかに寒くなつた。

かくしてドッヂボールが始まった。分身魔球や火の玉ボールや力一発などの現実離れしたものではなく、「ごく普通の地味なものである。しかも保育園児同士の試合であるから、力の度合も成人の男女には弱いものであり、ボールが飛んできたらそのまま捕つてしまいそうになる。そこで捕つてしまつては、園児達は面白くない。なので侑治郎と紗弥菜は、ある程度当たるようにしていた。わざとらしく当たるのもそれはそれでいいのだが、中には疑つてかかる聰い園児も居るから、あれこれ言われたら対応が面倒臭くなる。だから、それとなく意識されないようにしているのだ。

ドッヂボールも5試合目を開始され、まさかこのままぶつ通しでやるのかと、侑治郎は壁掛け時計を眼張る。がんばまさにその通りらしく、11時20分を過ぎようとしていた。

（もう、1時間経とうとしているのか……）

侑治郎は、常に運動しているから大丈夫だ。しかし、紗弥菜はどうやらかと言つとインドア派であり、日頃あまり運動をしない。体力はどうに限界突破しているであろう、「流石に息は切らしているがまだまだ機敏に動いている。

（あいつ、午後からまともに動けんのかな……）

などと、考へにふけつていると、腹に柔らかいものが当たつた。

「やりいー！ ゆうじろう先生を倒したぞ！」

「へ？」

向かいのコートで飛び跳ねて喜んでいる男子園児に、何が起きたのか分からぬかい侑治郎。

紗弥菜が痺れを切らしたように教えてやる。

「侑治郎先生、当たつたんですよ。早く外野に行かないと、今度は顔に当たっちゃいますよ」

聞いていた園児達がどつと沸く。

「あ、ごめん、ごめん」

そんなに慌てていなが、侑治郎はノリに合わせることにした。慌てたように内野のコートを去り、外野のコートに入る。そんな滑稽な様子に園児達は、爆笑し続けた。

10分も経つと最後までしぶとく生き残った園児が、とうとう倒れて5試合目が終了した。

1人の女子園児が、とことこと紗弥菜の傍によつてきた。

「ねえ、さやな先生」

「んー何かな？ 羽瑠乃ちゃん」

「比呂柾くん達と話していたんだけど、さやな先生とゆうじりう先生の何だっけ……？ あ、そつそつ”ですまつち”が観たいなーつて」

無垢な声が鼓膜に心地よく響く。だが、よくよく頭の中で巻き戻して再生してみると、羽瑠乃がとんでもないことを口走つていることに気づいた。

「ねえ、そだよねー？ 比呂柾くん」

振り向きながら訊ねる羽瑠乃に、比呂柾はこくつと首を振る。

「そうだね。どっちが倒れるかやつてもらいたいな。みんなも見たいよねー？ さやな先生とゆうじりう先生のドッヂボール対決」

「私は観たいな！ さやな先生がんばって！」

「まるでティラノサウルス対トリケラトプスの戦いみたいだね！」たちまち園児達の「見たい、見たい」の声が幾重にも重なる。周りの奴には負けてられない、と各自の園児が幼児特有のきいきい声を、段々大きく発つしていくものだから、さながら合戦のような体<sup>てい</sup>を、<sup>そう</sup>相と化した。

ここまで対決を乞われては断りようもない。

侑治郎と紗弥菜は、目配せして仕方ないと言わんばかりに、頷き合つてコートに入った。

「よーし、勝負しようじやないか！ 紗弥菜……先生」

「望む所よ！ 侑治郎……先生」

やるからにはお互い本氣でやらねばなるまい。そんな思いが2人の腹を据えさせた。

ボールを持つのは紗弥菜。力の差なのかレディーファーストなのは不明だが、おそらくまたま持っていたからである。紗弥菜が内野のギリギリのラインまで下がる。

その不可解な行動に侑治郎の頭上には疑問符が浮いたが、紗弥菜の投げようと姿勢を変えた始めたことで、すぐに搔き消された。

何と下手投げ 野球で言うアンダースロー だつたからだ。流麗さえ思わせるフォームが展開される。その見事な様は、暫時勝負ということ脳内から滅却されてもおかしくなかつた。

やがてピン、と伸びた右腕が、目前の敵の向こう脛を殴るように、左方に振り切られる。まさにその時、手の内にあつたボールが、凄まじいまでの横回転を持って侑治郎を襲つ。

空気を横殴りに切り裂き、滑るように曲る。スライダーとよく似た球筋に、侑治郎は目を剥いた。

ボールが懐に入ってきたので、とりあえずは鍛えられた胸板を盾にし、多少の勢いを殺す。それから敏活に両腕の肘を胸の前で折り曲げ、抱え込むようにして本格的に殺しにかかる。回転がなかなか治まらなく、取り逃がしそうになるが、何とか捕球に成功した。

「ふう……なかなか変わったもんを投げてくれるな」

「ふふふ、昔はソフトボールとバスケットボールをやつてたからね。さて、侑治郎先生はどんな球を投げてくるのかしら

挑発的な笑みを侑治郎に投げる。

（あんまり使いたくなかったが、あれを使うか。紗弥菜は手強そうだし、午後から外で遊ぶんだろうし……）

侑治郎はおもむろに、天井へ無造作にボールをぶん投げた。

「は……？」

紗弥菜は呆気に取られる。戦意のかけらもへつたくれもない、と思つたからだ。

「ちょっと侑治郎先生、こんなボールじゃ勝負にならないわよっー。反射的に頭にきて、つい叫んだ。

極めて冷静に侑治郎は応じる。

「ほう。紗弥菜先生は、あの球を捕れると言われますか

「捕れるわよっ……いえ、捕れますよっ！」

ふざけた球を投げたことを詫びる様子もない侑治郎に、紗弥菜は柳眉を逆立ててしまった。それでも園児達の存在を思い出したのか、慌てて口調を変えた。

「それじゃ、捕つてみて下せー。ちよつビ今、上昇が終わりましたから

侑治郎の言つ通り、真上を見上げる。すると、上昇を終えたボールが、重力に従つよう真っ逆さま落ちてくるではないか。紗弥菜は落下点に入り、捕球体勢に入つた。脇を締めて大きな胸を寄せ、両の掌を上に向ける。決してこんな格好をしたい訳ではない。ただ、正確に捕球する為には仕方のないことであつた。

数十秒とも経たないうちに、紗弥菜の両の掌にボールが着弾する。そのまま胸元に抱き寄せれば捕球完了だつた。しかしボールはちつ、と言つ擦過音とともに、あらぬ方向へ逃げてしまった。

「えつ！？」

ボールの逃げた方へ跳ぶが、時既に遅し。無常にも床についてしまつた。

勝負は決した。

「そんな……」

がつくりと肩を落とす紗弥菜。

侑治郎がぽん、と肩に手を置く。

「勝負は時の運。そんなに落ち込むなつて

「べ、別に落ち込んでないわよっ！ 私はただ……眼鏡を直してただけよ！」

満面を真つ赤にして、眼鏡を触りながら下手な抗弁する紗弥菜に、侑治郎はぷつと吹き出してしまつ。

火が出るほど恥ずかしくなった紗弥菜は、ハツ当たり氣味にボルを押し付ける。

「な、何、笑つてんのよ！　あんたは早く片付けなさい！」

「はいはい」

笑みを浮かべながら、紗弥菜を軽くあしらつ。次いで、踵を返すと羽瑠乃が立つていた。

「ん？　どうしたのかな？」

羽瑠乃が無邪気に言い放つ。

「先生たち、恋人みたいだねー」

「んんっ！？」

思いがけない一言に、侑治郎は瞠目する。

「……って、比呂恵くんが言つてたよ」

そう言つと、羽瑠乃は女子園児達の輪に入つていった。

「はははは、最近の子どもつてませてるよな」

侑治郎は大笑しつつ、紗弥菜の方を見やる。しかし、紗弥菜の姿はなかった。何処へ行つたのだろうと見渡す。

「あ、居た」

紗弥菜は、比呂恵の近くにいつの間にか移動していた。そして、今にもきいきい声で注意をしようとしていたのだった。

5人揃つて昼食を食べ終えて、のんびりと談笑していると、短い昼休みがあつと言つ間に終了した。

「んじや、行こつか

「ん、ああ」

爽奈に促され、侑治郎は急いで腰を上げた。先を行く爽奈の足が、思つたよりも早い。

「なあ、いい加減教えてくれよ。お前の所のクラスは、一体全体何をするんだ？」

「分かつたよー。ヒントはあれ」

爽奈がその場にぴたつと止まり、やれやれといった表情で砂場を指差す。

侑治郎は即座に理解した。

「ああ、砂遊びか。でもさ、最近ある親御さんが、不潔だとか言って遊ばせないとか言つてたな。その辺は大丈夫なのか?」「何が?」

爽奈の素つ頓狂な答えに、侑治郎は顔をしかめる。

「だから、衛生上には問題ないかつてことだ」

楽しい気分に水を差された爽奈は、眼を吊り上げる。

「衛生上だあ? 侑治郎、君は今の今まで何を勉強してきたの? 何を見てきたの? 砂遊びって言つのはね、ばっちいと思われ勝ちだけど、そのばっちはが子どもにとつてある程度大事なんだよ! ……何だつたかは忘れたけど、体の中にあるあれを刺激させないと、病弱っ子になるかもしれないんだよ。それに、物を作るといつことや泥だんごを使つた「こ遊びもできるから、一石何鳥にもなる素晴らしいものなんだよ。私はその辺のことも考えて言つてるのこ、理解できないつてかこのやるー!」

最後の方は最早嚇怒せんばかりの語調だったが、実に的を射た説

得力だつた。

一気に言つたせいか、はあはあと火のような荒い息を吐く爽奈。

迫力に氣圧けおされた侑治郎は、この場は執り成すことが先決だ、と頭の中のそろばんを弾いた。

「そ、そうだな。免疫がないつてのは後々困ることになるし、何よりじこ遊びは、表現力や想像（創造）性を養うに良いとされてるし……あ、あと、男女問わず遊べる砂遊びは秀逸な遊びだな」

爽奈の顔から怒りが一瞬の内にして没却され、立ち所に満足気な表情となつていぐ。

「なーんだ、分かつてんじやん。そんなら最初から無駄口叩かなきや良かつたのに。ほら、さつさと行くよ」

体をくるりと向け、さつさと歩く爽奈の後姿を見つつ、侑治郎は再び顔をしかめて首をひねる。

（俺は聞きたかったのは、園児達の替えのシャツやパンツを用意してたのかつてことなんだけどな……。これ以上怒らせると厄介だし、用意してんだろうな）

無理矢理納得すると、すっかり教室に入ってしまったたらしい爽奈の後を、急いで追つた。

「と、言つて。これから砂遊びをしまーす！ 目指せアンコールワットとタージ・マハル！ 川は黄河並みが目標ね！ 分かつた人ー？」

鈍色で鉄製の小さなシャベルを、天を突かんばかりに上げ、弾けんばかりの笑顔で訊く爽奈。

「はーい！」

園児達が手を上げ、充满した生氣を爆裂せしるよつに返事を返した。男女ともに私服から体操着に着替えている。因みに、みんな白い半袖のシャツに紺のハーフパンツと言つた出立ちである。それに、暑さ対策の為に水色の帽子を頭に被り、靴は履いておらず裸足であり、あとは遊ぶだけの状態だ。

（こやこや、4歳そいらの子どもがそんなもん知つてゐるわけないだ  
ら……）

1人ツツコミを入れる侑治郎だが、細かいことを気にしていは

詮方ないと頭を振つた。

「それじゃあみんなー、元気に遊ぼうじやないか！ 砂場に突撃  
つ！」

ここの野瀬私立保育園の砂場は極端に広く、まるで海水浴に来たよ  
うな錯覚に陥るくらいである。

シャベルやプラスチック製の短いスコップを持つて、思い思いに  
砂場を掘つていく園児達。

山を作る者、川を作る者、泥だんごを作る者、ただただ掘る者と、  
それぞれ何の計画性はもなく自由気ままにやつてゐる。その中に爽  
奈が加わつてゐるのは言つまでもないが。

やつぱり（爽奈も含めて）子どもだな、と思いつつ、侑治郎は山  
を作つてゐる園児達に話しかける。

「あーっ、ゆうじろう先生！ ちよぢうど良かつたよー」

因みにこの男子園児は、こつも侑治郎の急所を狙う狼藉者ではな  
い。その園児は、少し離れた所で川作りに没頭してゐる。

「ん、どうしたの？」

「なかなか山が出来ないんだよ。どうしたらいい！？」

視線をその山の方に向けた。なるほど、山のような泥の塊が、今  
にも崩れそうな状況である。

侑治郎は、しゃがんで園児と目線を合わせる。

「乾いた土を振りかければいいんだよ。そんで、ペチペチと叩いて  
みて、ぐちゃつて感触だつたらもつとかけばいい。で、ぱちつて  
掌に乾いた砂だけがつくぐらいだつたら、今度は少しずつ泥を塗つ  
て、乾いた砂をかけてを繰り返せばいいんだよ」

くだけた口調で説明し終える。園児達には難しい言葉はまだ早い。  
これぐらい碎けた口調の方が分かつてくれるのだ。

「そつかあ！ 分かった！ ありがとう、ゆうじろう先生！」

「どう致しまして」

「こいつと笑い、立ち上がる。その時、園児達の奇声と喚声と歓声の中に、場違いな声が聞こえてきた。

「誰か助けてー、せーんせーー！」

声のする方に、瞬時に噴き出た冷や汗を搔きながら行く。すると、そこには身の丈以上に穴を掘つてしまつて、出られなくなつた男子園児が居た。

「先生、助けてーっ！」

男子園児の眼から大粒の涙がこぼれ、鼻からは透明な鼻水が、鼻の下を伝つて口に入つていた。

侑治郎はその場にひざまずき、

「おいおい、どうしてこんなことになつたんだ……。とにかく、先生の腕に掴まつて」

両腕を伸ばした。男子園児が掴まつたことを確認すると、一気にぐいっと引っ張り上げた。

「せんせえ……ありがとっ……」

えぐえぐと泣き続ける男子園児に、侑治郎は頭を優しく撫でつつも、質問する。

「どう致しまして。それにしても、何で穴なんか掘つてたんだ？」

男子園児は、悲しそうに鼻をすする。

「地球の裏側に行きたかったの。そんで、ブラジル人と遊びたかった……」

侑治郎は諭すように言つ。

「どうか。でもな、ブラジル人つて言つのはお祭り好きなんだよ。お祭りの時に行くと喜ぶんだけど、それ以外はあんまり機嫌が良くないんだよ。だから、いきなり行つたりなんかしたら、怒られるだけさ。それに、1人で行つちゃ尚更だ」

「はあい……」

この男子園児は、1人にしておくとまた同じ行為をしかねないので、ひとまず仲の良い園児達の輪に入れることにした。

園児の手を引いて歩いていると、背後から何かが飛来し、背中に当たった。

「何だ？」

首を回して背中を視認する。すると、一塊分の泥がべつたりとくつ付いていた。こんなことをする奴は、1人しかいない。

泥が飛んできた方に向き直ると、まさにいたずらっ子の笑みを顔面に貼り付けた問題児が、やや離れた所に泥だんごを持つて立っていた。

「こらつ、みきのつ樹紀！ 先生が見えない所で泥だんごを投げちゃ……」

べちゃつと言つ泥だんごの着弾音とともに、侑治郎の白い額が黒く染まつた。樹紀の隣の園児が思いつきり投げたら、たまたま当たつてしまつたのだ。

この樹紀と呼ばれた少年は、実習初日にしてから、勇者として崇められている園児なのだ。

侑治郎は無言で泥を払つ。そして、能面のよつた表情で樹紀達に近付いて行く。

「やばい、逃げるぞ！」

焦つた樹紀が仲間の園児を伴つて、逃亡しようとする。だが、樹紀の頭に泥だんごが飛来した。

「うつ……」

その場に事切れたかのように倒れる樹紀。

侑治郎はいささか仰天した。泥だんごが飛んできた方角に体を向ける。

そこには泥だんごをもてあそびながら、満開に咲き誇つた花のような笑顔で、こちらを楽しそうに見ている爽奈が居た。

侑治郎も歯を見せて笑い返し、快哉を叫ぶ。

「お、爽奈ナイス！ 樹紀の奴のことをつけよつといじしめなきゃならん、と思ってたところ

「べつひやつ

「はあつ？」

視界が突然真っ暗になる。飛散する泥を浸入させまいと、反射的にまぶたを閉じたからいいものの侑治郎は、眉間辺りに命中したらしい泥を手で除けながら、暫時の経緯を回顧する。

爽奈を褒めた 爽奈が照れ隠しなのか何なのか不明ながらも、持つていた泥だんごを侑治郎に投げつける 見事的中。視界真っ暗、聞こえる歓喜の声（今こい）。

「あ～……」

回顧から帰つてきた侑治郎が、何度もこくこくと頷く。様々な爽奈に対する不満と一緒にふつふつと沸く怒りのせいで頭が熱い。袖で眼の周りを拭うと、眼をかっと見開いた。

「みんなー！ これから泥合戦を始めるよー！ 泥だんご作つて、誰彼構わず投げちゃえべいいと思つよー。 そんじや、よーい始め！」

まるで侑治郎の怒りの言葉が、噴出する頃合を見計らつていたかのように爽奈は、周りを扇動して自身の行いを一旦はうやむやにした。

園児達が一斉に足元の泥を丸めて、適当に投げつけ合つ。勿論、相手が泣いたら、そこで攻撃中止という暗黙のルールもある。

「清義。<sup>きよよし</sup> お前は危ないから、先生から離れる」「う、うん」

侑治郎の手を離し清義は、友達の園児の居る方へと走つていく。その様を横目で視界に入れつつ泥だんごを作り、

「これでも喰らえっ！」

爽奈に思いつきりぶん投げた。

それを上体を反らし、あたかも100人ぐらいのクローンがうじやうじや出てくるシーンがある某映画のよう、紙一重のところで爽奈は避けた。

「おわつと！ ……こらー、侑治郎！ そんなにマジになつて投げ

ちゃ怖いよ！ もつと穩便に行かないと、園児達が怖がっちゃうよ

ー

半ば焦りながらも笑顔を崩さない爽奈。

対する侑治郎は顔を怒りで赤く染め、仁王のような表情で泥を両手で器用に丸める。

「問答無用！ もう一丁喰らふぐつ！？」

「やーい、がら空きでやんの！」

いつの間にか復活した樹紀が、どの頃合で前方に回ったのかとにかく、侑治郎の急所を拳で突いた。

「おー、みつきーグッジョブ！」

「へへへー。 そうな先生、俺つてすげーだろー！」

2人のやり取りを見て、ようやく侑治郎は悟った。

「お、お前等グルだつたの……かつ……」

前方にゅつくりとした動作で崩れ落ちる侑治郎。そこで意識が事切れた。

「じゃ、みつきーにもご褒美をあげるよー」

言つて、爽奈は泥だんごを投げる。

「げつ」

避けるすべもなく、額にまともに喰らつた樹紀は、侑治郎と仲良く砂場に仰向けになつて倒れた。

「はーつはつはつは、正義は勝つのだよー！」

おそらくはヒーローもののアニメの台詞を気持ちよく発しながら、爽奈の高らかな大笑が砂場一体に響き渡った。

紗弥菜がこの場に居れば、こう言つただろう。

「まさに外道ね……」

と。

まるで修羅場のような1ヶ月間の実習が終わって1週間弱ほど経つた。

収穫は多かれど、その何十倍はある疲労の方がもつと多かった。基本的に実習中と言えども土日は休みなのだが、それだけでは到底疲れが取れにくい。

なぜなら、少しずつ実習ノートを書いておかなければ、後から夏休みの絵日記並みに大変になるからである。

1日の出来事を思い出して書けと言われても、不可能である。当たり前だが居る訳ない。もしも、1日1日の仔細を憶えている人間がいようなものなら、稀有な存在だ。

しかも、毎日毎日実習に来ているからと言え、特別なことがあるわけがない。大方のスケジュールは同じなのだから、中盤以降は書くことがなくなり、竜頭蛇尾になり勝ちである。今回のよつな長期実習なら尚更だ。

竜頭蛇尾にならないには、起こつた出来事のペース配分を間違えず、小出しに出す。そもそもは、先に述べたように泣きを見ることにもなりうるからだ。そしてそこからが、己の語彙がどれだけあるか試される時である。長文にするも良し、短文にするも良しのとにかく、実習内容をある程度まとめて書けば何ら問題ないと思われるものだ。

1日1日とにかくちゃんと書けば良いのだが、自宅に帰つてくると、途端に疲労感が襲つてきて書きたくないくなる。そこで、己に鞭を打てるか打てないかでは大きく違う。疲れた脳味噌をフルに動かし、一気に書き上げるのが最良なのである。そこでくたばつてしまつといふ。

以上のことから実習と言つのは、1日の積み重ねが如何に重要なのかといふことを、改めて知ることができ機会でもあるのだ。

…勿論、業務内容もだが。

「失礼しました」と言い、涼しい部屋から出た瞬間、もわっとした熱気が体を襲う。

その熱気に紗弥菜は、思わず顔をしかめた。  
(何でこんなにも暑いのかしら……)

窓の外からは、最早騒音の域に達するのではないかと思つべからいで、やかましく蝉が鳴いている。

胸の前に垂れていた髪を掴んで、少し乱暴に後ろに投げる。櫛ですいたように、背にむらむらと流れる長い黒髪も束ねなければ、季節柄暑苦しく見える。

しかし紗弥菜は、決して束ねるようなことはしなかつた。特別理由はないのだが、そうしてしまつては成佳や真優、一応爽奈とかぶつてしまつようと思てしまつからだ。

変わつたところにも我が強く、極力は人とかぶらないことを信条としている点がある。何に対してもかぶらないようにしているかは、髪形以外は本人にしか分からぬ。が、まだ他にあるのかもしぬない。

「あれー？ 紗弥菜じやない？」

「ほんとだー」

紗弥菜がしかめつ面で廊下を歩いていくと、半袖ハーフパンツ姿の女子2人が階段から現れた。

2人の女子がこちらに走り寄つてくる姿を見て、ようやく紗弥菜が気づいた。

「あら、朋絵に夏穂じやない。部活なの？」

紗弥菜は相好を崩した。

他の3人ほどの仲ではないが、それなりに社交的で交流関係が広い紗弥菜は、クラス内に友達が多い。

「まあね。何しろ大会も近いし、暑いなんて言つてられないよ！」

朋絵が、ポケットからタオルハンカチを取り出し、ごしごしと顔

の汗を拭く。

「今日は、成佳ちゃんと真優ちゃんと爽奈ちゃんが居ないんだね。どうしたの？」

夏穂が首の辺りを拭きながら、訊いてきた。

「成佳と真優は先週実家に帰つて、今日帰つて来る予定。爽奈は、実習ノートが終わつてないんじゃないの」

最後の爽奈の名前を出すのと同時に、つんとした態度に変貌する紗弥菜は、さながら役者のような演技と言つてもよかつた。

「そなんだ」

承知した夏穂が頷いた。

と、朋絵が卑しさたっぷりに頬を吊り上げ、楽しげな語調で紗弥菜をなぶるように言つ。

「ふううん、そうなの。道理で面白くなさそつた顔をしてたわけだ。彼女と一緒にじゃなきや、つまんないもんねえ」

「彼女？」

「」の阿呆は何を言ひ出すんだ、と言わんばかりの呆れ顔で、紗弥菜は朋絵を白眼視する。

「だつて、喧嘩するほど仲が良いつて昔から言ひじやん。あんた達もできんのかなーって」

「何を馬鹿なことを言つてんのよ。何でそうなるの？ 爽奈も私も女よ？ 女同士の恋愛なんて現実的にありえないわ」

呆れに怒りを足して、白眼視を続ける紗弥菜。

しかし、敵は全く怯まない。それどころか大げさに後ずさつて、びっくり仰天して見せた。

「えええ つ！？ あ、あんた、今の一言で全同性愛者を敵に回したね！ 全米のみならず、全世界があこがグワーン！ って落ちるぐらい驚愕したに違いないよ！」

紗弥菜は呆れを一気に通り越した。今にも爆発しそうな怒りを拳を作ることで、懸命に押し殺す。

「……」めん、日本語で言つてくれない？ ……といふが、そういう

「うあんたはどうなのよ？」

「えつ、タチかネ「かつて」と？」

「は……？」

「そこまで訊かれちゃ仕方がない。私は  
んぐつ、と苦しそうな声が朋絵の口内で響く。  
意味を知っているのか、事の成り行きを黙つて見ていた夏穂が、  
朋絵の口を手で塞いだのだ。

「これ以上、訳の分からないことを言つちゃ、紗弥菜ちゃんが混乱  
しちゃうでしょ。自重しようよ……ねつ？」

紗弥菜から見れば夏穂が朋絵に、至つて普通に微笑みかけている  
ように見える。だが、朋絵から見た夏穂は、淒みのある笑みを閃か  
せた般若にしか見えなかつた。

「んぐんぐ」

うんうん、と言つてるつもりなのだろうが、口内でぐぐもつてしまい、正確に聞こえない。

夏穂は紗弥菜に笑顔を向ける。

「それじゃ、紗弥菜ちゃん。私達はこれで」

暫時呆気に取られていた紗弥菜が、取り繕うように笑う。

「あ、うん。練習頑張つてね。応援してるから」

「は～い。じゃ、またね」

そう言い残して、朋絵を引きずるようにして夏穂は去つて行つた。  
紗弥菜は小首を傾げてうーん、と唸る。

（タチにネ？……何のことだつたのかしら？　芸能人に居た気がするけど……まあ、あとで調べよう）

と、ポケットに入れてあつた携帯電話が、突如として激しく震える。取り出して開き、ディスプレイを見ると、『メールがきています』との文字が表示されていた。

（誰だろ？）

メールの差出人の名前を見ると、爽奈からだつた。

（あいつが私にメールなんて珍しいわね。どうしたのかしら？）

同じアパートで部屋も近いからメールや電話よりも、部屋に行つた方が手つ取り早い。そう言つていた爽奈が、メールを送るということは余程のことなのだろう。

とりあえず題名は何も書かれておらず、本文を見てみた。

『たすけて・・』

言えば数秒で済みそうな一言が、そこに踊つていた。

紗弥菜が渋面を作る。同時に何だか腹が立つてきた。

（何これ？ つたく、ちゃんと変換されてないし、三点リーダも使つてないじやない。いたずらにしても全く芸がないわ）

携帯を畳み、ポケットにしまつ。心中でふりふり怒つて悪態をつきながら、廊下を歩き始めた。しばらくは他のことを考えながら歩いていたが、

（でも……）

やつぱり、文面とめつたによこさないメールが妙に引っ掛けた。

一度感じ始めた不安は、どんどん悪い方に膨らんでいくものである。（万が一、爽奈に何かあつたとしたら……）

不安が胸と思考回路を押しつぶしていく。

成佳と真優は今日帰つて来るとは言つていたが、おそらく夜になるとも言つていた。侑治郎も新しく始めたバイトで、夕方にしか帰つてこない。

今現在の時刻は午前11時30分。今日1日自由なのは、紗弥菜しかいないのだ。

しばらく無表情でその場に立ち尽くしていたが、まじりを決して走り出した。

（……私が行くしかない。いくら毎日口喧嘩してるのは言え、病気や事故の時は関係ない。困つてゐる時は助ける。それができなきや、人としてどうかしてるもの）

やがて、校門を出た。夏のぎりぎり太陽の容赦ない攻撃に耐えながら、アパートへひた走る。

（でも、もしも嘘だつたら……絶対に許さないんだからつー）

## 13章 初めての看病

爽奈の部屋のドアが開き、紗弥菜が警戒しつつ玄関に足を踏み入れる。

ドアを静かに閉め、靴を脱いで部屋に上がる。綺麗に整え、ついでに脱き散らかしてあつた爽奈の靴も揃えてやつた。

部屋に繋がるドアを開けた。クーラーがついておらず、その汗が今にも滝のようになってきそうな部屋で爽奈は、ベッドに入つて眠つていた。しかも分厚い布団までかけて。これではまだ嘘か本当のか分からぬ。

「インターホンも鳴らしたし、ノックもしたのよ」

一応、一言言つておく。黙つて入つたからつて、後でぐちぐち言われないようにする為だ。

「久々に入つたけど、相変わらず凄い部屋ね……」

独り言をつぶやき、部屋を見渡す。

床には無数の人形が置かれ、あまり足の踏み場がない。それはテレビ周囲も変わらない。それどころかゲームソフトがケースが開け放しなものや、中身がその辺放り出されたり、極めつけはぬいぐるみの頭や体の上に乗せられてものがあつた。アニメのDVDも床に山積みにされてたり、ゲームソフト同様にぬいぐるみの上に乗せられてある。

床に置いてあつたぬいぐるみを拾い上げ、悲しげに見つめる。

「可哀相に。折角創つてあげた人形が、こんな扱いをされてるつて知つたら、真優は嘆くに違ひないわね……。それにしても、無性に整理整頓がしたくなつてきたわ」

いづまで酷いと整理整頓しがいがありそうだ、と指の関節を鳴らす。

「おか……あ……さん……」

か細い声が耳に入つた。何だろう、と耳を澄ます。

「あつ……い……よお……」

「暑い……？ 暑いなら、クーラーをつけるわよ？」

床に落ちていたリモコンを拾つて、スイッチを入れる。1分近くの間があつたが、涼風が部屋中に流れ始め、徐々にではあるが熱気を奪い取つていく。

「はあ、涼しい」

専門学校から一気に爽奈の部屋まで駆け抜けてきた紗弥菜は、クーラーの前に立つて極楽気分を味わつた。

横目で爽奈の様子を窺う。大きな反応はないが、心なしか呼吸の間隔が短く、喘いでいるようにも聞こえてきた。

枕頭（ちんとう）に移動してじっくり観察する。やっぱり、息苦しそうに呼吸を繰り返していた。

「まさか……」

爽奈の額にかかる髪を除けて、掌を押し当てる。汗の水っぽい感触と焼けるような熱さに、紗弥菜の眼が驚愕に見開かれた。

「凄く熱い……と、いうことは……本当に風邪！？」

よくよく見れば、顔中や首などは大小粒のようないい汗にまみれていった。

「ど、ど、どうしよう……私、看病したことないわ……」

祖父母のどちらかが風邪を引いても母親が看病していたし、両親のどちらかが風邪を引いたとしても、紗弥菜はうつるからと言われ、看病に携わることは皆無であった。引いたら引いたで周りがちやほやするように看病してくれるものだから、されるがままであり、看病のノウハウなんて意識したこともない。ゆえに、何も分からぬのだ。それでも、何らかの講義で「幼児が風邪に罹患した時はどうするのか？」と、それぞれ考えたことがあった。

「とにかく、その時に考えた通りにやつてみればいいのね。みんなも良いつて言つてくれてたし……。で、まずは……」

ベッドの横のタンスに眼が行く。人家のタンスを勝手に開けるのは、爽奈が泥棒だけと思っていたがまさか自分もなるとは、と

でも頭に浮かんだらしい。とりあえず、進まぬ顔でタンスを引く。そこには、年不相応の幼げな下着が割りと几帳面に並べられて入っていた。

（ほんと白ばかり……本当に、はたちになつたのかしら？）

1段目は下着しか入つてなかつた。シャツを取り出して2段目を引く。すると、視界一発キヤラもののパジャマを発見した。それを無表情で取り出す。

枕頭に戻つて持つて来た物を、寝ている爽奈の頭の横に置く。布団をめくつて全体を露にすると、パジャマのボタンに手をかけた。1つずつ外して行き、最後の1つを取つて左右に開く。

「なつ……！？」

たまげた紗弥菜は一の句が次げず、魔法にでもかかつたように固まつた。

無理もなかつた。何しろ、爽奈はシャツも着ずにパジャマ一枚で寝ていのだから。

息をするのも忘れて見入つてた紗弥菜は、ふと我に立ち返ると、首を激しく横に振つた。

「そ、そうだ。タオル！ タオルで拭かないと！」

脳内に起こつた様々な想見や妄想を、抹消せんばかりにあえて大声で言つた。

風呂場の近くにあつた3段のボックスペースからタオルを2、3枚引つ張り出すと、うち1枚を四つ折にして爽奈の汗ばんだ体を、りんごのようになつて満面を赤く染めつつも、拭いていく。その後は、頭の横に置いておいたシャツとパジャマを、起こさないように着せた。次にズボンを脱がす。細いことは細いのだが、あまり肉付きがよくなく、色気が感じられないほどであった。大して汗は搔いていかつたが、一通り拭いておく。新しいズボンに取り替え、ひとまず終了である。

（ふう……。あ、そういえば氷枕を忘れてたわ）

失念していた氷枕を冷凍室から出して、先ほど取り出したタオル

で巻き、今まで使っていた枕と交換して頭の下に敷いた。

「で、次が問題ね……」

台所の方を忌々しげに睨む。

（でも、他に誰も居ないんだし……やるしかないわね）

タンスの上に置んで置いてあつた爽奈のエプロンを身に付け、ついでにヘアゴムも借りて背に流してある白髪の黒髪を、うなじの所で束ねて結んだ。

またしても失礼とは思ひながら、冷蔵庫と冷凍庫を開けて田舎しいものがないか確かめる。因みに、紗弥菜が作ろうとしている料理はお粥である。料理素人でも比較的簡単にできる料理なのだが……。（冷凍のご飯と卵と鰯節か……。野菜はまだ送られてきてないのかしら？）

爽奈の実家は農家である。米も野菜も作っているらしく、月に1度とは言わずに何度も送られてきている。1回分の量が多大でその都度4人は、ありがたくおすそ分けを貰っている。おそらく、農地を沢山所有していて裕福なのだろう。

（まあ、いいわ。やれるだけやつてみなればね）

流し台の下の収納場所から小振りの片手鍋を見つけ、水を張つて火にかける。因みに、水の量は溢れんばかりだつたりするが。

（次は食材を切つていけば、いいのよね……？）

ラップに包まれていた冷凍のご飯を、まな板の上に置いた。鍋を出す時についでに出した（刺身）包丁を右手に持ち、左手をご飯を半ば覆つように据える。その状態で（刺身）包丁の刃先をご飯に入れた。当然、がつという硬い音がしたが、気にせずそのままゆっくり引いていく。すると、このままでは左手の中指の先端部を切断しそうになることに今更気づいたらしく、

「あれ？……危なっ！」

慌てて左手を手前に引っ込めた。

（うーん、どうやって切つてたのかしら？）このままじゃ指がなくなってしまうし……あ、それなら両手を包丁装備にしたらいいんじ

やない）

かくして左手に文化包丁、右手に刺身包丁という、何かのゲームに出できそうな中ボスキャラっぽい格好に変貌してしまった紗弥菜。料理人じやなくとも、一般の主婦から見たらお叱りを喰らいそうだが、残念ながら注意をする者は1人も居なかつた。

だん、だん、と、米を包丁で荒々しく切つていく……と言つよりも若干粉碎していき、見事米のかけらを編み出してしまつた。それを沸騰してぐらぐら煮立つていた鍋の中に、1粒ずつお湯が飛ばないよう、鍋の端に滑らせて投入していつた。

次に卵をお椀の中で割り、箸で溶いていくのだが、溶き方が独特だつた。普通は空氣が入るようにならへん。が、紗弥菜の場合は、まるで園児が適当に落書きをするかの如く、箸をせわしなく横に往復させるだけだつた。白身と黄身が混ざつた卵を今度はどうするかと思ひきや、そのまま鍋に投入してしまつた。

材料に入つていた鰹節も右手で一掴み分を入れたが、そのせいでお湯が吹きこぼれてしまつた。慌てて火を消し、おたまである程度お湯を捨てる。再度点火すると、思案顔になる。

どうやら味付けに悩んでいるらしいのだ。去年の講義の中で作つたはずだが、驚くほど憶えていない。

紗弥菜は煎じ詰める。

（確かに味噌は入つてた気がするわ。あと……しょうゆもちょっと入つてたわ。多分）

しうを円を描くようにひと回し分投入し、見慣れた子どもの禿頭が書いてある味噌のふたを取つて、おたま約半分ぐらいを“ぐつそり掬い、火も弱めずに鍋の中に落とした。

（多分……あと5分ぐらいね。部屋にアクポカスを取りに行くし、流石に弱火にした方がいいかしら？）

まるで血の池地獄のように、時折ぼこつと大泡を浮き上がらせ、ぐらぐら煮立つたているお粥のようなものを皿の端に入れる。火の危険性は理解していたので、弱火にして一旦部屋に戻り、スポーツ

ドリンクを取つて来た。それをコップに注ぎながら、そろそろかと火を止めた。

最終的に米の分量と水の分量が同一、またはどちらか一方が少なかつたので、米と卵と鰹節の味噌スープのようなものが完成した。中身をどんぶりに移し、飲み物の入ったコップとどんぶりをお盆に乗せて、枕元まで持つて行く。

苦悶の表情を浮かべ、小さく喘いでいる爽奈の顔に浮かんだ汗を、タオルで拭き取りながら、記憶を辿る。

（本当、入学してからの付き合いだけど、こんな爽奈は初めて見るわね。……似合わない……。やっぱりあんたは、馬鹿みたいに元気であるべきよ）

心頭でつぶやきながら、しかし起こすまいと優しく拭くことによつて、爽奈を励ます。

拭き終えたところでお粥をレンゲで主に米の部分だけ掬い、ふうふうと十分に冷ます。口に持つて行くのだが、開こうとしない。軽くペたペたと唇を叩いてみたり、口の下を同様に叩く。だが、全くの無反応だった。

紗弥菜は脳漿を絞つた。味はどうであれ食べてもらわねば、まともに風邪のウイルスと戦えないと思つたからである。腦中にあれやこれやと案が浮かぶも、使えないものばかり。その都度、頭を振つて忘却の彼方に投げ棄てる。やがて案が尽きたらしく、レンゲで爽奈の唇を叩いていたが、あることを閃き、全動作が静止した。

（口移し……）

たちまち顔から火が出るほど赤くなり、面映くなつた紗弥菜は、爽奈から眼を逸らした。動悸が胸郭を打ち破らんばかりに激しくなり続ける。レンゲを持つていらない左手で、心臓の辺りを押さえた。しかも頭の中も大混乱に陥つており、2つの二大組織を治める為に、深呼吸を数回繰り返す。

だいぶ落ち着いた頃合に、出てきた案を冷静に解析してみる。

（何度も口を開かないんだから、口移ししか方法がない。仕

方、ないわね……）

お粥を少量口に含み、噛み碎かなくてもいいほど柔らかいが、それでも噛み碎く。そして、爽奈を直視する。

（やつぱり……何だかんだ言つて可愛いわね……）（こいつ）

素直な感想である。口喧嘩をしていてつい悪く見勝ちになつてしまふが、爽奈は年不相応も相まって特に可愛く見えるのだ。

身を乗り出して顔を近づけていく。

心臓がまただんだん高鳴ってきた。

爽奈の真一文字に引き結ばれた桃色のふつくらとした唇に、紗弥菜の程よく潤つた唇が重なつた。ふんわりとした感覚に理性が吹っ飛び、頭がどうにかなりそうだったが、そこを懸命に耐えた。舌で爽奈の唇を舐めて開き、閉じられた歯を舌先で突く。すると、少し隙間ができたので少量ずつお粥を流し込んだ。

口に含んだお粥がなくなると、唇をそつと離して爽奈の喉仏を見る。微かに浮き出た喉仏が軒下していたので、胸を撫で下ろした。残りのお粥やスポーツドリンクも口移しで、時間をかけて食べさせ（飲ませ）た。途中から必死だつたからいものの、改めて振り返つてみると、胸をぎゅっと締め付けられ罪悪感に駆られる。

（私は何てことをしたんだろう……禁忌を犯してしまつたような、そんな気分だわ。いくら口移しと言つても、キスはキス。しかも女同士で……）

以降顔をベッドに埋めて思考を停止させた。ただただ、自分の中に新しく芽生えそうな何かを必死に抑える。

「ありが……と……お……」

かされたような声が聞こえてきた。

その声に紗弥菜は、がばつと顔を上げてずれた眼鏡を直し、まじまじと爽奈を注視する。

「ありが……と……お……」

口元に笑みを湛えながら、爽奈は無意識にかすれた声で謝辞を述べていた。

紗弥菜の双眸に涙が溢れてくる。

「さ、紗弥香……」

聞き慣れない名前を、声を震わせて漏らす。

紗弥香とは、紗弥菜が15歳の時に他界した当時10歳だった妹のことであり、容姿がまるで爽奈と似ていた。

どうやらその夭折した妹と爽奈が重なつて見え、あたかも妹が喋つてゐるよう見えていたらしい。

「紗弥香つ……！」

完全に爽奈が、死んだ妹の紗弥香にしか見えなくなつて一声叫ぶと、眼鏡を外して両肩を優しく掴んだ。そして、今や紗弥香にしか見えなくなつた爽奈の顔を、感涙に咽びながら穴の開く程見詰めた。紗弥菜は、紗弥香が死んで以来一切泣かなかつた。止めどなく次から次へと流れ出る涙は、約5年分を思わせるような量であり、ぽたぽたと爽奈の顔を濡らしていったのだった。

「あら、真優ちゃん」「あ、なるちゃん」

成佳と真優が同時に、驚いた表情でお互いを発見した。

「帰省は明日じゃなかつた？」

真優が、肩にかかつた荷物や両手に持つた紙袋を揺らしながら、成佳の隣にやつてくる。

一方の成佳は、両手にスーパーの袋を持っていた。中身がぎつしりと詰まつていて、今にも底抜けせんばかりである。

2人が並んで階段を上がり始めた。

少し切れ掛かつた息を整えながら真優は、憂慮に暮れた様子で答える。

「……うん。そのことなんだけど、そーちゃんから送られてきたメールが気になつて、前倒ししたの。なるちゃんは何か急用でもあつた？」

「ううん、違うわ。そう、真優ちゃんの所にも届いたの。実は私所にも届いて、それを読んだ瞬間居ても立つても居られなくなつて、

帰ってきたのよ」

「やつぱり、なるちゃんにも？ そーちゃんは、冗談でもそんなメールを送らないでしょ。だから、余計に心配で心配で……」

「ねえ。杞憂に終われば一番良いんだけ……」

2人は爽奈の部屋の前に立つ。真優が右手に持っていた紙袋を地面に置いて、インター ホンを押す。しかし、つんともすんとも返事がないし、出てこない。もう一度押してみる。だが、結果は同じであつた。

「真優ちゃん、入つてみましょ」「いつ」

不安を面に表しつつ、成佳が言つた。

「そうだね……」

同じく真優も不安を隠そつともせず、額きながらドアを開く。2人が靴を脱いで玄関に上がる。その際、すぐ傍に台所が視界に入るのだが。

「な、何これ？」

「あらあら……」

真優と成佳は、その惨憺たる様を発見した。いや、発見してしまつたと言つた方がいいのかもしれない。

流し台には、鍋や包丁やまな板などが無造作に放置され、周りには調味料や食器が整頓されていなかつた。

「台所を片付けないなんて、そーちゃんにしては珍しいね」

「それほどまでに切迫してたのかもねえ……」

爽奈は、一応自炊をきちんとしている。使つたびに必然と台所くらいは、整理整頓しようとする心掛けるものだ。実際爽奈は、部屋はごちやごちやとしているが、台所は綺麗にしてきた。だから、この有様はありえないものである。

台所は後で片付けるとして、2人はひとまず部屋に入った。

そこには床に正座をし、腕を枕にベッドに突つ伏して寝ている紗弥菜が居るではないか。

「あれー、さやつちゃんー？」

思わず真優が目を丸くして驚きの声を挙げた。

爽奈が紗弥菜の部屋に赴くことはあっても、その逆は滅多なことではなかつたからだ。

「ふふ。やっぱり、2人ともは寝顔も可愛いな」「紗弥菜の頬を指で突つついたり、爽奈の頬を延ばしたり、寝ていることをいいことにやりたい放題の真優。

「」一ら、2人とも気持ち良さそうに寝ているんだから、いたずらしちゃ駄目よ」

黙つて見ていた成佳が、真優の行為を諫めつつ寝ている2人を見やつた。

「あら？」

何かに気づいたらしく、小首をかたむける。爽奈と紗弥菜の口元に小さいながらも、ご飯粒が付いていたからである。もしさと思いつ表情そのままに思考を駆け巡らす。

「どうしたの？ それにしても、そーちゃんはただの風邪で良かつたね」「どうしたの？」

今の成佳に真優の言葉は一切聞こえない。

思索に没頭している様子だったので、真優は慌てて口をつぐむ。やがて結論に達した成佳は、ふうっと優しく息を吹いた。そして、爽奈と紗弥菜を交互に見ると、ふつと笑みが浮かんできた。（どうやら、今まで以上に仲が良くなつたみたいね）

「どうしたの？」

真優は、遠慮がちな眼を成佳に向けた。

「何でもないわ。さ、鍋や食器を洗つてお粥を作るわよ。真優ちゃんも手伝つてね」

「はーい、洗い物なら任せておいて」笑顔を輝かせて返事する真優。

そこに、どたどたと足音荒く入つて来る者が居た。

「爽奈！ 大丈！」

1人だけ意味を履き違えた侑治郎が、物々しい格好で登場した。

Yシャツネクタイ、黒のズボンとここまで普通だ。が、持つてるもののが右手に金属バット、左手にフライパンと戦闘態勢で殺<sup>や</sup>る気満々である。頭には何処から拝借したのか「安全第一」と書かれた黄色いヘルメットを被り、腹の中には週刊誌を仕込ませていて、防御面の強化も事欠かない。

しかし、大声を出して気持ち良さそうに寝ている2人が、起きてしまつことに危惧の念を抱いた成佳は、侑治郎の口を軽く押さえた。「しつ！ 侑治郎さん、強盗とか暴漢などそういう類じゃないんですよ。爽奈ちゃんは、風邪を引いただけなんですよ」

「ふえ？ ふおおなの？」

侑治郎は、素つ頓狂且つ間抜け声で訊ねた。

「そうなんですよ」

言いながら、口から手を放す成佳。

「そ、そななのか……。ああ、穴があつたら入りたいとは、このことなんだろうなあ……」

降伏した兵士のように侑治郎は、両手持つていた武器を床に置いた。その場にうずくまり、頭を抱える。

その後の侑治郎の落ち込み具合は尋常じやなく、じぱじぱくそのまま姿勢でぶつぶつと独り言をつぶやいていたと言ひつ。

「さて、と。みんな集まつたところで何をするかを決めるわよ」紗弥菜がノートと鉛筆を取り出して、テーブルの上に広げながら言った。

「はいはーい！」

元気よく手を上げながら、爽奈がテーブルに身を乗り出して、紗弥菜に顔を近づける。

たちまち頬を朱に染め、決まりが悪そうに顔を横に向ける紗弥菜。

「ち、近いわよっ……。で、何？」

不機嫌そうに頬を膨らませつつ、爽奈は答える。

「何さ、折角眼をしつかり見て、たまには褒めてやろうつかと思ったのにい。まあ、『桃太郎』がいいなーって思つただけだよ」

紗弥菜は、険しい顔で眼鏡の智ちをいじりながら訊く。

「『桃太郎』？……ありきたりや過ぎない？ 夏穂や朋絵の班もやるみたいだし」

「大丈夫だつて！ 勝算我にあり！」

薄い胸を張り、どん、と叩いて自信満々な爽奈。

「あのなあ、同じじや駄目なんだぞ。何か考えてんのか？」

黙つて聞いていた侑治郎が、急に心配になつたらしい。

（ふつふつふ、侑治郎のこの顔。今にも見てなよ。びっくりさせてやるんだから）

腹の中で侑治郎を嘲笑う。爽奈は、座布団の下からノートを効果音付きで取り出した。

「お～。そーちゃん、何か書いたの？」

興味津々に顔を輝かせる真優に、ウインクで肯定を示すと、テーブルの上に恭しく置いた。

「いやいや、今まで座布団に敷いてたじやないか」

などどのたまつた侑治郎には、満面の笑みで親指を下に向けた。

「何で喋らないのよ」

棘のある言葉をぶつけてくれた紗弥菜は、  
「おっほん」

と、わざと大きめ喉払いに注意を促した。そのつこでに、だらしなく座っていた姿勢を正し、正座になった。

「作家先生が目の前に居ながら恐縮ですが、勝手ながらわたくしめも脚本と言つものを書いてみましてね。是非とも『披見願いたい』と思つて『いる』のですが」

たまげた侑治郎は、爽奈の額に掌を当てた。

「ひやつ。何すんだ つー。」

ひんやりとした感触に、田をぱちくつさせた爽奈。

「いや、熱でもあるんかなーつて。2つの意味でびっくりしたかられ」

のんきに言つてくる侑治郎に、余程癪に障つたらしく。

爽奈は、迫力がないと分かつていても顔を怒らせ、声を荒げる。  
「ばつかやろ つー。私は至つて普通だぞ。早く放さないと、セクハラで訴えるぞー！」

「あ、すまんすまん」

侑治郎が慌てて掌を放した。

「全く、のつぽと眼鏡つ娘つてのは失礼極まりない奴らだね  
ぱりぱりと大きく音をたててせんべいを食べながら、不満を垂れる爽奈。

「それで、内容はどんな物なの？」

今まで黙っていた成佳が、爽奈の湯のみにお茶を淹れつつ問うた。  
「おおつ、よくぞ聞いてくれました。普通の『桃太郎』なら、猿でもできるー……とこつことで、私は大胆にアレンジしてみたんだ  
凄いでしょー、と、爽奈は喜色満面でノートの1ページ田をめくつた。

その瞬間、全員の表情が凍りついた。

なぜ脚本や『桃太郎』などの言葉が出てくるのか。その答えは9月も終わる頃に、担任の「今年も2年生は、文化祭で劇をします」という一言から始まった。

野瀬保育専門学校の文化祭は、毎年11月の第一日曜日に行われてきた。1年生は合唱、2年生は劇と、開校から毎年絶えることもなく、行われてきた伝統的な行事である。周辺の住民との結びつきも強く、多くの来校者が訪れるほどであり、多大な人気を得ているのだ。

爽奈達がボランティアに行つてゐる野瀬私立保育園や、その他周辺に点在する幼稚園や保育園の園児達を招待している。因みにその園児達には、露店の商品の引き換え券を前以つて配布しておくなり、太つ腹さを披露してしたりもする。これも他校への牽制のつもりなのだろう。

と、話はここで戻す。

実習の疲れもすっかり癒え、これからようやく就職活動に入ろうとしていた（入つていた）少数の生徒達からは、分かっていてもブレーキングが起こつた。

しかし、大勢に一方的に責められた担任は、泣き落としで生徒達を黙らせてしまつたのである。

泣かれに泣かれ、そのうえ哀願されてしまつては仕方がない。文句を垂れていた生徒達は、しぶしぶ劇をすることに賛成した。

だが、如何せん脚本作りや衣装作りや稽古をする時間が足りない。本来なら、余裕を持つて9月の初旬には言つておくものだ。しかし、ながら、担任がすつかり忘れていて今日の今日まで言いそびれていたらしい。

呆れを通り越して生徒達は、とりあえず急いで準備に取り掛かつた。

因みに、劇は去年まではクラスで1つだつたのだが、今年に限つて春先に決めた班で行うことを学長命令で義務付けられていた。

劇は特に制約がなく、やりたい放題できるのだが、脚本ばかりに

時間をかけていられないので、オリジナリティにこだわる者など居ないに等しかつた。よつて、既存の作品をそのまま書き起こすか、少しばっかり改变するなど、短期でできて且つ楽な方法を探る班が全体とつても過言ではなかつた。

かく言つ爽奈達もその口だつた。オリジナルなら、紗弥菜がぱぱと書いてくれそなものであるが、あいにく幼児向けは書いたことがなく、無理に等しい注文だつた。

そこで、話し合いで何をするか決めることになつた。

しかし、爽奈が既に脚本を書き終えていたことで、爽奈以外の面々は内心安堵したものだ。

そう、中身を見るまでは……。

「何？」この超展開しかなくて、観る人を置いていかんばかりのストーリーは……！

「あんなあ、これじゃ意味不明過ぎて、園児達も分からないつて」くちぐちに紗弥菜は目を吊り上げつつ、侑治郎は嘆息を混じらせ、脚本の内容について突っ込む。

「何おうつ？ 君達は私の渾身の力作を馬鹿にするのか！」

爽奈が怒つても迫力のない顔で、紗弥菜と侑治郎を交互に睨んだ。侑治郎はかぶりを横に振つて冷静に諭す。

「そうじやなくて、何で『桃太郎』の話に『金太郎』とか『浦島太郎』とかが出てくるんだ、つて話だよ。最近あつた特撮ものみたいじゃないか」

「そんなもん知らないねーつだ！ 設定が丸つきり違つてれば、問題ないもんねー」

仕舞いには両手を腰に当て、胸を張つて威張る始末である。

「む。まあ、そう言われてみればそうだが……」

言葉では一応そう言つてみたものの、得心が行かない侑治郎は、脳内で言葉を選定して紡ぎだすように慎重に言い出した。

「だけど、他作品との融合は園児達から反感がきやしないか？ 登場させるにしてもせめて、何で金太郎や浦島太郎が、桃太郎と一緒に

に鬼退治をしている理由や説明は必要だと思うぞ」

侑治郎の言う通りであつた。他作品の人物を登場させるには、適当でもいいから理由が要る。

爽奈の脚本は、金太郎と浦島太郎のことには一切触れておらず、旅に出てすぐの場面で2人の台詞が書かれてあるほどだ。

「例えばどんなのー?」

すっかり膨れつ面の爽奈が、不機嫌そうな聲音を挙げた。

「そうだな……」

侑治郎は腕を組み、思案顔で床を凝視する。少し経つた後、即興で考えた案を吐露し始めた。

まず金太郎の扱いについては、17歳くらいの設定。武器は鉄まさかり。次いで浦島太郎は18歳くらいの設定。武器は鉄もり。

「……と、言う訳だ」

説明し終えた侑治郎は、コップに入つていたジュースを一気にあおつた。

「へえー、ほうほうほう」

感心した風でうんうん頷いてはいるが、あんまり分かつてない爽奈。

「熊が喋るとか浦島太郎の武器が鉄とか、ちょっと分からぬ部分もあるけど、良いわね」

紗弥菜は、機嫌が良さそうに手を細め、用意してあつたノートに侑治郎の案を書いている。どうやら、出た案を片つ端からメモして、後から使えるものを拾つてこいつとしているらしい。

対して侑治郎は、苦笑しながら答える。

「熊が喋るのはバイクショーンだから、別にいいだろうと思って。武器が鉄なのは、浦島太郎が漁師だった説から何かないかなー、と思つたら、それが出てきただけだ」

合点がいった紗弥菜は、ますます機嫌を良くしたらしく、何度も首肯する。

「ああ、そう言われてみればそつだつたわ。流石に武器が釣竿じや」

滑稽過ぎるものね

「そういうことだ」

侑治郎が満足そうに言った。

「それにもしても、侑さんとさやちちゃんはよく知ってるね。私なんかさっぱりだよ」

頬を人差し指で搔きつつ、己を恥じる真優。

「そうねえ。普通は浦島太郎の漁師説なんか知らないもの。2人とも本を読んでるだけのことあるわあ」

成佳が侑治郎のコップにジュースを満たしながら、恵比須顔で紗弥菜と侑治郎を褒め称える。

侑治郎は面映そうに頭を搔いているが、紗弥菜はにこっと微笑んで見せた。どうやら、侑治郎の出した案を自分なりにまとめていて、話すと忘れてしまうみたいだ。

しばらく2人は喋らなそだ、と思つた爽奈は、よつやく理解したのか嬉々として発言する。

「他に意見ある人 つ？」

ぴつとまっすぐに成佳が拳手する。

「僭越ながら私が言つてもいいかしら？」

「どうぞどうぞ！ 何でもいいんだよ！」

じゃあ、と成佳が自分の案を滔々と語り出した。

その突拍子もない一言に、みな口をぽかんと開けたまま口にでもなつたかのように、固まつた。

思案に暮れているのか、それとも呆れて声も出ないのか、沈黙が少時続いた。

その間言つた本人は、空気を変えたことなど気にしていないらしく、恵比須顔のまま返答を待つてゐるのだから、ある意味大したものだつた。

一通り案を出し終えて、大方まとめた頃には陽もとつぶりと暮れ、外は外灯が白々と灯つていた。

脚本は結局紗弥菜が書くことになった。他の4人が、小説や脚本を書いたことがないから、という何とも簡単な人選である。

部屋の主の成佳は、今更であるがベッドに上がつてカーテンを閉めつつ、半身を4人の方に向けてにっこりと笑う。

「今日は遅くなつたし、みんな食べていつて。私のせいでもあるから」

耳をうさぎのようにぴくつかせて聞いた爽奈は、眼を爛々と光らせ、両手を拳にして立ち上がる。

「まじっすか！？ で、メニューは何！？」

「特に爽奈ちゃんが大好きーなカレーよ。短時間だけど、1日寝かせたような「クがあるものを作つてあげるわ」

「やつた つ！ なるさん、大大大だーい好き！」

成佳をベッドに押し倒す調子で抱きつく爽奈。

ちゃつかり抱きついた本人曰く、愛の籠つた大きな胸を揉みたい放題揉んでいる。

「ふふふふ。爽奈ちゃん、赤ちゃんみたい」

ひしと胸に抱き寄せた爽奈を、慈しみの籠つた眼で見入る成佳。

注文に応えたのか爽奈は、瞳を潤ませて親指を甘く噛んで、上目遣いで成佳を見澄ました。

「あらあら、ますます可愛いわあ」

そう言うや、爽奈の匂いを堪能しようと顔をうなじに近づけた。

一連の行為を黙視していた紗弥菜は、テーブルを荒々しく叩いて立ち上がつた。

「こらつ、爽奈！ いつまで胸を揉んでるの！ いい加減離れなさい！ 成佳も色々と自重しなさい！ ちょっと真優！ 何であんたは指をくわえて見てるの！ セめて侑治郎が居ない時にさせてもらいいなさい！ 侑治郎、あんたはいい加減慣れなさいよ！ 日常茶飯事の範疇を超えているんだから！」

怒りに任せて一気に言い切つた紗弥菜は、頭に血が上り過ぎて立ちくらみを覚えたものの、辛うじて耐えた。

「えー、何でー。そんなこと言つたら、あんたの乳を揉んでもいいの？」

爽奈は、納得のいかない表情で文句をぶうたれる。

「へ？ ……べ、別にいいわよ。ただし、侑治郎が居ない時だけなんだからねつ！」

余程恥ずかしいのだろう。紗弥菜は、顔から火が出そうなぐらい真っ赤にして無理矢理怒り、眼鏡のブリッジを指で押し上げる。

「おお、まじかね。そんじゃ、今夜辺りあんたの部屋に忍び込んでやうつかねえ」

まるで魔法使いの老女みたく、最後にはひつひつひと歯を見せて笑う爽奈。

「いいわよ。揉めるもんなら揉んでみなをこよー。受けて立つわ！」

「こじまできたら、とことん吹っ掛けることで、爽奈を負かすしか考えていられないらしい。それが、本心を告げてるよつとも聞こえてきた。

侑治郎が苦言を呈する。

「あのさあ、せめて俺が居ない時にそういう話をしてくれないか。

一応、俺も健全な20代の野郎だしさ……」

「そうだよ。これじや、侑さんが女の子みたいだよ」

「は？」

真優の訳の分からぬい言に、爽奈と紗弥菜と侑治郎は、首をかしげた。

「あうう……」

突っ込みを入れるつもりが、なぜかボケみたいなことを言つてしまつたのだろう。頭の思考回路が混乱と言う爆弾に爆碎され、ごちやごちやになつた真優は、続きを言えなくしました。

「つまり私達は、性的で且つ下品なことを言つ中学校か高校生くらいの男子みたいで。侑治郎さんは、そんな真つ只中で聞くに堪えない話を、聞かされているつぶな女子つてことなんでしょう？」

成佳は、真優の意図を斟酌した。

「そう！ それを言いたかったの。ありがとう、なるちやん  
手を叩いて喜ぶ真優に、成佳は笑みを向けつつ言つ。

「いえいえ、どう致しまして」

「そうだったわね……。悪いわね侑治郎。下品過ぎたことを一応謝つておくわ」

自分でも過ぎたことを言つたと思つたらしい。紗弥菜は頭を下げて素直に謝罪する。

「いやいや、いいんだ。俺のことは。それより、成佳のカレーが食べたいな。もう、さつきから腹が鳴りっぱなしでさ」

「あ、そうでしたね。爽奈ちゃんごめん、私離れるね」

「え つ。でも、カレーを作つてくれるなら、許してあげるよ」

「ありがとう。とびつきり美味しいカレーを作つてあげるからねえ」

成佳がベッドから降りて、侑治郎を誘い台所へ向かう。

その様子を見ながら、何気無く爽奈は枕の下をまさぐつた。すると、くしゃ という紙が手に当たる音がした。

（何だこれ？）

引っ掴んで出してみると、白い封筒だつた。切手は既に貼られているが、宛先や郵便番号などはまだ書かれていない。逆さまにして中身を出すと、一枚の紙とメモリースティックが出てきた。紙には学歴や長所や特技を書く欄があつた。長所や特技の欄はびつちりと細かい字で埋められている。

「なるべーん、これ何？ どつかにバイトでも申し込むのー？」

成佳が爽奈の方をちらつと眼を向けた。その瞬間、動作は勿論のこと心臓や脳の動きが、止まらんばかりに仰天した。

「おい、大丈夫か」

隣で包丁の角でじやがいもの芽を取つていた侑治郎が、心配そうに声をかけた為に、少しあらぬ方向に飛んでいた意識が戻つた成佳。

「うん、大丈夫です」

そう言つと、爽奈の眼をじつと見つめて、

「まあ、そんなところだよ～」

至つていつもの調子で返答した。

「ふうん……ま、いつか」

爽奈は、履歴書とメモリースティックを封筒に入れて、枕の上に置いた。そして、テレビを観ていた真優に抱きつく。

紗弥菜が目ざとく見つけて、眼を三角にする。

「こらっ、爽奈！ またあんたは……！」

この時、まさか後々の運命を変えることにならうとは誰も思いもしなかつた。それよりも、完成が待ち遠しいカレーのことで頭が一杯だったのである。

## 15章……紗弥菜の告白

「えー、『仮面戦隊アヤシンジャー』の主人公の必殺技は、”轟旋風・一刀両断”でしょー？」

「違う違う。それはラスボスに使った1度きりの技だ。……と言つかそんなに観てないとか言つてた癖に、1回使つた技を憶えてるな」「ふつふつふつふー、第1話と最終回はきちっと観るからね。その辺は抜かりがないのだよ。あとは適当だけどねー」

「おいおい、そりやないだろ。せめて何話か続けて観ろつて」

「そうは思つてもさー、大体朝早くて起きれないもん。あ、録画しろつたつて無駄だよ。消したくないアニメが沢山詰まつてるし」

「ああ、そうかい……」

「で、必殺技は何なのさ」

「あ、そうだな。それはだな、こうやってしゃがみながら柄に手を掛け、抜刀しながら”轟旋風・斬切”、と、言つやつだ」

「へえー、格好いいじゃん！ 他には？ 他にはないの！？」

「いきなりテンションが上がつたな……。ま、あるつちやあるぞ。

「こうやって構えてだな……」

10月1日から執筆を開始した脚本は、規定の1週間で仕上がり、その翌日はひとまず読み合わせ、そのまた翌日から稽古を始めた。

因みに衣装は、卒業生が作ったものの借り物である。何回も使いまわされているせいか、ほつれや汚れが酷かつた。しかし、いちから自作してたら、それこそ劇の本番で醜態を晒しかねないので、借りられるだけの衣装を借り、過不足分やほつれなどは真優と成佳が製作・修繕することで帰着した。

『桃太郎』を劇に使おうとしていた班が他にも2つあつたが、1つの班は何を迷つたか『笠地蔵』に変更した。本家の『笠地蔵』は地蔵が7体。おじいさんとおばあさん役で2人抜けるとしても、3

体しか居ないことになる。まあ、異説があつて3体という地方があるらしい。それにそんなことは、園児達にとっては些末なことであり、教師も特に何も言わないから問題ないらしいが。

もう一方の班は正史の『桃太郎』を行うそ�だ。その為に、衣装の争奪戦が繰り広げられると思ひきや、過去にも何班が被つて劇でやつたそうで、何着も衣装室に眠つていた。だが、比較的新しい方はさつさと持つていたらしく、爽奈達が取りに行つた時には古びたのしか残つていなかつた。

腹は立てども後の祭である。先に述べたよつに、器用な真優と成佳が修繕できる部分は修繕していた。

この日は2時間限定で体育館のステージを使えることになつた。時間制限つきなのは、他の班も使用するからである。担任はこうじつところには頭が回るらしく、班ごとに使える曜日や時間など、大雑把に振り分けたプリントが、泣き落としを使った翌日に配られた。因みにこの時ばかりは、程好く振り分けられていたので不満は出なかつたという。

体育館に成佳と真優が談笑しながら、入つて來た。2人の両手には、お菓子やジュースなどが入つた袋を持つてゐる。

真優は、ステージに上がる際に使う階段で、腰を下ろしてゐる紗弥菜を発見。駆け寄つて両手を挙げて見せた。

「ただいま。さやつちゃん、一人でどうしたの？」

「おかえり。台本のチェック中。あと、あいつらが何話してんだかわつぱりで、ここに居たの」

ちらり、と紗弥菜は、はしゃいでいる爽奈と侑治郎の姿を流し見る。何処か複雑な表情を面に浮かべながら。

「それに、何かは分からぬけど、いらいらするのよ。……あ、決してあいつらのことが本当に大嫌いって訳じゃないのよつ。む……むしろ、好きだし……。で、でも、なぜかいらいらするの。ああやつて仲良く話していると、特に……」

真優は、かけている眼鏡みたく目を丸くした。

「ええつ？ や、ややつちゃん。それって……恋じゃないの……？」

釣られて紗弥菜の目も丸くなる。手にしている台本を落としそつになるほどだ。

「……恋！？ そ、そんな訳ないと思つけど……こんな気持ちになるものなのかな？」

額に手を当てて顔を隠すようにしてうつむく。紗弥菜自身、しばらくは縁もなさそうな話だと思っていたからだ。

「私にもよく分かんないけど、多分そうだと思つよ。……本で得た知識だけど」

真優は慌てて付け加えるが、時既に遅く。紗弥菜の耳には真優の声が入らず、長考の海に沈みかけたその時。

紗弥菜と真優の会話の途切れた頃合を見計らつて、絶やす「」とのない笑みを珍しく潜ませ、成佳が切り出した。

「こんな時にいきなり訊くのは、如何なものかと思うんだけど……。紗弥菜ちゃん。貴女、爽奈ちゃんにキスをしなかつた？」

平坦な口調だった。成佳は別に喜怒哀楽は顔に出していしない。ただ、訊きたいこと訊いただけらしい。

びくつと体を一度震わせただけで、顔を上げようとしない紗弥菜。長い髪が前に垂れてきて顔の側面を覆い隠し、真正面以外からでは窺い知ることができない。

「ええつ」

「ごめん！」

「むぐうつ」

仰天して大声を挙げようとした真優の口を、成佳は割りと強めに掌で塞ぐ。

「それはつ……そのつ……」

いつの間にか顔を上げていた紗弥菜。突然のことで、適切な言葉がなかなか出てこない。その代わりに、頬が徐々に赤々と染め上げられていく。

紗弥菜が抱いているであろう懸念を振り払つてやるように、成佳

は優しく推察を述べる。

「紗弥菜ちゃん、大丈夫よ。そういう意味でしたんじゃないということは、よく分かっているから。おそらく、お粥を口移しで食べさせてあげたのよね」

はつとした顔でゆつくりと顎を引き寄せる紗弥菜。

「そ、そうね。その通りだわ……。でも、どうして分かったの？」

面を笑顔でふんだんに彩らせる成佳。

「紗弥菜ちゃんの唇に、ちっちゃいご飯粒がくつ付いていたからよ。だから、もしかしてと思って」

「あー、なるほどね……」

納得して首肯した紗弥菜。

普段の表情に戻っているのだが、何処か成佳に對して構えている話し振りだった。

それを敏感に察知した成佳は、ひとまず掌で口を押さえていた真優を開放し、詫びを入れつつ紗弥菜の前にしゃがんだ。咳払いの代わりに、ひとつ微笑みを挿んでから発し始める。

「あのね、紗弥菜ちゃん。私は何も咎めようとして言つたんじゃないわ。ただ、その時どんな感情があつたか知りたいだけなのよ。差支えがなければ、それで紗弥菜ちゃんのもやもやが晴れるなら、私達にだけでも聞かせてもらいたいの」

ねつ、と謝罪の念を含ませた眼で涙目の真優を振り仰ぐ。

「うん。私も聞きたいな~」

真優は涙をハンカチで拭きながら、紗弥菜の眼を直視してにこりと笑つた。

もう、胸の中に閉じ込めておくのは限界だった。紗弥菜の胸の内は、懸念が渦巻いていた。脳内では、はたして言つても大丈夫なのだろうか、信じて理解してくれるのだろうか。そんな思いが無尽蔵に湧いてきていた。しかし、眼前の友人達の優しく暖かな眼を見ていると、本音と事實を打ち明けてもいい、と言う気持ちがだんだん生じてきた。そう思うと意識せずとも、面輪おもわに笑みがこぼれた。

「分かつた。話すわ。口移しをする時は、嘘偽りなしで爽奈のこと率直に可愛いと思つた。けれど多分、成佳が思つてゐるであろう、私もよく知らないんだけど”百合”の世界とは関係ないと思つ。その……情欲を搔き立てられるとか、キスし続けたいとは思わなかつた。何より爽奈や侑治郎を含めて4人は友人以上、もしくは家族かきょうだいだと私は思つてゐるからね」

そこまで言つと、唾をぐくりと飲んだ。どうやら、喉が渇いているらしい。

真優は、袋を漁つて500㎖タイプのお茶を取り出し、紗弥菜に手渡した。

紗弥菜は礼を言いつつ、半分ほど飲み干した。キャップを締めて傍らに置き、話を再開した。

「ここから先は誰にも言つたことがないんだけど、2人だから話すわ。私には妹が居た。名前は紗弥香。紗弥は同じ漢字で「か」は香るの香。歳は5歳違い。シスコンだと思われるけど、凄く可愛い妹だった。生意氣で威勢がよくて、屁理屈は1人前にこねるのが上手で……。でも、誰に対しても差別なく接していく、いじめが大嫌いの正義感の塊で融通が利かなかつたけど、それでも良い子だつた。口喧嘩も取つ組み合いの喧嘩も沢山したけど、仲は良かつた。だけど……」

だんだん紗弥菜の表情に翳り<sup>かげ</sup>が浮かんできた。

「妹が10歳の時、体育で100メートル走をゴールした瞬間に倒れて、そのまま死んでしまつたの。原因は分からないんだけどお医者さんは、急性心筋梗塞で片付けてしまつたわ。私は当時中学3年生だったけど、わんわん泣いたわ。通夜の時も葬式の時も出棺する時も。家族のみんなは、しばらく経つて元通りになつたけど、私は沈んだままだつた。高校に行つてもショックを引きずつついて性格も暗く、積極的に交流を図るうともしなかつたから友達なんか1人もできなかつた。ほとんど一日中紗弥香のことを考えていた。高校3年生になつて進路をどうするんだと言われた時、一応小学生ぐら

いの頃から抱いていた夢があつて、とりあえずそれにすることにした。幸い成績は良かつたから、早々に進路を決めることができた。高校を卒業して、資格を取る目的だけに、ここに来た。友達も高校の時同様に作らない気でいた。ところが、驚くほど紗弥香に似た女子が居た。その女子には悪いことをしたと、今でも思うわ。なんせ、開口一番大声で「紗弥香！」って言いながら、抱きついてしまつたからね。しかも泣き始める始末で。幸い、周りに人が居なくて良かったけど、当人もかなり困惑してたわ」

苦笑いしながら、お茶をあおる。

成佳が勘を働かせ、間隙をつくように質問する。

「もしかして、爽奈ちゃんのこと？」

意想外なことに耳を疑う紗弥菜。

「あれ？ あいつから聞いてなかつたの？ 以外ね。そう、如何にもあいつ 爽奈のことよ。最初は成佳と真優みたにに和氣藹々（わきあいあい）やつてたけど、3日も経つたら、あいつの本性を知つて呆れたものよ。私も最初は大人しくしてたけど、だんだん我慢ならないことは言つようになつたしね。しょっちゅう口喧嘩をしたわ。そうであつても話は合つし、何だかんだで面白い奴だから、付き合つてたけどね。あと、紗弥香に似ていたせいか危なつかしいから、ほつておけなかつたし。で、そういうしているうちに成佳と真優が加わつて、今の関係が形成された訳なのよ」

一旦句切つて、また翳りを帶びた表情になつていく。

「だけど、最近になつて……よく爽奈と紗弥香がダブつて見えるようになつた。私は、その都度接し方に困つてしまつ。ダブつて見える時は声や言つてることまでが、まるで紗弥香が言つてるように聞こえるの。その時は『紗弥香！』って叫んで抱きしめてあげたい。でも、できないもどかしさ……。だつてそんなことをしたら、爽奈を困らせてしまう。何も知らない爽奈を、巻き込みたくないのはやまやまだけど、衝動を抑えきれなくなつたらを考えると……。その葛藤が、今の私の中にあるの。本当、どうしたらしいのか……」

言い終わるや、頭を抱え込んでしまった。

「紗弥菜ちゃんは、本当に悩んでたのね……。妹さんと重なつて見える、か……」

成佳は居た堪れなくなつたが、同時に何とかして紗弥菜の問題を解決してあげたいと思い始めていた。断腸の思いを隠そつともせず、天井を向いておもんばかりだした。

真優はと言つと、紗弥菜の話があまりにも悲しく、しゃがんで顔を伏せてしまい、解決策を思案できる状態じゃなかつた。しばし、3人の間に静寂が生まれた。相変わらず、ステージの上では爽奈と侑治郎の2人が全然飽きもせずに馬鹿騒ぎを続けている。「この話を、爽奈ちゃんと侑治郎さんにもしてあげた方がいいと思うんだけど。……どうかな？」

まだ胸を圧された気分なのだろう、憂いを含んだ思案顔をしつつ、成佳は窺うように紗弥菜を見つめる。

少時無言のままの紗弥菜だつたが、幽愁ゆうしゆうを漂わせつつ、顔を緩やかに上げて頷いた。

「そうね。紗弥香のことはいづれ折を見て爽奈と侑治郎にも話そうと思つていたし……」

「分かつた。私が呼びに言つてくるわね」  
ふつと笑い、成佳が承諾した。

紗弥菜は、爽奈と侑治郎にも紗弥香のことを話した。

2人は驚いたり、悲しそうな顔をしたりと急がしそうに表情を変えていた。最終的に、侑治郎は傷心を顔に浮かべていたが、爽奈はうーんと難しそうに眉間に皺を寄せた。やがて、あつと声を放つた。

「そういうや、そんなこともあつたねー。あん時は驚いたよ。でも、みんなに話さなかつたのは、どこかで言つちゃ駄目だなーって意識があつたから。だつて、あん時の紗弥菜の行為は本物だつたもん。演技であそこまで泣けつて言われても、わんわん泣けないしね」  
懐かしそうに言つて、ふふ、と小さく笑つた。そして、反論しな

い紗弥菜に眼を合わせる。

「こんな私でよければ、その見える時だけ？ できる限り紗弥香ちゃんのように振舞うよ。あんたは命の恩人だしさ、いつかは恩を返そうと思つてたし。だからさ、元氣出しなつて。

んー、そんなに似ているんだつたら、会いたかつたなー。紗弥香ちゃんかー……」

紗弥菜の真ん前にしゃがみ、同じ田の畠になつたといひで、満面に笑顔を閃かせる。

「にしても、前々からそつだつたんなら、早く言つてくれれば良かつたのに。私とあんたは会えば喧嘩ばつかしてると、友達は友達じゃん。あ、付き合いが長いからそれ以上か。何でも胸の中にしまつてちや苦しいだけだよ。今度からはある程度出していくこと。分かつた？」

嬉しさが胸に満ち溢れ、許容できなくなつたのか思いがけず瞳が潤む。紗弥菜は、こくつと首肯して唇を引き結び、泣くまいと耐える姿勢に入った。

しかし、

「…………」

爽奈が卒然、紗弥菜の両頬をつまむと、痛くない按配で引っ張り出した。

あつと詰つ間のことに、成佳と侑治郎は凍りついた。田が点になり、口は半開きで微動だにしない。

これに紗弥菜は、反射的にかちんときた。良いこと言つたと思えば、やつぱり無神経な奴なのか。憤然として、それでも爽奈の頬を同じ力加減でつまんで引っ張る。

「何すんのよ！」

すると途端に、紗弥菜の頬からぱっと手が放された。紗弥菜は意図が掴めず困惑する。頬の掴む手の力が緩む。

「うん！ それでこそ紗弥菜だ！ 流石私が認めた眼鏡つ娘だけあるわ」

最後の一言は明らかに余計だったと思えるが、爽奈は気にしない。素早く立ち上がるや、振り向いて声も高らかに呼びかける。

「さあ、湿っぽい空気はこの辺にして稽古をしようよ！」

「おお、湯木ほいが寝ぼけの邊にして稽古をしよがよ！ あと1回  
間ぐらいいしかないんだからわー、もー、まゆつちもいつまでも泣い  
てないで早く立つー！」

真優にすかすか歩み寄つて、手を引っ張る爽奈。

「だ、だつて……せやつちゃんが可哀相で……」

真優は、手の甲でとめどなく流れる涙を拭いて

「その話はもう終わったのー。ほら、これで顔を拭いてステージの上に行くー！ 侑治郎もなるさんもほりほり

卷之三

「あ、ああ」

「そ、そうね。始めましょうか」

2人も我を取り戻し、ステージに向かう。

גְּדוּלָה

きひすを返す。紗弥菜はまだ迷惑している様子だった。

なるよ

「頃」わね。今ストレージに「アーティスト」と「アーティスト」の二つ

「隣の女は、役に集井で地ぬがいに意識を集めねやうに、ただナよ

1

その場で口喧嘩が切つて下ろされた。

そんな爽奈と紗弥菜を他の3人は、二者二様の面持ちで、しばし仲裁にも入らず眺めていた。

いよいよ文化祭当日となつた。

各自の練習の成果を披露する日がやつてきたのである。

1年生の出し物である合唱が終わる頃には、体育館の中が複数の幼稚園児や保育園児、その保護者・教諭（保育士）、毎年楽しみにやつてくる周囲の住民で埋め尽くされるほどまでになつていた。

そして、先ほどから2年生の出し物である劇が始まった。既にステージ上で演じている者は、大方棒読みやたどたどしい動きは目立つが、それでも一生懸命やつている。

一方、ステージの袖で待機している側の生徒達にとっては、緊張しそぎて永遠一步手前まで魂を持つていかれそうな者がそこかしこに居た。他にも、腹を据えて黙然としている者やぶつぶつと唇のうちに台詞を唱えている者やうろちゅうと動き回っている者など、大半の生徒は緊張を隠しきれないようだ。

今はまだ少數ながら演じ終えた者達は、開放感と達成感に包まれていた。重圧に押し潰されることもなく、膨大な台詞をそらんじることもなく、何も考えなくていいのだ。台詞など終わつた瞬間に忘れ去り、今はただただ菩薩のようになんか優しい顔で安息し、他班の劇の様子をいち観客として観ていい。中には台詞や動作を間違えたことを気にして、落ち込んでいる者も居たが。

爽奈達は待機している側である。もつとも、今演じている班が終われば、次に演じねばならないのだが。それゆえにそれぞれがそれぞれに緊張している。

爽奈は意味もなく動き回り、紗弥菜は台本を睨みつつぶやいていて、真優は緊張と重圧に飲まれて泣きそうだ。それを成佳が胸の内に抱きしめて「大丈夫、大丈夫」と諭しながら、頭を撫で続けている。侑治郎はと言えば、反対側で待機していた。座禅を組んで緊張を押し殺そうとしているみついた。

「……とせ。めでたし、めでたし」

「どうやら、前の班が終わつたらしい。割れんばかりの拍手が巻き起こり、交わるよう園児達の甲走つた声も体育館中に響き渡つた。演じていた生徒達は、中央に寄り集まつて左右中央を順繰りに向いて一礼し、袖に退いて行く。待機している生徒達の手によつて幔幕がさつと横走り、組んでいた簡易なセットや小道具が片付けられ、新たにセットが手早く配置されていく。

そんな様子を目の端に入れつつ、爽奈は右手を前方びんと伸ばして、そのままへその前まで下ろした。

「さあ、いよいよ本番だよ！ みんなも手を置いた置いた」

言われるがまま特に抵抗することもなく、3人が手を置いた。

首を侑治郎の方に向け、爽奈は命ずる。

「侑治郎は、そこでタイミングを見計らつて下りすこと…」

「お、おう！」

侑治郎だけ1人で寂しい状況だが、時間もあまりないし、致し方なかつた。もしも、爽奈達の所に行き来する時に幔幕が開いたら、それだけでもう台無しである。それだけ重要な役を与えられているらしい。

「よーし、頑張つていこ つー」

「お、お つー！」

何とか頃合を合わせて手を下ろし終えた4人は、微々たるものではあるが落ち着きを取り戻せた。侑治郎の場合は、その後に猛烈な恥ずかしさが襲つてきたみたいで、うつむいてしまつたが。

その時、進行役の生徒が朗々と告げた。

「次は1組5班で『少し変わつたももたるひ』です。どうぞお楽しみ下さい」

「むかーし、むかし、ある所におじいさんとおばあさんが……」  
「いよいよ爽奈達の劇が始まつた。おじいさん役は真優、おばあさん役は成佳の役柄だ。

序盤は何ら変わらない至つて普通の桃太郎。おじいさんが山に芝刈りに行って、おばあさんが川に洗濯に行つたら、通常ではない大きさの桃がどんぶら（り）じどんぶら（り）こと流れて来て、それを老人の細腕で持ち帰つて包丁で一刀両断したら、中から可愛らしい赤ちゃんが入つており、桃から生まれたから「桃太郎」と名づけたところまで一緒である。

因みに、赤ちゃんは本物を借りられた訳なかつたので、人形で代役したらしい。

心身ともに成長し、今ではすっかり村1番の働き者で且つ見かけによらず力持ちの桃太郎 担当は爽奈 が、ある日突然、「おじいさん、おばあさん。近頃、鬼達が悪さをして、人々を苦しめているそうです。僕は、そんな鬼達を許しておけなくなりました。ここはひとつ、世の為人の為にも鬼退治をしに鬼ヶ島に行きたいのですが、許してはもらえないでしようか」

おじいさん 真優 が瞠目する。

「何と、そのような志があつたとは……。桃太郎、お前も立派に成長したのつ。わしは嬉しいぞ。ばあさんや、よよよと泣いてないで、<sup>きび</sup>黍団子を作つてやりなさい」

真優の場合、化粧とかつらで風采は何とかおじいさんぼく見えるものの、声は変えなければ作らずそのまんま地声である。なので、妙に幼い声を出すおじいさん、と言う可愛いんだか気持ち悪いんだかよく分からぬことになつていた。因みに、眼鏡はフィクションと爽奈の強い希望でかけたまである。

おばあさん 成佳 は、袖で目を隠しつつ立ち上がる。

「そうですね。桃太郎は12歳になつたし、男の子はいつか旅に出るのであるのね。待つてなさい、どびつきり力がつく黍団子をこしらえてあげますからね」

比して成佳は、見事に老婆の声を作つて演じていた。因みに、成佳の場合は髪が長すぎた為に、かつらはつけていない。ただ単に、髪を後ろにやつて服の中に入れただけである。他の部分はそのまま

であるが、白髪に見えるように髪に多少の着色は施してあった。なお、化粧はきちんと老婆に見えるようにされてある。

深々と頭を下げる桃太郎。

「ありがとうございます」

爽奈は化粧なしでかつらなしである。しかも声も変えていない。何ぶん12歳という年齢設定で、声変わりするかしないかの微妙な時期であるから、声は高くても問題ない。顔も第一次成長期を終えても童顔の男など、いくらでも居るものである。髪形は題名を『少し変わったももたろう』にしたので、無理にちよんまげにこだわる必要はない、とのことで、変更なしとなつた。

桃太郎は、日の丸の鉢巻を額にぎゅっと締め、陣羽織を羽織る。背負う幟は大きく「桃太郎」と書してある。腰に刀を差し、反対側には袴団子が吊り下がつており、手には風呂敷を持っていた。

「それでは、行つて参ります」

「うむ。達者でな。道中気をつけるのじやぞ。これ、ばあさんも泣いてないで、ちゃんと見送らんか」

おばあさんは桃太郎の手を握り、よよと泣き続ける。「無事に……無事に帰つて来るのですよ」

顔筋を緩め、力強く握り返す桃太郎。

「ええ、勿論。村一番の力持ちの僕が、鬼なんかに負けませんよ」おばあさんの手を名残惜しそうに離し、背を向けて歩き出した。「ひつして鬼ヶ島へと旅立つた桃太郎。彼の行く先にどんなことが起つくるのやら」

語り手の一言を挟み、一旦照明が落ちる。セットの変更と出番を終えた出演者が一旦退く為だ。電光石火の早業でたちまち次の場面のセットが構築され、ぱつと照明が再度点灯した。

先ほどと代わつて草や地蔵などを置いた道端のセットである。

袖から桃太郎が、少し疲れた顔をして出てきた。

「ふう、結構歩いたなあ……。おや、あそこで美味しそうにおにぎりを頬張っている人が居るぞ。僕も『』一緒にさせてもらおうかな。す

いま」

桃太郎がおにぎりを喰らつてゐる人物を呼ぼうとした時、その人物は息苦しげな声を一つ言つたと思つや、どんどんと胸元を叩き始めた。

「た、大変だ！ 水をあげないと！」

風呂敷から竹筒を引っ張り出して、急いで駆け寄つて手渡す。

彼は、ごくりごくりと喉を鳴らして、飲み干した。

「ふはーっ……ふうー、死ぬかと思つた。坊ちゃんありがとうよ！ おかげで助かつたわ！」

大笑いをしながら、ぐしゃぐしゃと桃太郎の頭撫でる。

「い、痛いです……」

痛ましげな眼で桃太郎は、少しばかり背の高い男を見る。

彼は、苦笑しながら手を放す。ふと、視線が幟に釘付けになつた。「ああ、悪い悪い。それにしても、何だ。えらく物々しい格好をしているじゃねえか。怪物でも退治しに行くのか？ なーんて、そんな訳ないよなー」

あらん限りの声で笑い飛ばす男に、桃太郎は何ごとかを言い辛そくに眼を伏せる。

しばらく好き勝手に笑つてゐたが、眼を伏せて何も反論してこない桃太郎を不審に思つた彼は、次第に表情を元に戻して行く。

「も、もしかして……本氣で退治しに行くのか？」

「そ、そうです……」

視線を合わせようともせず、蚊の鳴くような肯定が聞こえた。

「す、すまん。そんなつもりじゃなかつたんだ。許してくれ。これ、この通りだ」

彼はかぶりを下げる、掌を併せて前に突き出す。

驚いた桃太郎は、慌てて首を左右に振つた。

「いやいや、謝ることないですよ。普通なら考えられませんからね。貴方の仰るどおりです。僕は今から鬼ヶ島に、鬼退治をしに行こうとしてたところなんです」

最後の方は、真剣味を帯びていて意志の強さが伝わってくるほどの一言だった。

下がたかぶりをバネ仕掛けのように、元の高さに戻し、鳩が豆鉄砲を喰らつたような顔を桃太郎に向ける。

「何つ、君も鬼ヶ島へ！？ 奇遇だなー、実は俺も行こうとしてたところなんだよ！」

「えーっ！？ ジャ、じゃあ……もしかして、貴方は鬼の子分だつたりするんですか？」

突拍子もないボケのみみたいな問いに、男がその場でずつこける。体を起こしつつ、

「ちっがーう！ そんな訳ないだろ！ この金太郎が鬼の仲間なんかじゃないわっ！ それに、俺は、れっきとした人間だ！」

なぜか腕を広げて見せた。意味は特にないのだろう。とりあえず、何も害悪がないことを証明したかつたらしい。

因みに、金太郎役は真優である。物語の関係上、1人2役は致し方ないことだった。おじいさんの化粧を急いで落とし、かつらも取つて髪もそのまま。普段どおりで演じている。金太郎と言えば菱形の腰掛けなのだが、成長して青年期の男にそれは酷だろうということで、やむなく赤地に黄金色で「金」と書かれた手ぬぐいを頭に巻くことになった。服装は、一応時代に合つた平服を纏つている。流石に眼鏡は外し、コンタクトレンズを急いで入れた。爽奈は不服そうだったが、こればっかりはしようがなかつた。どうしても、金太郎は活発な印象が強く、眼鏡をかけている姿は想像できなかつたからだ。

相変わらず声もそのまんまである。声変わり後の15歳頃の設定だが、容赦無く。もつとも、稀に声変わりをしない男も世の中に居るらしいから、寛容な心で観れば何ら問題はないと思われる。

本来なら一人称が俺に男っぽい口調で、野郎要素満載の金太郎であるべきである。だが、明らかに一個も当てはまらない真優が演じることによって、新しい金太郎像が作り出されていると言つても過

言ではないだろ？。

当の真優は、顔を熟したトマトのよつにまつかつかにし、ほぼやけくそで演じているのだが、誰一人して気づかない。むしろ一生懸命さが伝わり、受け入れられている現状であった。

金太郎 真優 は、ここに来た経緯を話し始めた。

何千試合に及ぶ熊との戦いで、ある日突然熊に「お前は誰かに仕えて、世に名を轟かすべきだ」と冗談交じり言われ、翌日から相模（現神奈川県）から出て全国を仕官先探し兼武者修行中だったとのこと。

「だから、俺はあんたに仕えるぜ！ 命の恩人だし、旅は道連れ、世は情けってやつだ。と言う訳で宜しくな！ ……えーっと……名前は？」

「あつ、も、桃太郎です……」

「おあつ、同じ太郎か！ ますます氣に入つたあつ！ これからは桃太郎さんと呼ばせてもらうぜ！」

「は、はい。宜しくお願ひします」

急展開に頭がこんがらがりそうな桃太郎は、肩を叩いて喜んでいる金太郎に合わせて笑い浮かべながら、叩頭した。

ここで一旦照明が落ち、出演者とセットが行き交つた。ぱあつと照明が点くと、今度は海（に見立てた青く塗つた大洋紙）や砂などを置いた海辺のセットである。

袖から金太郎が喜び勇んで出てくる。

「いやつほう！ 砂浜だ！ 海だ つ！」

飛び回っている金太郎によく追いついたとばかりに、息を切らして苦しそうな様子の桃太郎。

「金太郎さん、早いですよ……」

はあはあと苦悶に顔を歪め、喘いでいる桃太郎に近付き、金太郎は肩をばんばん叩きつつ大笑する。

「おいおい、桃太郎さんよ。俺よりも若いんだから、しつかりしましょうぜ」

「そんなこと言われても……げほつ、『ほつ』

むせ返っている桃太郎を後目に、金太郎は鉢を持って反対の袖へと去つて行く。

「そこの君、ちょっとといいかな

「はい？」

声がする方を振り返ると、そこには忽然として長身の男が小脇に箱と矢のようなものを抱えて立つていた。

「ふえつ……」

動悸が止まりかけた桃太郎は、胸に手を当てて眼を大きく見開いた。

男が対照的に悠然とした態で口元を緩め、桃太郎の顔を覗き込む。

「ふふふ、驚いた？ 僕の名前は浦島太郎。君の名は何ていうんだい？」

「ぼ、僕の名前は……桃太郎です」

「ほう、桃太郎くんか。良い名だ。こんな所で何をしているのかな？ あそこで騒いでいる友達と遊びに来たのかい？」

「いえ、目ぼしい船を探しているんです。鬼ヶ島に行きたいので

「鬼ヶ島だつて！？」

浦島太郎は、まるで脳天に一撃を喰らつたような気がした。

そう言えば、浦島太郎の役は紗弥菜である。本人はやりたくないと固辞していたが、じゃんけんで負けた結果がこうだつた。しかし、やるからには紗弥菜は結構真剣だつた。なるべく低く安定した声を出せるように、成佳に教えを請い、作り上げていた。演技も自分なりに練習し、男役を演じるのに豊満な胸は邪魔になると、胸に晒しきつと巻きつけて目立たなくするなど、意気込みは人1倍あると思われる。しかしかつらは被らず、自慢の背に流している黒髪は後ろで束ねるにだけに留め、前髪は爽奈達と同様に手ぬぐいを巻いている。眼鏡もかけたままで、おおよそ時代考証がずれてしまつてゐるが、これには理由があつた。紗弥菜は、コンタクトレンズに強い抵抗を持ち、眼に入れることができなかつたのだ。それと、爽奈の熱望があつたからと容易に推測できる。なお、服装は野良着のような旧いものである。

浦島太郎 紗弥菜 がここに来た経過を語り出した。

竜宮城から持ち帰つた玉手箱に鍵が掛かつており「開けたいのなら、鬼ヶ島の鬼を倒さなければならない」と、帰り際に乙姫に言われていた。地上に帰つてきた浦島太郎は、周囲の変わり振りに絶望し、玉手箱を開けようとした。しかし、全く開かなかつたことに憤慨しつつも、乙姫の言葉を思い出し、意地でも開けてやると決意。丹後（京都府北部）から単身備前（岡山県南東部）にやつてきたのだった。

「そういうことだから、僕も鬼退治に参加させではもらえないだろうか。玉手箱の中身を見るまでは、死んでも死にきれないんだ」浦島太郎の申し出に、唸りを発しつつ少し困つた顔になる桃太郎。「僕は構いませんけど、金太郎さんが何て言つか……」「俺は一向に構わないぜ！」

「うわあつ！？」

突然舞い戻ってきた金太郎の出現に、度肝を抜かれた桃太郎は、へたり込んでしまつた。

「おどおどおど……脅かさないで下さいよつ……！」

胸を轟掴んで怒りと驚きで混乱しそうになつたらしい。声が震え、

目の焦点が誰にも合つてない。相当参つてしまつたようだ。

金太郎は桃太郎を引き起こしながら、呵々大笑する。

「はつはつは、大げさだな。そんなに驚くことないだろつ。と言

う訳で、宜しく。えーっと……」

浦島太郎は、眉をぴくりとも動かさず答える。

「浦島太郎です」

「浦島太郎さんね。あいよ、憶えたぞー。にしても、太郎が3人揃うなんてなあ」

金太郎がしみじみ言つたのを聞いて、桃太郎が首を縦に振る。

「ねえ。珍しいですよね」

「で、さ。船がなかつた訳だが、どうやつて行くかー」

「そうですね……」

小首を傾げて方策を頭の中で巡らす桃太郎。

「それについては懸念に及ばない」

浦島太郎が、自信に満ちた様子で言つた。

「なぬつ。あらかじめ手配してくれたのかつ？」

金太郎は眼を輝かせて問うた。

「そうじやないんだよ。ちょっと、2人も眼をつむつてもらつてもいいかな？」

両目を閉じ、何ごとかを唇のうちに唱え始めた浦島太郎。

金太郎から眼の輝きが失せた。眉をひそめ、浦島太郎の顔を見上げる。

「は？ 一体全体何をするつもりなんだ」

「金太郎さん、ここは浦島太郎さんの言つ通りにしましょう

まぶたを閉め、光を遮断しつつ桃太郎は、金太郎をなだめる。

「しようがねえな」

渋々金太郎が眼をつむつた瞬間に、照明が消えた。

3人をそのままに、セットの交換が手際よく行われる。物音が治

またところで照明がまぶしく光を発し、ステージを照らす。紙で作った岩肌のようなものが、あちこちに点在し、血の池を想像したのか大きめに切られた赤い紙が3人の傍に置かれている。

「さ、着いたみたいだ。2人とも眼を

浦島太郎が促すまでもなく、我慢の限界を超えたらしい。金太郎は、真っ先に眼を開けた。

「な、何だ？　この赤いのは！？」

「血の池地獄だ。敗者は、ここに投げ入れられるんだよ」

「まじかよつ！」

大仰に後ずさつて仰天する金太郎に対し、浦島太郎は冷静そのものだ。

「ここは……一体何処なんですか？」

桃太郎は、周りを窺いながら不安気な顔を浦島太郎に向ける。

「こここそが鬼ヶ島。鬼の墓地でもあり、鬼の支配者が

言い終えようとした時、

「ほーっほっほっほ」

と、女性のまるで勝ち誇った笑声が聞こえてきたではないか。袖から何者かが出てくる。その者はなぜかピンクのチャイナドレスを着用していた。

たまげた桃太郎が思わず訊く。

「あ、貴方は誰ですか？」

「あたくしは鬼ヶ島響子。おにがしまきょうこ島の主よ」

響子は扇子をぱたぱた扇ぎ、明後日の方向に高笑いをする。

鬼ヶ島響子（人間）の役は、未だに出てこなかつた侑治郎。本来なら、紗弥菜辺りが似合いそうな役だったが、じゃんけんで負けた為にボス兼女性の役をすることになった。と言うよりも、紗弥菜や成佳が着てしまつたら、刺激が強過ぎて衣装の変更を余儀なくされてしまう。チャイナドレスは、なぜか成佳が子ども用から大人用を持つていてどうせ着ないから、それと試しに着せてみたら細身の体にぴったり合っていたとのことで採用。

それと、女装するからには侑治郎以外の4人が色々な面と徹底した。ある意味方法を間違えれば拷問になる無駄毛処理は、侑治郎が水泳をやっており、水の抵抗をなくす為にも常日頃から剃っていたから行われなかつた。が、仕草の面は成佳と紗弥菜を筆頭に叩き込まれた。化粧は、侑治郎自身がやるのでないから、特に教えなくてもいいのだが、一応享受していた。そして本番のこの日は、紗弥菜のようないい髪の長さ・質のかつらをつけ、化粧もしっかりと施された。眼は完全な一重ではないが、それに近いものだつたのでアイプチを使用した。これにより、割と整つた顔立ちだつたこもあつてなかなかの美人に仕上がつた。ただ、常人より広い肩幅がネックではあつたが。当然胸にはブラジャーをつけており、質感を出す為に詰め物を入れている。

「ここに辿り着いたからには、生かしちゃおけないね。あたくしが直々に倒して差し上げるから、かかってらっしゃい」

因みに、侑治郎は声を一切出してない。ではどうしているのかと言つと、袖で成佳が台本を読んでいるのだ。これは成佳がやつてみたかったのこと、侑治郎が無理して甲高い声を出さないようにする為の配慮である。高飛車な女性を像としたのだろう。きいきい声に近い声質で普段は決して出さない声を、成佳は表情崩さず平然と演じている。侑治郎が口パクと動きを担当し、今のところ見事に機能していた。もつとも、これができるようになるまでは、相当な苦労があつたらしいが。

響子 侑治郎 は、挑発的に腕を前に伸ばして掌を上にする

と、親指以外の指を2度ほど一斉に折つた。

かかつてこいと誘つてゐるのである。

憤激した金太郎は、鍼を両手に持つと一気に駆け出した。

「くたばれっ！」

鍼を振り下ろす。しかし、響子に当たることなく、何か当たつて跳ね返された。金太郎は元居た所まで、転がつた。

「大丈夫！？」

「金太郎、大丈夫か？」

桃太郎と浦島太郎が金太郎を起こしながら、心配そうに声を掛け  
る。

「何のこれしき。大丈夫だ！ しかし、確かに叩き斬つたはずな  
んだけどな」

「ある一定の力であれば防げるのよ。ま、貴方達に倒されるような、  
やわなあたくしではありませんわ」

響子は耳につまでもへばりつく咲笑を発し、更に挑発に挑発を  
重ねる。

「くつそ、言わせておけばつ……！」

「金太郎さん、落ち着いて！」

今にも突貫しそうな金太郎を、桃太郎が後ろから脇の下に手を通  
して、ぐつと引き寄せる。

「浦島太郎さんも落ち着かせて下さいよ！」

悲鳴のような叫びを挙げて、浦島太郎を振り仰ぐ。

「む……ああ、すまない」

頸に手をやつて思案していた浦島太郎が、金太郎の頭を上からが  
しつと掴んだ。その時、にわか愁眉が開かれた。

「良い案を思いついた。敵にばれないように円陣を組もう」

3人が輪になり、浦島太郎がひそひそと策を披露し始めた。

「あらあら、相談？ 貴方達の浅知恵があたくしに通用するのかし  
ら」

そして、尾を引く喉に負担のかかりそうな嘲笑を響かせる。  
対して3人は誰も反応しない。

響子は、面白くなさそうに軽く舌打ちをして、せわしなく扇子を  
扇ぐ。

「ふんつ。まあ、いいわ。次の攻撃であたくしを倒せなければ、貴  
方達はそこの血の池に落として差し上げますから、せいぜい覚悟な  
さい」

騒音になりそうな高笑いを挙げていると、3人がこちらの方に体

を向けた。

「じゃあ、行くぞ。必ずや奴を討ち取る。いいな」

「はい！」

桃太郎は、太刀を抜き放ち敢然と構える。

「心得た！」

金太郎も鉢を頭上で一度回し、構えた。

浦島太郎の左右に居た金太郎と桃太郎が、先陣を切つて駆け出す。2歩ほど遅れて浦島太郎が銛 と言つても本物は危ないので、代用のマジックハンド を構えて突貫した。

「たあああっ！」

桃太郎が地を蹴つて、高々と飛び上がる。

「うおりやあああっ！」

金太郎は、足から滑り込んで振りかぶる。

「ほう、考えたわね。時間差攻撃とは！ でも、考えが大甘の甘ちやんだわ！」

1歩逃げようともせず、堂々と2人を迎へ討たんと、妖艶さが滲み出た笑みを閃かせる響子。

桃太郎の大氣を切り裂く太刀が振り下ろされ、金太郎の頭の後ろにあつた銛の刃の部分が、勢いを持つて襲い掛かる。

「2方向なんてまだ防御できる範囲よー。やつぱり、あたくしの勝ち

すると、間に合わないと思っていた浦島太郎の銛が伸びてきて、響子の腹部を直撃したと同時に、肩先と脛に形容しがたい激痛が奔<sup>はし</sup>つた。

「ぎやあああっ！」

断末魔の叫びとともに、響子は血の池地獄に落ちて絶命した。

「よっしゃ つ！ 倒したぞ つ！」

「やりましたね！」

「ああ、よくやったな！」

3人が歓喜の声を挙げて飛び回る。

と、飛び回つている最中、足裏に違和感を感じた金太郎。踏んだ物を拾つてまじまじと見つめる。

「何だ？ この鍵。おーい、2人ともこんなのを拾つたぞ」鍵が視界入つた途端、浦島太郎の田の色が変わつた。金太郎のもとへ素早く走ると、頭を下げながら言つ。

「すまないが、貸してくれ。なに、すぐ返すから」気迫に押されつゝも不思議に思つた金太郎は、鍵を渡して問うてみる。

「いいけど、どうしたんだ？」

「玉手箱を開けるんですよ！」

桃太郎は興奮を隠せないようだ。

がちやつと施錠を解除する音が鳴つた。

「2人とも開けるぞ」

浦島太郎の声もまた昂揚で震えていた。

返事をする代わりに生睡を飲み込む2人。

「そりっ！」

玉手箱を開けるや、白く濃い煙が辺りを包んだ。時間に照明が消えて、何かが積まれる音が響く。その音が終わると、照明が点いた。

「なーんだ、何にも入つてないじゃん」

「そうですね……」

「おかしいなあ……こんなはずじゃ……」

首をひねる。ふと、えも言われぬ何かを感じ取り、浦島太郎は顔を横に向ける。

「ああ……あ つ！」

顎を外さんばかりに絶叫して、両手を後ろについた。

「何だよるせえな……あ つ！？」

浦島太郎と同じ格好になる金太郎

「もう、煩いですよ。そんなに驚くことが……あ つ！」

桃太郎も無論同様である。

何故驚いているのか。

それは3人の視線の先には、うずたかく積まれた金銀財宝が、煌びやかに存在を誇示しているからだ。

3人は財宝に我先にと近付き、触つてみる。

「おおおつ！ 全部本物だ！」

「やつた！ やりましたね、浦島太郎さん！」

「ああ、2人が頑張ったからだよ。2人にも感謝だけど、乙姫様にも感謝しなければな。鬼を倒して財宝を得て……何だか生きしていく勇気が湧いてきたよ」

その後は全体を映す照明が消え、代わりにスポットライトが財宝をばら撒いて喜ぶ3人に当たつた。それも徐々に消えて行く。完全に消えたところで、後半はナレーションに代わった成佳の口が開く。「こうして桃太郎と金太郎と浦島太郎は、財宝を手に入れて平等に分け、それぞれの故郷で幸せに暮らしましたとさ。めでたし、めでたし」

観客達の拍手が体育館中に鳴り、天井に反響して耳を聾するほどだつた。園児達も喜んでいるのだろう。甲高い声を撒き散らしている。

照明が点つて成佳と侑治郎が袖から出てきて、真ん中に並んだ。その中で恥ずかしいような嬉しいような嬉しいような面持ちで、5人は深々と頭を下げた。

「終わった　っ！　私は自由の身だ　っ！」

爽奈が両手を突き上げ、喜んでいる。

「本当、すっごく緊張したね～」

胸を撫で下ろした真優は、緩みきつた笑顔をみなに振りまく。

「全くだ。でも、やりきった感はあるよな」

伸びをしつつ、侑治郎も満更でもないみたいだ。

「そうね。とにかく、無事終わって何よりだわ。それと、侑治郎はとりあえず化粧を落としなさい。肌が傷むわよ

紗弥菜は、化粧落としのオイルとコットンと化粧水を渡す。

「そうなのか。じゃ、着替えついでに落としてくるわ」

ステージの裏から出て行く侑治郎。

「あれ？ そういうやー、なるさんは？ どうか行っちゃったの  
爽奈の疑問に辺りを見渡すと、確かに成佳がいつの間にか居なくな  
なっている。

「本當だ。どうしたんだろ？」「…

真優は、首を横に倒して不思議がる。

「多分、お手洗いにでも行つたんじゃないの。そのうち帰つて来る  
と思つけど、珍しいわね。何も言わずに行くなんて」

言つて、引っ掛かりを覚え、何となく髪を搔き揚げる紗弥菜。  
結局、成佳が戻ってきたのは最後の班の劇が終わる頃だった。  
爽奈がこれ訊くも、表情は普段と同じく優しげだし、特に変  
わつた様子もなかつた。

しかし、若干の態度の違いに、成佳を除く3人は薄々気づいてい  
た。

「かんぱーい！」

爽奈の音頭で4人のグラスが上がり、それぞれ労をねぎらうよう  
に各自軽く当てていき、一通りそれが終わると中身をあおる。

「ふはーっ！ いやー、みんな今年もお疲れ様でした！ 年内に  
進路も決まって良かつた良かつた」

一瞬のうちに飲み干した爽奈は、1・5リットルのジュースのペ  
ットボトルに手を伸ばしながら、大笑する。

真優も喜色を面に表し、首肯する。

「そうだねえ。一般企業なんかは冬の時代、”士”の就く職業が有  
利だけあって私達はいいけど。大学に行つて、すっかり疎遠なつち  
やつた友達は大丈夫かなあ……」

最後の一言は眉を曇らせ、視線を宙に彷徨わせた。

「大丈夫だよ。きっとそのうちアメリカが本気出して、あつと言つ  
間に景気が良くなるよ！ ……あんまり分かんないけど」

紗弥菜が呆れた眼つきで、爽奈をじろりと睨む。

「いい加減なことを言うもんじやないわよ」

非難は一切受け付けないらしい。飛んできた視線を完全に無視し  
つつ、爽奈は隣に座つている成佳に寄りかかる。

「でもさ、なるさんの方がもつと厳しいよね」

切つたサンドwichを取り分けていた成佳が、動きを止めてそ  
うねえ、とつぶやく。

「かなり狭き門つて、講師の先生から耳にたこができるくらい聞か  
されてるわ」

成佳のお手製の「ーンポタージュを、スプーンですくつて飲もう  
とした侑治郎が、手を止めて意外そうな顔で訊く。

「よく知らないんだが、そんなに厳しいのか？」

「うーん、確かに……志望者は毎年2000人以上は居るんですけど、デビューがてきて尚且つプロダクションでちゃんと所属できる人は、1割居るか居ないかぐらいとか言つてました」

「そ、そんなに少ないのか……声優つてのは大変な稼業なんだな」心配そうにしている侑治郎を、安心させるかのように莞爾と成佳は笑う。

「でも、私は後悔してませんけどね」

成佳が声優を本格的に目指そうと志したのは、5月の卒業生講演会で成富果穂のスピーチを聞いてからだつた。もともと声優になりたいという気持ちはあつた。だが、自身の身の丈に合つてないとして、諦めていたのだ。

その日以来、人知れず資料を集めたり調べたりして、他の4人は内緒で事を進めてきた。ゆえに、文化祭の劇については好機だつた。声あてを行うと意見を言つたのは、文化祭の時に関係者に来てもらい、声を聞いてもらいたかったからである。だから、爽奈が志望事務所の履歴書とメモリースティックを見つけた時には、大層胆が冷えたそうである。翌日、封筒に入れて送つて返事が1週間経つたほどに返つってきた。行くとのことだつた。

かくして劇が終わつた後、関係者と密かに会つた。関係者は、成佳の声域の広さと演技力を買つて、事務所の附属の養成所に入所する際は斡旋するまで約束。成佳はその場で一いつ返事で了承した。あらかじめ両親・担任・学長（一応）と就職が決まつていた野瀬私立保育園の園長の鍋島加代子に話をつけていたのだ。

両親は、娘の人生なのだから本人の自由にさせる、との考え方を持つてゐる。成佳の告白を聞いた時は驚きはしたが、反対することなく承諾した。

担任は説得はしたが説き伏せられ、学長に至つては諸手を上げて賛成した。なぜなら、有名になつたらなつたで思う存分に宣伝してもらえる、と思っているからだ。

加代子は流石に難色を示した。しかし、成佳の話を聞き終える頃

には理解を示し、賛成した。

最後に4人にも告げた。爽奈と真優は、声優に多少なりとも理解があるから素直に祝福した。紗弥菜と侑治郎は渋い顔だったが、話を聞いて納得し、友人の門出を喜んだ。

当たり前だが今通つてはいる専門学校は卒業する。成佳自身、保育士と幼稚園教諭の資格は欲しいし、様々な人達に迷惑をかけてしまつたことに対し、筋を通す意味でも絶対だつた。

養成所の入所はほぼ確定ながらも、準備は怠らない。3月に選考試験が行われるまでの間に、やることは沢山あるのだ。今は独自の練習方法で声の演技力を高めたり、発声練習で歌唱力を向上を目指したり、演劇を学んだりしている。

なお、入学金や授業料は全て自己負担することにしていた。両親は出すと言つて聞かなかつたが、成佳は頑なに拒んだ。それゆえ、人生で初めて交通誘導とコンビニのアルバイトを始めた。交通誘導は、時給が1000円を超える上に、土日限定でも構わないとのことから。コンビニは、爽奈の斡旋。侑治郎も勤めている『ドーソン』に週3で入つてている。

結果、週5日は専門学校に行きながらバイトや自主練を行つていいことから、成佳は多忙な日々を送つていたのだ。

しかし、成佳は後悔していないと言つ。実際、初めてのバイトにもすぐに順応、新鮮味があるのか楽しくやつてている。

爽奈が駄々つ子のような口調で言つ。

「あー、早くなるさんの出てるアニメ観たいなー」

恐れ入つた表情で爽奈の顔を凝視する紗弥菜。

「馬鹿ね。そう簡単に仕事が取れるわけないじゃない。製作側は声のイメージを重要としていて、合わなかつたらすぐに切り捨てられるんだから」

紗弥菜の言葉に、鳩が豆鉄砲を食つたような顔付きになる爽奈。

「へえー、やっぱあんたって、知識を取り入れることに関しては貪欲なんだねえ。いつの間に知つたの?」

「煩いわね。金欄の友の友の職業ぐらい知つておぐでしょ。普通「やや照れながら言つた紗弥菜に、成佳はふわっとした笑顔を向ける。

「金欄の友だなんて、嬉しいわあ。流石、紗弥菜ちゃんは博識ねえ「あ、ありがとう」

すっかり照れてしまつた紗弥菜は、眼鏡のブリッジを指で上げ下げしている。

そんな紗弥菜を嘲笑せんばかりの笑みを口元に表しつつ、真優に話題を振る爽奈。

「そういうば、まゆつちも就職先を変えたんだよねー」

「うん。果穂さんと晋之介さんが働いてる野瀬児童館内にある野瀬学童クラブで働くんだよ」

学童クラブとは……小学校の児童の保護者が仕事等で居ない時、代わりに預かってくれる保育施設のこと。その施設には指導員があり、仕事内容は授業が終わつて放課になつた児童と遊んであげたり、おやつを与えてたり、宿題を見てあげるなどである。因みに、長期休暇中だと午前中から1日中預かることもある。

もともと真優は保育園もそうだが、こちらの学童クラブにもボランティアに行つていた。そこで働いていた1年先輩（侑治郎にとっては年齢的に同期）の成富果穂にかなり気に入られていて、行く度に一緒に働こうと乞われていたのだ。ただ単に年下の後輩が欲しかつただけかもしれないが、真優の気持ちは揺れに揺れていた。そして、文化祭が終わつて1週間経つたほどで結論を出し、保育園ではなく学童クラブに就職することに決めた。

当然、内定が決定していた保育園には申し訳ないのですが、とお断りを入れた。勿論だが、園長の加代子の所にも赴いて口述してきた。

加代子は、成佳の時とは違つて難色を見せることもなく、快諾した。何しろ児童館の館長も兼任しているのだが、ベテランの指導員が2人も辞めてしまうので人材不足を懸念していたからだ。それが

故に、むしろ心強く思つたからである。

加代子の鶴の一聲で真優の就職先は、あれよあれよと言ひ間に変更の手続きが完了してしまつたのだった。

「果穂からの勧誘が相当しつこかつたそりぢやないか。失礼だけど、本当に良かつたのか？」

侑治郎はその点が心配だつた。真優の意思ではなく、果穂の意思で無理矢理変更させられたのではないか、と感じていたからである。真優は屈託なく相好を崩す。

「それだけ頼りにされてるつて思えば嬉しいものだし、学童クラブは学童クラブでのやりがいを見出せたからね」

「そうか。それならいいんだ」

本人の意思とあれば何ら問題はない。侑治郎が内心ほつとしている、爽奈が膝を叩いてきた。

「何だよ」

お返しとばかりに指で頬をつついた。幼子のような滑らかな餅肌でふにふにとしており、触つていて気持ちがいい。

「そつちこそ何だよー。人が祝つてあげようと思つたのにー」

不機嫌そうに頬を膨らます爽奈。

5人の中では侑治郎が、最も多忙な日々を送つてきたと言える。卒論・就職活動・2つ掛け持ちしているバイト……それらを同時進行で1ヶ月間こなしていたのだ。

夏休み頃からこつこつと執筆していた卒論は、ボランティア経験が少ない侑治郎にとって、どうしても書かねばならなかつた。しかし、入り用も重なつたことから金銭的に厳しくなり、その話を聞いた爽奈の誘いで、コンビニのバイトを始めた。すると、結構忙しく滞つてしまつっていた。文化祭終了後からコンビニのバイトの日数を減らし、執筆を再開していたのである。

就職活動はそもそもしなくともよかつた。保育園附属のスイミングクラブのバイトと、週数回のボランティアで、十二分に加代子から高評価を得ていたからだ。

加代子は縁故で侑治郎を採用しようとした。

だが侑治郎は、それでは普通に受験する人に悪いと自身も受験すると言い出した。

何度諭しても無駄だったので、加代子はやむなく認めた。

11月中旬には一次試験が行われた。内容は小論文と面接である。因みに、採用する人数は3人だったが、当日集まつた受験者は50人も居た。設備が充実しているだけあって、当然とも言える倍率の高さであった。

1週間後に結果が届き、見事に一次試験を突破。12月初旬に一次（実技）試験を行う旨が書かれた書類を見て、侑治郎は急ぎ課題制作に取り掛かった。

これには他の4人も協力した。絵は爽奈と真優が、物語の作成は紗弥菜と成佳とともに卒論と同時進行ながらも、栄養ドリンクとコーヒーをがぶがぶ飲んで精根尽き果てる一歩手前になりかけたが、二次試験2日前には全て完成した。

卒論をさつさと提出し、ひたすら課題である言語の口演の練習を開始。そこであまりにも演技力のなさに、心肝でははらわたが煮えくり返りそうになつた成佳が指導し、ある程度身に付けることが叶つた。

一次試験は総勢10名。侑治郎は、6番目に発表することを試験官から伝えられた。中途半端な順番だったが、本番は練習の甲斐もあって、よどみなく処々に感情を込めて読む事が出来た。

そして、結果の通知がつい先日届いた。結果は、血反吐を吐きそうになりながらも頑張った甲斐あって合格だった。

「ああ、そうなのか。そりや、すまん。で、どんな方法で祝つてくれるんだ」

侑治郎は、ぱつが悪そうに頭を搔く。期待と不安を込めた瞳の中に、爽奈の童顔を映す。

「じゃあ、ちょっと眼をつむつてくれる?」  
「いいけど……何をするんだ?」

「質問を質問で返さない！ いいから、それとつむるーー」「はいはい……」

嫌な予感はするが、取り敢えずは従つた侑治郎。

ひと。

何がが侑治郎の唇に当たり、爽奈と侑治郎以外の3人はどうしたことで声が出さずに、傍観しているだけだ。

（な、何だこれは！？ も、もしかして……）

程好い弾力に心地よくなる。何十秒かそのままだったが、一向に離そうとしないので、つい好奇心で薄めを開けて口元を窺う。確かに唇と唇が重なり合つていて。が

「ん な つ！？」

奇声を張り上げ、頭を振つて振りほどき、驚愕を顔に貼り付けて後ずさる。

「たた、た、たた、た、た……たこ つ！？」

侑治郎が指示示す先には、爽奈が赤々としたこを両手で持つていた。

「はははは、見事引っ掛けたね！」

爽奈は爆笑を部屋中に響かせた。

「お前……そりや、ないだろ」

目じりが裂けんばかりに見開かれた眼を、侑治郎は爽奈に呆然と当てる。

「まあまあ、気にしない気にしない。さ、今日は朝まで飲み明かそつ！」

侑治郎の言葉など一切耳に入つていないので。爽奈は、嬉々とした顔でコップを高々と持ち上げ、叫んだ。

「……人の話を聞けよ」

侑治郎の消え入りそうな独語が、口内にむなしく響いた。

「ふうー、やっと終わった　っ！　私は自由だ　っ！」

大きく伸びをしながら、快哉を叫ぶ爽奈。

「さつきから何回言つてんのよ。もういい加減聞き飽きたわ」

紗弥菜は煩そうに言つた。もつ辟易といった感じである。

「でも、最後の試験だつたし、達成感と開放感が今まで以上に凄くあるよね」

真優がしみじみと擊破してきた試験を、頭の中で巡りす。

「そうねえ。これで試験が終わると思つと、嬉しくもあるし、寂しくもあるわ」

笑顔の中に寂しさを滲ませて、成佳は頷く。

「それもそうだけど、落としてないか不安だよな。最後の最後で再試は、流石に嫌だよな」

侑治郎の話を聞いていた真優と成佳が、もつともだと言わんばかりに首肯する。

せんべいをぱりぱりと音を立てながら食べていた爽奈は、呆れ気味に言つ。

「そーそー、やだやだ。でもさ、クラスの中では毎回誰2教科以上落として、涙目で再試を受けてるなんて奴も居るしね」

爽奈の答えに違和感が生じた紗弥菜。持つていたポツキーを指の代わりにし、斜め向かいに座つて居る爽奈にチヨコの付いて居る方を差し向ける。

「それはあんたのことでしょうが。私達が一生懸命教えるのに、理解しないなんておかしいわよっ！」

爽奈も負けじと手に持つていたポツキーを口にしようとしたが、

一旦中断していちじるのムースが付いて居る方を紗弥菜に差し向ける。

「しつれいな！　私は毎回落としてたのは1教科だけだつての！」

……あと、違うところがあるよ。まゆつちとなるさんは良いんだ

よ。でもねえ、あなたの教え方が上からものを語つてゐたいで憶えれないの」

「またあんたは自分のことを棚に上げる。それだから、再試を受けるはめになるのよ」

紗弥菜は肩をすくめ、差し向けていたポッキーを口の中に入れた。「むむつ。そういうあんたは

「

最後の定期試験が終了し、5人はしばらく平穏な日々を過ごして、講義は1月の中旬に終了し、あとは試験の結果次第で約2ヶ月間自由に過ごせるかどうか決まつていて、待機の状態が続いている。

因みに、ボランティアを2年間で100日間行えば卒業論文は免除される。なので、侑治郎以外の4人は書いていない。

「ん？ 誰だろ？」

爽奈の携帯から軽快な音楽が聞こえてくる。携帯を開き、メールの文面をしばし黙読する。

「誰から？」

真優が何気なく訊いた。

「んー？ とーちゃんから。何か叔父さんから蟹を沢山貰つたから、食いきれないから友達を誘つて今すぐこっちに来いってさ。と、いうことで蟹が好きな人、手え上げてー」

爽奈の呼びかけに、一も一も無く紗弥菜以外の3人は挙手した。

「あれ、あんたって蟹嫌いだつたんだ」

「そうじやないわよ。むしろ好きな方だけど……初対面の私達が、いきなり蟹をご馳走になつてもいいものなの？」

少しこうじた様子で紗弥菜は質問した。

爽奈は屈託なく笑う。

「別にいいんじゃない。美味しい物はみんなで食べた方が美味しいしね。細かいことを気にしてたら、食べれないよ」

「そういうものかしら……。それじゃ、お言葉に甘えようか。おす

そ分けのお礼も言いたいしね」

「そうね。爽奈ちゃんのお父さんには、間接的とは言え大変お世話を  
になつたもの。何かお土産を持って行つたほうがいいわね」「成佳の言葉に爽奈を除いた3人が、三者三様に首肯する。  
「だとすると、何を持って行つたほうがいいんだろうか?」

爽奈は若干嘆息を混じらせつつ、首を横に振つた。

「だーかーらー、そんなに気を遣う必要ないんだって。手ぶらで結構。それに」

口を一回つぐんで面映そうに笑みを作り、人差し指で頬を搔きながら、言い辛そうに口を開いた。

「私もみんなにはさんざんつぱら迷惑かけたし、何と言づかその…ほら、お礼みたいなもんだよ。だからさ、わざわざお土産なんて買う必要なんてないの。あとね、私は一秒でも早く蟹を食べたいの! お土産を買づ・買わないなんか言つてたら、とーちゃんと光樹に食べられちゃうよ!」

お土産の件では、知らず知らずの内に少し口調に怒氣も入つていた。

”光樹”と言つ名前を聞いた途端、爽奈と侑治郎を除く3人は懐かしそうな顔になつた。

「そうだね。こーちゃんの食欲たるや、凄まじいものがあつたよね」「全く。爽奈と真優も食べる方だけど、流石は男の子つて感じの食べっぷりだったわ」

「今年の夏は来なかつたけど、元氣にしてるかしらねえ」

口々に光樹について述べる3人。どうやら、光樹に対する悪い印象は一切ない様子だつた。

「ちょっと待つた。光樹つて誰だ?」

光樹について何も知らない侑治郎が没面を作り、訊ねた。

「ありや、言つてなかつたつけ。私の可愛い可愛い弟だよー」

「へえー、弟が居たのか」

「歳は8ぐらい違つけどね。でもさ、歳が離れた分可愛くて仕がないんだよねー」

嬉々として弟・光樹について語る爽奈の眼は、夢を語る少女のように煌いていた。

爽奈の溺愛つぶりにいささか呆れた侑治郎。しかし、同時に興味に惹かれた。

「さいですか。そこまでべた惚れしてゐなら、会つてみたいな。たまには同性と話したいし」

爽奈は、満面に笑みを閃かせて促す。

「ほらほら、みんなも会いたいでしょ？　光樹もきっと楽しみにしてるよ。だから、早く支度をしてさつさと行こうよ」

それもそれだ、と4人は立ち上がって「また後で」の一言を残し、部屋から出て行つた。

「何だこの門は……」

やつと出た言葉だつた。それまで侑治郎は、あんぐりと口を開けたままその場に立ち尽くしていた。

視線の先には10メートルはあるうかと思われる木製の門が、そびえ立つてゐる。門扉もどうやつて加工したものか大きく重厚そうで、とてもじやないが、人ひとりの力では開けられそうにはなかつた。

他の3人も一様に驚いた表情だ。話は爽奈から何回か聞いていたが、まさかここまでとは夢にも思つていなかつたのである。

しばし呆然としていた侑治郎だつたが、ふとつぶやき始める。

「俺の実家も農家だけど、どんだけ田んぼ持つてたらこんな門が出来るんだか……」

「とーちゃんの話では、『先祖様が相当苦労した人だつたんだつて『凄まじい苦労人だな。……で、どうやつて入るんだ？』」

門扉には取つ手こそ付いてはいるが、全員が力を併せて開けようとしても、びくとも動きそうもなかつた。

「今日はとーちゃんが有給休暇を取つて休んでるから、合言葉だね」「は？」

侑治郎が頓狂な声を発したのと同じ頃合に、爽奈は門に備え付けられていたインター ホンを押した。間もなく、

『どちらさまです？ 眼鏡に続く合言葉をどうぞ』

と、低く落ち着いた男声が耳に入ってきた。

「娘は最高」

『おお、その声と答えは爽奈だな。よーし、今開けてやるから待つてろよ』

数十秒の間があり、門扉がぎぎぎ、と軋む音と共に大きく開かれた。

「それじゃ、みんな入るよー」

いつの間にか自分の荷物を持っていた爽奈は、先陣を切つて門の中に入つて行つた。

「ちょっと、爽奈！ 待ちなさいよつ！」

4人も慌てて荷物を持つて、追いかけるのだった。

新幹線で2時間、バスで1時間、徒歩で30分。それが爽奈の実家までの道のりだった。爽奈がど田舎と言つてとは言え、バスを降りてからが大変であつた。なんせ、この時期晴天が続く5人が住んでいる野瀬市とは全く違うのだ。

まずは雪が降つてゐるせいか寒い。訊けば一桁どころか5度に達しない日も多々あり、雪が全く降らない都會育ちの紗弥菜と真優と侑治郎にとつては、生き地獄にしか思えなかつた。

次に、爽奈の実家の田舎は深々と雪が降りつゝもり、見渡す限り建物も樹も何もかもが雪色に染め上げられている。

積雪量は、申し訳ない程度に少しだけ降つて終わる野瀬市とは違ひ、大人ひとりの膝下まで埋まる程であり、何をするのにも難渋する。しかしながら、人通りが少ない所ならともかく、車の往来がある道路は除雪車と消雪パイプよつて除雪されているので、移動の不

自由は特はない。

だが、消雪パイプから出る水の量が尋常じゃない箇所もあるもので、消雪パイプで融けた水と消雪パイプから出た水が相まり、冬の道路は常時まるで大雨の降った後の状態になつてしまつのだ。

当然、車が通れば水が跳ね上がる。歩道を歩いていようと、容赦なく水がぶつかることもある。それについては爽奈は、説明済みだつたので対策もばっちりだつた。しかし、靴の方の対策はばっちりではなかつたので、爽奈と北方の雪国出身の成佳以外の靴は、爽奈の家に着く頃にもなると雪と水のせいで、ぐちょぐちよになつてしまつっていたのである。

やつと暖を取る事が出来るので、ほつと安堵の息をつく4人。特に成佳を除く3人は、靴が濡れ、靴下も濡れ、足までもが濡れて身体の芯の芯まで冷え切つていたので、安堵の息も大きめだつた。

雪を払つて玄関に入ると、そこは既に普通の暖房が点いている部屋並みに暖かかった。

そこに、早くも部屋着に着替えてエプロンを身に付けた爽奈が、廊下の最奥の部屋から飛び出してきた。

「みんなー、こつちこつち。この部屋の手前の部屋で着替えるんだら、着替えて。洗濯かごがあるから、濡れた物はそこに入れて下さいなー。あ、侑治郎は光樹の部屋を使ってね。部屋は2階にあるから。あー、あと玄関マットの近くにタオルがいっぱいあるからそれを使つてもいいよ。えーと以上かな。……いや、あともう一つあつた！ 着替え終わつたら、侑治郎以外のみんなが着替えた部屋の隣の部屋に入つて待つて。今度こそ以上！ んじや、私は料理の準備があるんで」

立て板に水とはこのことだらう。そう感じさせるような指示を一方的に出すと、爽奈は奥の部屋に引っ込んでしまつた。

4人は圧倒されたらしく、しばらく金縛りにでもかかつたかのように動けなかつた。

「とりあえず、爽奈ちゃんの言つた通りしましょうか

「ちち早く頭の中で処理し終えた成佳が、タオルで頭とジャンパーを拭き始めた。

3人もそれぞれ汚れや濡れた箇所をタオルで拭いていく。やはり、足は血が通つてないせいか青白く、靴下越しでも水に当たつては為に、長時間浴槽に浸かった時みたく皮膚が皺だらけになり、ぶよぶよになっていた。

「うわあ……凄いことになつてる……」

靴下を脱ぎ、タオルで拭いた足をまじまじと凝視する真優。

「私も。これつて直るのかしら……？」

紗弥菜も初めて見たのだろう。困り切つた聲音で言つて、足の裏を指でつづつしている。

「心配ないつて。時間が経てば元に戻るわ。俺なんか水泳をやつてるから、ショッちゅうそつなるぞ」

侑治郎が苦笑いしつつ、2人を励ます。

「さて、と。俺は2階に行くわ。靴下を履いて来るだけだから、すぐに戻つてくるけどな。じゃ、あそこの部屋で」

廊下を歩いていくと、中ほどに行つた所の左側に階段があつたので、ためらいもなく登る。

その後3人も、爽奈に着替えるようにと言われた部屋に行き、荷物を下ろして今度こそやつと一息付けたのだった。

そこには山盛りの蟹があつた。<sup>あんせきしょく</sup> 暗赤色だつた体色は、茹でられたので今や赤々とした色となり、圧倒的な存在を誇示している。種類は冬の味覚として人気を誇るズワイガニである。

他にも、茶碗蒸しやら炒飯やら刺身やらサラダなどが並び、華やぎを見せていく。

本来なら全部爽奈が調理する予定だつたが、おびただしいと形容してもいいぐらいに、ズワイガニが台所に所狭しと放置されていたので、成佳と侑治郎も手伝う事にしたのである。

紗弥菜と真優は、前者がからつきし駄目で後者はそんなに出来ないでの、料理や皿や箸等の運び役に徹した。

完全に終わつたのが午後5時だつたから、少し早い晩御飯時になるかと思われた。しかし、爽奈の父親と弟の光樹が不在の為に、好き勝手食べる訳には行かなかつた。

そして今、1時間経つて午後6時に時計の長針が指し示そうとしていた。その間5人は出来上がつた数々の料理前に座り、凝視・沈黙の態を保つている。まさに蛇の生殺しであつた。

誰かのか細く空腹を告げる音が鳴り、静寂によく通つた。

「もー、とーちゃんも光樹も何やつてんだろう。料理が冷めちゃうよー」

その音を契機と捉えたのか、沈黙と空腹に耐え切れなくなり、爽奈は眉を困らせてぶうたれる。

「本当ねえ。道路が混んでるのかしら」  
成佳がたちまち心配顔になつて言つた。

その時がらがらがら、と戸が滑る音が玄関先から鳴り渡つた。次いで、床を強く踏み鳴らす音が聞こえたと思えば、突然ふすまが開かれた。反射的にみなの視線が集中する。

「ようこそいらっしゃいました。そして、ご無沙汰します」

そこには正座をし、仰々しく丂つ折り目正しく体を曲げ、指をついて挨拶する野球のユニフォームを着た少年が居た。

「では、後ほど。こんな格好で失礼致しました」

すくと立ち上ると、一礼をして辞していった。

「……今の誰？」

少年の若年ながらも礼儀正しい挨拶に驚いた侑治郎が、感心したように爽奈に問うた。

「今のが光樹だよ。結構可愛い顔してたでしょ？」

答える爽奈の面輪が自然と誇らしげになる。

「ん？……ああ、どちらかと言うと女性寄りの顔だつた気がするな。髪は俺より短かつたけど」

「でしょー？　あーあ、このまま声が高いままでいてくれればいいんだけど、どうにかして第一次性徴を止められないのかなー」「さう」と危険なことを言つた

そんな会話をしていると、階段を小気味よく駆け下りる音が聞こえ、一拍間をおいて普段着に着替えた光樹が部屋に入ってきた。

「光樹　っ！」

すかさず爽奈が押し倒さんばかりの勢いで抱きついた。

「お、お姉ちゃん……抱きついてくれるのは嬉しいんだけど、みんなさんが見てるし……」

弱りきつた声をあげる光樹に、爽奈はにかつと仰ぎ見る。

「むしろ見せつけてんの。そんなに恥ずかしがるなよ～」腕を伸ばしてぽんぽんと光樹の頭を軽く叩く。

何も知らない人から見れば、この光景は調子の良い妹が常識人の兄を励ましてるよう見えるだろう。実際は反対なのだが、十中八九は信じられないと言うに違いなさそうだった。

「にしても、あんたまたでつかくなつたねー。なるさんと同じぐらいじやないの？」

「ええ～、どれどれ」

成佳が光樹の隣に並んだ。しかし、まだまだ成佳の方が若干高く、

見下ろす感じであった。

照れ笑いをしつつ目線を成佳に移す光樹。

「ようやく160cmなので、当分は成佳さんを超せませんよ」

「あら、そんなことないわよ。ねえ、紗弥菜ちゃん」

振られた紗弥菜は、得たりとばかりに顎を引き寄せる。

「そりよ。光樹はまだ小6なんでしょう？ 運動もちゃんとやっているみたいだし、余裕で私達を超せるわよ」

羨望の眼差しを送る真優。

「私もこーちゃんぐらいたい欲しかったなあ……」

「ありがとうございます。真優さんは今のままで充分魅力的ですよ」

「えーっ、そんなことないよ」

などと言いながらも、満更でもないのか隣席の侑治郎の背中を、照れ隠しでばんばん叩いている。

ふと、光樹が訝しげな表情になつた。どうしても、見慣れない人物の存在が気になるらしい。

「ところで……お姉ちゃん。真優さんの隣に座つていて、どちら様なの？」

光樹のスポーツ刈りの頭を触つていて、恍惚としていた爽奈が視線の先を追う。

「あー、紹介すんの忘れてたね。あちらさんは、円城寺侑治郎。私もよりも1歳年上だけど、ダブつたから同学年になつたんだ。あんな形<sup>なり</sup>だけど、なかなかの良い男なんだよ」

すると、たちどころに光樹の顔が真剣味を帯びたものになつた。抱きついている姉を優しく引き離し、ゆっくり侑治郎の許へと歩み寄り、端然として座つた。

「ど、どうも。お姉さんにはいつも世話になつてます」

「いえいえ、こちらこそ姉がお世話になつています。と言つよりも、姉がご迷惑ばかりかけてしまつてしまつてすいません。かなり子どもっぽい姉ですが、これからもどうぞ宜しくお願ひします」

言い終えるや、うやうやしく頭を下げる。

「あつ、よ、宜しくお願ひします。何もそこまで丁寧にならなくて  
も……」

「いいえ。いづれは義兄・義弟の関係になるのですから、今から敬  
意を払つて行かないと駄目だと思つんです」

脊髄反射的に侑治郎は、気になつた言葉を聞き咎める。

「ん？　『義兄・義弟』……？」

「え？　……侑治郎さんは、姉とお付き合つしてないのですか？」

お互いに疑問符を頭に浮かべ、眼と眼を合つ。第三者から見れば、  
何とも間抜けな光景だろうか。

暫時、部屋一帯が水を打つたように静かになつた。

頬が破裂せんばかりに笑声を溜めていて耐え切れなくなつた爽奈  
は、とうとう「ふはつ」と開口。大笑し始めた。釣られて他の女性陣も  
おかしいのか、部屋中に笑いを響かせた。

「ちよつとちよつと、光樹。私と侑治郎は恋人同士じゃないんだよ。

……そうだねえ、親友と書いて”とも”と呼べる関係かな」

「え……ほ、本当に……？」

「うんつ。まじで」

爽奈は爽快な笑みを湛え、明るく言い切つた。

「……すすす、すいませんでしたっ！」

叫ぶように頭を尋常じゃない速さで下げ、侑治郎に謝る光樹。

「ははははは、確かにいきなり知らない男が家に来たら、そう勘違  
いしてもおかしくないよ」

かぶりを横に振り、侑治郎は思う存分に笑い飛ばす。

「光樹くんはお姉さん想いなんだな。爽奈、良い弟を持つて幸せじ  
やないか」

「そ、そんな……」

「そうでしょー。だつて私の弟だもんつ」

恥ずかしそうに謙遜しているが嬉しそうな光樹に、相も変わらず  
平面のような胸を張つて、鼻高々の爽奈。

と、突然すっとふすまが開かれた。開けた人物が、思わず後ずさ

る。

「おおっ、びっくりした。……爽奈の友人方だね。遠路遙々ようこそいらっしゃったね。私は爽奈の父、江里口常康です」

初対面組は、一様に頭を下げる。

穏やかな微笑みを満面に広げ、常康も一礼する。それから進み出でから折り目良く正座した。

「爽奈がいつもお世話になつております。光樹から聞いた話では、相当」迷惑を掛けていたとのことで申し訳なかつたね。今日は私たちのねぎらいの意味を込めて、蟹をたくさん食べてゆっくりしていって下さい。わざ、冷めないうちにどうぞどうぞ」

すつゝと立ち上がり、上座に座してテーブルの中央に据えて置いた鍋の蓋を取つた。

爽奈はさつさと適当な場所に座り、他の面々もそれに倣う。

全員が座つたことを確認した常康は、おもむろに手を併せた。

「それでは、みなさんも手を併せて下さい。……頂きます」

念じるようになつと、爽奈も快活な調子で言つ。

「いつただきまーす！」

「頂きます」

「あ、い、頂きます」

光樹は四六時中父・常康と居ると言つても過言ではないので、特に動じもしなかつた。が、4人はまさか今時分にきちんと挨拶をして頂くとは思つていなかつたので、箸を慌てて置く結果となつた。

数時間後。

蟹に加えて酒も振舞われたので、酔いが五臓六腑どころか全身に染み渡つた初対面組は、なかなか良い感じで出来上がつてしまつた。なんせ、ほぼ全員20歳になつたと言つのに、普段から酒を嗜む習慣が皆無と言つても過言ではない連中だつたからである。

しかもアルコール度数の高い日本酒を飲んだことから、1合ほどだけの量で思考回路が吹つ飛び完全に幼児化した爽奈は、紗弥菜と

成佳の胸を揉むだけ揉みつくし、真優と侑治郎に抱きつき回るなど狼藉を散々した挙句、早々に寝くたばってしまったのだつた。

爽奈はこのように痴態を演じてしまつたが、4人も結構危なかつた。かろうじて正氣を保つてゐる状態でこれ以上飲もうものなら、その場に寝てしまふか、自分の中の誰かが騒ぎ出してしまふかもしない。自分も爽奈みたいになつたら……と、考へるだけでも粟が生じる思いに駆られる。そう思つと、しきりに勧めてくる常康をどうにしてかわそなうかが問題となる。しかし、そんな心配をする必要もすぐになくなつた。光樹が上手く両者の間を立ち回つて、酒の飲料を何とか許容量を超さない程度までに抑えられたからである。こうして現在、4人は酔い潰されることなく、かつかする熱くなつた頭を何とか抑えつつ、常康のいつ終わるか検討もつかない話を延々と聞いてゐるのだ。

会つた当初は、温厚そうな雰囲気を周りに振りまいていた常康だつたがしかし、酒の杯を重ねることに段々と温厚な笑みから豪快な笑みに変貌し、謙虚且つ丁寧だった態度もほほ真逆なものとなつてしまつた。すつかり饒舌になり、自分のことや光樹のことを喜怒哀楽をふんだんに使つて、まるで<sup>はなし</sup>家が戯曲を客に聞かせているようであつた。

「おい、光樹。このコップに水を汲んできてくれ」

愉快そうにげらげら笑いながら、常康は光樹に命じた。

「うん、分かつた」

間もなくして水が並々と注がれたコップを、光樹は常康に手渡した。

常康はそれを一気に飲み干すと、4人の顔をさつと見渡しつつ、おもむろに口を開いた。

「爽奈は……今も小さいけど、幼稚園に通つてた時から身長が低いほうでね。でも、その分ちょこまかと動いてなあ。まあ、快活に日々を過ごしてたんだよ。しかし、13年前に母親が死んでからは、しばらくの間は嘘のように大人しくなつてしまつた。

いくら機嫌を取ろうとも、悲しげな顔を向けるばかりで情けない話、俺だけの手には負えなくて病院に連れて行こうとしたものだ。そんなことを思つてた次の日の朝、爽奈はまだ眠つていた俺の背中に乗つ掛かってきて、嬉しそうな声で『夢でお母さんが出てきたんだよー』と、言つてきた。爽奈の話では、笑顔を絶やさず人に優しくするように、と言われたらしい。その日から明るい爽奈が帰つてきて良かつたんだけど、己の無力さを強く感じさせられたね。その後、家では年の割に結構元気一杯だったが、学校では年相応に落ち着いたんだろう。小学校では少しば落ち着かせて下さいだつた通知表の担任の一言も、中・高ともなると見られなくなつて、学校ではかなり自我を抑えているんだなつて思つた

一旦口を閉じて唇を舌で舐める。そして、苦笑いを浮かべつつ言葉を継いだ。

「しかしなあ、光樹から聞いて驚いた。何しろ、去年帰つてきたこいつの開口一番が、『父ちゃん、大変だ。お姉ちゃんがぶつ壊れて、幼稚園児みたいになつてたよ』だから、一瞬言つた意味が理解できなかつた。だがね、よくよく考えれば、爽奈の年齢不相応とも言える有り余る元気が、いつまでも抑えられる訳がなかつた。君達の人生柄や雰囲気が凄く良いし、温かい。これは俺の憶測に過ぎないんだけど、多分、爽奈にとつてやつと安息の場を見つけられたんだと思う。ただ、中・高の時に抑えていた欲求が爆発したみたいだから、君達には多大な迷惑をかけたことを親としてすまないと思う。……でも、本当に感謝している。きっと爽奈も素晴らしい親友が出来、一緒に過ごせて幸せな2年間だらう。寝顔を見るだけで一目瞭然だからな」

吐露しきつて満足そうに1人頷いた途端、壁掛け時計からぼーん、と言つ重低音が響いた。時計の長針は12を指している。

「おつと、長々とすまんね。さて、俺は先に休ませてもらうよ。歳のせいか、もう眠くつてね。それじゃ

4人は会釈する。

「お休みなさい」

よつこらせ、と親父全快の掛け声とともに、立ち上がる。しかし、酒のせいもあってか足元がおぼつかない。

見かねた侑治郎と光樹が、ふらついて倒れそうな常康の体を支えた。力が全然入っておらず、ぶらぶらしている腕を2人はそれぞれの肩に回す。

「おお、わざわざすまんね。侑治郎くん、君は気が利くねえ」「いやいや、そんなことありませんよ」

謙遜しつつ侑治郎は、ふすまを開ける。

「侑治郎さん、すいません。全く、人様の世話になっちゃいけないって言つてたのに……」

光樹が唇を尖らせて極々ぼそつと言つたのだが、常康は聞き逃さなかつた。凄みのある笑顔を閃かせ、光樹の顔を覗きこむ。

しかも無言であるから、普通の人間ならば詫びの1つも入れたくなるだろつ。だが、これも酔つた時の常康の常套手段なので、光樹は軽く流した。

ふすまが閉じられ、居間は嘘のように静かになった。

3人の間に会話はない。壁掛け時計の秒針の進む音と、爽奈の小さい寝息が聞こえるのみだ。

みな、常康の話の内容を心中で復誦し、それぞれに感じ入つている様子だつた。

やがて、紗弥菜がおもむろに腰を上げた。

「私達も寝よ」

成佳と真優はそつだね、と首肯する。

「じゃ、私はテーブルを拭くから、紗弥菜ちゃんと真優ちゃんは、コップを台所の方に持つて行つて

「分かつたわ」

「はーい」

因みに、テーブルにあつた食べ物や食器類などは、既に光樹が随時片付けていた。なので今は、酒が入つたコップが人数分あるのみ

で、他に何も片付ける必要がなかつた。

「コップを洗い終え、紗弥菜と真優は居間に戻つてきた。無防備にも大の字で体をぴんぴんに伸ばして寝ている爽奈を、紗弥菜が抱きかかえて3人は揃つて居間から出た。

そこに、仲良さげに雑談する侑治郎と光樹が、2階から降りてきた。

「お、寝るのか？」

ほほ素面に近い侑治郎の問いに、紗弥菜は頷きつつ少し面映そうに視線を逸らしながら、投げるように答える。

「少量とは言え慣れないお酒のせいで、眠くなつたのよ」

「はははは、まあ、日本酒だからな」

侑治郎が苦笑した。酒に強いのか分からぬが、常康に大量に勧められたのにも関わらず、全く酔わなかつたのである。

やや顔色の悪い女性陣に比べて血色も良く、本当に何もなさそうだ。

「……あんたは沢山飲んだくせに、大丈夫なのね」

卒然としてこみ上げてきた気持ち悪さを、唾を飲むことで治め、紗弥菜が更に突つ込んだ。

「何でだろうな」

侑治郎は渴いた笑いを発するだけである。

会話が途切れた所で、満を持したように光樹が進み出でくる。

「今日は本当にありがとうございました。父ちゃんも『若い女の子と話せてよかったです』と、言つてしまつたし、僕もみなさんとまた逢えて楽しかつたです。それに」

一旦声を止めてにこりと微笑み、みんなの顔を順繰りに見つつ、続けた。

「姉のことも改めてよく知ることが出来ましたし、みなさんとの仲もますます良いことが分かつて安心しました。これからもご迷惑をおかけすると思いますが、どうか宜しくお願ひします」

誰かが返答する前に、丁寧にお辞儀し、お休みなさい、と、一言

言い残すと階段を軽快に上がつて行つた。

「本当に良い子だね。」一ちゃんは

真優は、田を細めて純粹に光樹を褒める。

「そうねえ。日本でナンバーワンの弟と言つても過言じやないわね」「成佳も重ねて褒め称える。

「爽奈も爽奈なりに、大変な人生を送つていたのよね……」

腕の中ですやすや眠る爽奈の無垢な顔を見ながら、常康の話を述

懐する紗弥菜。

「ま、親父さんの言つた通り今は自分を思つ存分出せるみたいだし、いいんじゃないか」

あぐびを噛み殺し、若干間の抜けた調子で侑治郎が言つた。

「そーちゃんと居て楽しかったねー。私は今まで生きてきた中で、最高の2年間を過ごしたと思うよ」

真優に言われてみてみなが、爽奈と過ごしてきた日々を心に浮かべる。嫌な出来事が皆無と言つてもいいほどであり、良い出来事だけがどんどん脳裏を埋め尽くしていく。

自然と表情が柔らかなものになり、心根が温かくなる気がする。察知したかたまたまなのか、爽奈が幸せそうに相好を崩した。それはまるで過ごしてきた日々を思い出してくれる親友達に、感謝するような可愛い笑顔であった。

## 20章……それが歩み続ける道

「しきあわせなら、手をたゞたゞ！」  
「あわわ～」  
「しきあわせなら、たゞいじでしめそつよ、ほら、みんなで手を  
たゞたゞ！」  
「あわわ～」  
「すとおーつぶ！ 誰だー、インディアンの真似をしてるのは  
つー！」  
「はーい、ぼくでーす！」  
「また空也かー。やつてくれるじゃないの。覚悟は出来るんだろ  
うね？」  
「ぜんつぜんできてないよー。」  
「あつ、こり、待てつ！」  
教室から飛び出して行った空也を捕まえる為に、爽奈も物凄い勢  
いで教室から出て行った。  
「またでていつちやつたね」  
「ねー。これじゃまにあわないよー」  
呆れ顔で口々に言い合つ園児達。と、ピアノの前に一人の男子園  
児が座り、みなの方に顔を向けた。  
「じゃあ、またぼくがせんせいの代わりをしてあげるよ」  
「星夜くんはピアノがおじょうずだからね。きょうもおねがーー」  
「うん、まかせて！」

昼休み。

爽奈が子どものように嬉しそうな表情を浮かべながら、弁当を食  
べていると、一人の壮年の女性が近付いてきた。

「あ、えんてふ」

口をもじもじ言わせながら笑をかける爽奈に、園長の鍋

島加代子は苦笑を滲ませつつ、爽奈の肩を軽くぽんぽんと叩いた。

「あんた。また練習をそつちのけで空也を追っかけ回してたでしょう?」

「んぐり

思わず噴飯しかけた爽奈だったが、手で口を押さえて何とか防いだ。コップに入つてたお茶を、口内に入つていて咀嚼物と一緒に飲み込むと、深く安堵の息をついた。

「だつて、ふざけたうえに逃げたんですもん。手を叩けばいい所で、インディアンみたいに掌で口を叩いて『あわわ』ですよ。そりや、とつ捕まえて叱らなきや」

なるほど、と頷く加代子。

「確かにその行為について叱るのはいいわ。でも、別に追いかけなくてもいいんじゃない。他の園児達をあろそかにしてしまつては、いつかみんな爽奈の言つことを聞かなくなるわよ。それに、逃げた園児の対応については、他の先生が担当するつて前にも言つたばかりじゃない」

厳しい語調が雨あられと爽奈を襲つた。だが、爽奈は不服そうに頬を膨らませ、言い返す。

「その担当の侑治郎が今日は居ないから、私は必死で追いかけたんですよ。万が一道路に飛び出して轢かれたりでもしたら、どうするんですか」

「あ……」

言つたきり、口をぽっかり開けて一の句が告げない加代子。

「『あ……』つて加代子さん、まさか……」

爽奈の危ぶむ声が耳朵を打ち、我に帰つた加代子は軽く喉払いをし、気まずそうに取り繕つ。

「そう言えば、成佳ちゃんの方は大丈夫なのかしらね?」

「大丈夫も何も、ほほ1週間後は秋明祭ですよ。今更ドタキャンつてことはないでしょう」

数年経ち成佳は、声優としての転機を迎えていた。これまで端役・

脇役を多数こなしてきたのだが、1月から始まるアニメで主人公役に抜擢されたのだった。

当然、プレッシャーは計り知れないものがあるが、それでも成佳はスケジュールを空けてでも加代子の呼びかけに応じたのだった。

「それもそうね」

「あ、そうそう。昨日なるさんに電話したら、後輩の子も連れて来るとか言つてましたよ。名前は何て言つたか忘れましたけど」

「そう、それは楽しみが一つ増えたわね」

莞爾と笑う加代子に、爽奈が更にあつ、と言い、付け加えた。

「まゆっちの人形劇で使う人形も、もうちょっとで出来るみたいですよ」

真優は野瀬保育園内にある学童クラブで働いていた。手芸の腕はここ数年で更に上がつていて、ぬいぐるみ作りから端を発し、セーターや手袋やマフラー や刺繡など縫い物関係なら何でも出来るようになつていて。今もこつして、ぬいぐるみ作りを依頼されている。

「真優ちゃんには大変のことをさせたわね。終わつたら、学童クラブの先生方も誘つてみんなで打ち上げでもやりましょうか」

大賛成とばかりに首肯してから、喜色満面に開口する。

「いいねー。いや、いいですねー。ぱーっとやりましょうよ、ぱーつと」

「ふふ、別に無理して丁寧語を使わなくていいのよ」

照れくさそうに頭を搔いてから、爽奈はまたも不満をぶつたれる。「それにしても、侑治郎と紗弥菜の休みが一緒つてどういうことなんですね」

侑治郎と紗弥菜は爽奈とともに、野瀬私立保育園に勤めている。

得意の泳ぎを活かし、同保育園内にある野瀬スイミングクラブで週3日ほど教えている。園児や小学生のコーチも担当し、丁寧且つ優しい指導で高い人気を得ていた。

紗弥菜は、前述通り野瀬私立保育園で働きながら、小説を毎年投稿し続けている。が、未だに賞に恵まれず、作家としての道はまだ

まだ遠そうだつた。

「どういづことつてたまたまよ。あ、もしかして……」

加代子は含み笑いを喉で響かせ、爽奈をからかう。

「何ですか？」

怪訝に問う爽奈。

「何でもないわ。と、私は用事あるから失礼するわね」「はあ」

「じゃ、午後からも頑張つてね」

そう言つと加代子は、そそくさとその場から立ち去つてしまつた。  
(最後のは何だつたんだろ)

勿論、からかわれたことなど全く分からぬ爽奈であつた。

「さあー、みんなちゃんと着替えたね！　じゃ、砂場へ行つてよーしー！」

園児達が元気な声を挙げて、砂場へ駆け出して行く。季節的には結構厳しいものがあるが、子どもは風の子元気の子と爽奈が勝手に提唱した為、長きに亘つて続いている。しかし、流石に今週までと園長の加代子に釘を刺されているので、実質今日が今年の砂遊び納めになつていた。

伸びをしながら軒下から出ると、木枯らしが爽奈を見舞つた。身震いを隠すようにまたひとつ伸びをして、雲は多いが晴れた空を見上げる。

季節柄、普段から底抜けに明るい爽奈でも感傷に浸る。

(おかーさん、元氣でやつてるかなあ……)

と、雲間から太陽が現れるや、暖かな陽光が爽奈を包んだ。  
それだけで母親が答えてくれたのだろう、と思つた。

爽奈は空に向かつて顎を引き寄せると、視線を正面に戻し、砂場へと元気よく駆け出して行つた。

園児達に負けないような笑みを、閃かせながら。

終

## あとがき

まずは読んでいただき、ありがとうございました。

なぜ、保育士になりたい人物を書いたのかと聞いいますと、私自身がなりたかった職業のひとつだったんですよ。

多分、小学校5年生ぐらいの時から漠然と思っていたのでしょう。6年生の時、総合学習か何かの授業で複数のクラスメイトと紙芝居を作つて、保育園を訪ねたことがあるんですよ。あまり憶えていないのですが、園児達は喜んでたと思います。紙芝居終了後は、園児達と遊んだんですが、複数の園児にぶんぶん振り回されました。楽しかつたですし、今となつては良い思い出です。

では、なぜ保育士や幼稚園教諭の専門学校に行かなかつたのか。答えは単純でピアノがまったく弾けないのです。弾けるとしたら、エリーゼの憂鬱の最初の テレテレテレテレテレテー の部分と、ねこふんじゅつたを高速で弾けるぐらいなもんなので、ものあつさりと諦めました。まあ、未練はありますけれども。

それでは、本当にありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7293w/>

---

良い子の味方

2011年9月16日21時59分発行